らっきー♪

いちお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
らっきー♪

【Ｎコード】
Ｎ０８２５Ｓ

【作者名】
いちお

【あらすじ】
公爵家の下働きをしているアネットと、その公爵の息子であるケヴィン。同じ邸で育ちながら、出会ったのはケヴィン１６歳の年。しかもふかふかなベッドの中。
意思の疎通の食い違いから“知り合い”になった二人。互いに結ばれることがないとわかっているからこそ、頑なに距離を保ち続けていたはずが――。　完結いたしまして、現在おまけを更新中です。

「これがわたしの旦那さま」の過去の話になります。本編をご存知でなくてもわかるように心がけておりますが、わからないことがありましたら適宜入れさせていただきますのでご一報ください。
できるだけ少なくとどめるつもりですが、本編に記述した時系列の関係上、戦争と死についての記述を含みます。苦手な方はご注意ください。

一章ー1（前書き）

書籍化のため削除した「これがわたしの旦那さま」の過去の話になります。本編をお読みでない方にもおわかりいただけるよう説明を入れていきますが、わかりづらいことございましたらご一報ください。適宜加筆させていただきます。

本編跡地「旦那さま短編集」へのリンクを目次ページ下部に張らせていただきます。検索除外をかけているため作者のページに作品名が載っていないので、こちらの入り口をご利用くださいませ。

できるだけ少なくとどめるつもりですが、本編に記述した時系列の関係上、戦争と死に関連した記述を含むことになります。敬遠されたい方は冒頭からお読みにならないことをお勧めします。どうぞお心をお大事になさってください。

説明が長くてすみません。最後に注意書きを。お酒は二十歳になってから（笑）

一章―1

目が覚めてみれば、そこはふかふかなベッドの中だった。
えええ！？　何で？？？
起きたばかりの頭は、すぐには記憶を引き出してくれない。
えーっと、えーっと……とりあえず思い出せるところから思い出してみよう。

あたしはアネット。多分１５歳。クリフォード公爵家の下働き。毎日朝から晩まで、食事の下ごしらえや洗濯から、こまごました雑用までいろんな仕事をしている。
住んでいるのはご主人様のお邸の洗濯室脇の物置き。他のみんなは屋根裏で相部屋。あたしは寝る時に三階のさらに上までのぼっていかなくてもいいし、一人部屋なのですっごい楽。
そんなあたしのご主人様は、ここ、ラウシュリッツ王国の建国に大きく貢献した三公爵の一つ、クリフォード公爵家のご当主様だ。初代国王陛下の上の弟君の血筋を引き、国王陛下に助言を差し上げる名誉あるお役目に就いている。
何で一介の下働きがそんなことを知ってるかって？　そりゃあ、そんなご立派な方の下で働いていることを誇りに思い、一生懸命働きなさいって教えられてるからよ。

――って、今はそういったことを思い出してる場合じゃなかった。
見上げる天井は物置きの天井とは違って、真っ白に塗られた上に細かな模様が描かれていて、それだけでここが上等な部屋だということがわかる。
そして横を向けば、夜明け前のうっすらとした明かりに浮かびあがる、端正な顔立ちの若い男の寝顔が間近に……！
この顔には覚えがある。ご主人様の一人息子、ケヴィン様だ。今

年17歳になられる彼は、お父上の跡を継ぎ公爵様となられるお立場にありながら、このお邸にお預かりしている王子殿下をお守りするため近衛隊にまで入ってしまった、ちょっと変わり者。普通公爵家の跡取りともなると、そうしたお勤めには就かず、跡を継ぐためのお勉強をされるものなのだそうだ。

そんなお方の寝顔が、何でこんなに近くにあるかというと。

……そう。昨晩、自分の部屋で繕いものをしていると、外で物音がして、こっそり窓から見てみたら、裏庭の井戸のところに人が立ってたんだった。

ふらふらしていて危なっかしくて、水が欲しいのか井戸の中をのぞきこんでいて、何だか落ちそうだったから慌てて裏口から飛び出した。真夜中に不審人物、誰なのか確認しないまま近付いたのは軽率だったと思うよ？　でもちょっと見過ごせなくて。いつも使ってる井戸だから。

ぐらりと傾く体を、上着をつかんでうしろに引っ張った。暗がりでもわかる。上質な手触り。もしかしてと思って月明かりの影というわずかな光の中で目を凝らして確認してみると、案の定知った顔だった。

ご主人様の息子じゃん！

驚いて吸い込んだ息に、顔をしかめる。

酒くさ！

とりあえず井戸の縁に座らせて、あたしは井戸に桶を落とし、滑車に通された縄をせっせと引っ張る。水をたたえた桶を井戸の縁に置いて気付いた。

「コップがいるわよね……」

つぶやいてきびすを返したところで、背後で水音がする。

振り返れば、ご主人様の息子は桶を両手で抱え、桶の端に口をつけて水を飲んでいた。

どんどん傾いていく桶。口元から喉、胸元へと流れ落ちる水。

あたしはそれを、唖然としながら見つめた。
ご主人様の息子は今まで遠目でしか見たことがない。でも噂はよく聞いてる。頭脳明晰、品行方正を絵に描いたような立派なお坊ちゃまなのだそうだ。使用人にも、真面目すぎるからもうちょっと遊んでもいいんじゃないかと言われてしまうほどのカタブツだ。
そんな人が、一体どうしちゃったの???
満足したのか、彼の手から桶が落ちそうになる。それを受け止め近くの台に置くと、あたしは前のめりになる彼の体を全身で受け止めた。
「倒れるのはお部屋に戻ってからにしてください！」
声をひそめて叱りつける。するとご主人様の息子はゆらり立ち上がった。それを脇から支えると、彼はあたしに体重をかけてくる。
お、重い……。
次に思ったのはどうしようということだった。
正面玄関に回って扉を叩いて、誰かに出てきてもらうか。いやいや、この人がそうしなかったのは何か事情があるはず。あたしが支えて正面玄関に回るのも問題ありだ。こんな夜更けに男女二人で何をやっていた、とかいう話になっちゃう。
仕方なく、あたしの部屋から邸の中に入れた。
物置から洗濯室、厨房の前の通路を通って階段室へ。
一人で歩けるなら洗濯室から廊下に出たところでお見送りしたかったんだけど、肩にのっけられた腕にかかる重さはあいかわらずで、肩から降ろそうものならどうなってしまうかわからない。
そのままよたよたと階段を上がり、二階にある彼の部屋にこっそり入った。
扉一つ開けるのも苦労しながら、でっかい書斎机の置かれた部屋を通り抜け、寝室に入る。
ベッドに寝かせようとして、彼の服の湿り気に気付いた。
こぼした水でたっぷり濡れた上着。
「ちょっとの間、ご自分で立っててくださいよ」

聞こえているかわからないけど一応言って、押しのけるように彼を立たせ、前に回る。
わかってくれたようで、ゆらゆらしながらも一人で立ってくれていた。あたしは布地が濡れて外しにくいボタンを何とか外し、上着を脱がせる。
ただでさえ重たい上着が、濡れてさらに重たくなっている。
まずは寝かせないとと思い、上着は側に落とした。
そして彼から少し離れ、ベッドにかかっていた毛布をめくった時。
「きゃ……っ」
倒れた彼の下敷きになった。ベッドの上で。
そして――。

それらの出来事を一気に思い出し、あたしはベッドの上に仰向けになったまま青くなる。
マズい。
非常にマズい。
こんなことしちゃうなんて、使用人、しかも下働きなのに。
どうしよう……。

……

……

……

……ま、いっか。

さいわいまだ早い時間だ。みんなぐっすり眠っているだろう。
お隣のご主人様の息子も、しっかり目をつむってぴくりとも動かない。
お腹の上にのっかる腕をそうっと持ち上げながら、あたしはそろ

そろとベッドを降りた。
降りてから再確認。
うん、目を覚ましてない。
あたしは足音を立てないように扉へと向かう。
要するにあれよ。バレなきゃいいのよ。
そうっと扉を開き、わずかな隙間に体を滑り込ませて寝室から出る。
カチ……
ほんのわずか、音を立てる。でもその音が消えれば、静寂が戻る。
できるだけ音を立てず、あたしは無事洗濯室まで戻ることができた。
誰とも行きあわなかった。ご主人様の息子も、あれほど泥酔していたのだから覚えてなんかいないだろう。
つまり、昨晩のことを知る人は誰もいない。
らっきー♪
ふかふかのベッドに寝れて、得しちゃった。
くしゃくしゃになった三つ編みを編みなおし腕まくりをして、あたしは早朝の仕事にとりかかった。

一章ー2（前書き）

ケヴィン視点です。くどいですが、“お酒は二十歳になってから”（笑）

一章―2

目を覚ましたらベッドの中だった。
未だ軽い眠気を覚える頭で考える。
おかしい……。
視界に見えるのは、慣れ親しんだ自室の景色。自分の部屋で寝ていたのだろう。
だが昨晩、自室に戻った覚えがない。
いつ、どうやって戻った？
思い出そうとすると、頭がずきずきと痛む。
完全に二日酔いだ。
昨晩は散々飲まされた。半年遅れの歓迎会。殿下を酒場に連れていかないことを条件に、殿下の分まで飲むことを強要された。
断れるわけがない。認められたとはいえ、まだまだ殿下の仲間内での立場は弱い。

殿下――現国王の第二王子シグルド殿下。愛妾ラベンナ様のただ一人の御子で、生母を亡くされ王城内での立場をますます弱めた殿下を、父クリフォード公爵が国王陛下に願い出てわが邸に引き取った。
あのまま王城で暮らしていたら命はなかっただろうと父は言う。プライドと嫉妬にまみれた王妃は愛妾をいじめ抜いて死に至らしめ、殿下もその毒牙をかけようとしていた。
そこから救い出して早７年。殿下が１０歳になられてすぐのこと、王妃は三公爵の一人ラダム公爵と共謀して、殿下の立場を貶める策をはかった。
殿下の近衛隊入隊。
王城内に立ち位置のない殿下に正当な地位を与えるためともっともらしいことを言って国王陛下に命じさせたというが、これが殿下

の立場をさらに悪くした。
　王家を直接守る近衛隊への入隊は、貴族にとって名誉なことである。しかしわが国の近衛隊士は国王陛下をはじめとする王家の人々を守るのが務め。忠誠を誓い、身を守るための楯となるべく仕える。つまり王家の一員でありながら、王家を守る臣下の身分に落とされたことになる。
　そうした意図があるとわかっていながら、父クリフォード公爵は阻止することができなかった。殿下を我が家に引き取る際に無理を押し通したために、殿下に関する発言では立場が弱くなってしまったのだ。
殿下の命を守るためにクリフォード公爵家に引き取ったことがラダム公爵にいらぬ警戒を与え、クリフォード公爵に権力を奪われまいとのラダム公爵の画策に、シグルド殿下は立場を危うくされている。
――悪循環だ。
　近衛隊にはラダム公爵の息のかかった者もいるはずだ。そんなところに殿下をお一人で向かわせることはできなかった。わたしは父に頼み、殿下と一緒に近衛隊に入隊した。
　わたしの判断は正しかった。待っていたのは殿下を軽んじ不当な扱いをする輩と、累が及ぶことを恐れて遠巻きにする者たちだった。
　前者は先輩であることをかさにきて、年の割には剣筋のいい殿下をなっていないと罵倒する。わたしが抗議すれば、わけのわからない主張をされて、一層風当たりが強くなるだけだった。

　そんな中、ある男に声をかけられた。
　オースティン子爵の三男ヘリオットだ。ヘリオットはシグルド殿下をもう一つの練習場へ連れて行き、殿下をこれでもかというくらい打ちのめした。
――やめろ！　こんなもの訓練でも何でもない！
　そう叫んだ私を制したのはシグルド殿下だった。倒れてもすぐに訓練用の剣を構え、ヘリオットに立ち向かっていく。見ていられな

かったが、ヘリオットの仲間と思しき奴らに拘束されて止めることもできなかった。地面に倒れ伏して動かなくなった殿下を、彼らは救護室に運んで手当てした。彼らにいつもの奴らのような嘲笑はなかった。何が何だかわからずにいると、目を覚ました殿下がその答えを口にした。

――本気で鍛えようとしているのがわかったから、だから限界まで頑張った。

それまでは彼らがしたいことが殿下を貶めることだとわかっていたから、頑張っても無意味だと思い手を抜いていたと言うのだ。

それからというもの、一部の近衛隊士たちの態度が変わった。殿下とわたしに気軽に声をかけ、自分たちの訓練に誘ってくれる。

そうした日々が始まってすぐ、近衛隊の内部構造が見えてきた。身分をかさにきて横暴を働く上級貴族と、それに従うしかない下級貴族。そしてそうした隊内の体質をよくないと思いながら、口に出せずにいる一部の上級貴族たち。

殿下を不当に扱った連中は過半数の上級貴族とその腰ぎんちゃくたちで、殿下に対するほどあからさまではなかったが、下級貴族の出である隊士たちを軽んじ見下していた。

殿下とわたしは、下級貴族の一派に受け入れられた。

そのことをあざける者たちはいたが、殿下がそれを気にすることはなかった。それでますます下級貴族の隊士たちに気に入られることになったのだ。

が。

下街の酒場で歓迎会をすると言われた時、わたしは断固として反対した。

――殿下をそのような場所にお連れすることはできない！

殿下はまだ１０歳、子どもの年齢だ。いや、年齢は関係なく、下

街の酒場に王子殿下をお連れするなどもっての外。
――全員我が家に招待してもてなそう。それでは駄目か？
妥協案を提示した私の肩を、何やら呆れた様子でヘリオットは叩いた。
――わかった。そうしよう。けど、おまえは今晩来い。
断れるわけがなかった。殿下が体を張って手に入れた彼らの信頼。それをわたしが壊してしまうことはできない。

下街でなくとも、酒場という場所に足を踏み入れたのはこれが初めてだった。
戸惑うわたしに、下級貴族の近衛連中――仲間は、陽気に酒をすすめてきた。
――　一度腹を割って話したかったんだ。
そういうつもりがあって誘ってくれたのか。固辞して悪いことをした。
と、思ったのだが。
何だかんだ言いながら強引に酒をすすめられるに至って、やはり殿下をお連れしなくて正解だと思った。
私が強く断れないのをいいことに、奴らはおもしろがって次から次へと酒を注いでいく。
どれほど飲んだかわからない。
耐えきれず、差し出された桶の中に吐いた。
何という醜態。恥をしのびつつ介抱を受けるわたしに、奴らは笑って“合格”と言った。
何の合格なのか。何をして合格と言うのか。

問うこともできないほどにもうろうとしながら、両脇を抱えられて邸まで送られた。
門をくぐったところで彼らと別れて、一度は正面玄関の扉を叩こうとしたのは覚えている。

だが、家人に自らの醜態を見せたくなかった。
思考はろくに回っていなかったが、自分が酷い有様であることは自覚していた。
悩んだのはどのくらいの間だったろうか。ふと喉が猛烈に乾いていることに気付き、庭をふらふらと歩いて井戸を探した。

意識は落ちそうだったが、かろうじて井戸はみつかった。
だが、そのあとのことを覚えていない。

厚いカーテンに朝の日差しが透けて、寝室内をうっすらと照らす。
ベッドの上であおむけになり、ずきずきする頭を押さえながら考えた。
水を飲んだことは覚えている。冷たい水が喉元を通り、胸を冷やし、渇きを癒した。
その時何故か、傍らに人の気配があった。
耳に残るひそやかな声。
――倒れるのはお部屋に戻ってからにしてください！
――ちょっとの間、ご自分で立っててくださいよ。
――きゃ……っ

そこまで思い出したところで、わたしは飛び起きた。
わずかに残っていた眠気も、頭痛すらも吹っ飛んだ。
記憶はおぼろだが、わたしは確かに覚えている。
抱きしめたものの温かさ、やわらかさ。腕の中で身じろぐものを押さえ付け、編まれた髪に手を差し込んで、なめらかな肌に唇を寄せて。
「――！」
口を手のひらで覆う。
酒に酔っていたなど、言い訳にならない。
誰なのか覚えていない。

覚えているのは、全身に感じた感触と声と、あとはシーツの上に投げ出された三つ編みの長い髪。

愕然としてベッドの上についた手に、シーツにしては違和感のある何かが触れた。それをつかんで目の前に持ってくる。

それは、汚れほつれた小さな袋だった。

一章―3

アネットは朝から忙しい。

かまどに火を入れ、水を汲んできて大鍋ややかんで湯を沸かす。それから野菜を洗ったり皮をむいたりする。

そうしているうちに料理人や他の使用人たちが起き出してきて、料理がはじまり慌ただしくなる。

アネットを含めた5人の下働きの女の子はせっせと皮むき。

「皮むきまだ！？」

「はーい！　今すぐ！」

大きな声で返事して、皮をむき終わった野菜の入った桶を持っていく。

ご主人や上の使用人たちの食事用の野菜は、もう調理場に運んである。これは下の使用人たちの食事用だ。調理場も隣同士だけど分かれていて、アネットは下の使用人たち用――下用の調理場で、下用の料理人たちと一緒に野菜を切る。切り終わった野菜は湯の煮えた大鍋の中にどぼどぼと入れる。

それからアネットはふたたび皮むきに戻る。今度は上用の昼食だ。上用の料理人たちは自分たちが食事を終えたらすぐに昼食の準備にとりかかるので、今の内にむいておかなくてはならない。上の方々はじゃがいもやにんじん、玉葱などをそのままの形では食べないけど、すりつぶしてポタージュにしたり、スープを作る時に鳥ガラとかと一緒に煮込むのでたくさん必要になる。

アネットたちがせっせと野菜の皮むきをしていると、上用の調理場の向こうから声が聞こえた。

「お食事を一人分、別で用意してちょうだい」

「どなたのお食事だい？」

「ケヴィン様よ。いつの間にかお帰りになってらっしゃって、今朝

は気分がすぐれないからお部屋でおとりになるって」
ご主人様の息子の名前にどきっとして、アネットの手がわずかに止まる。
たまねぎの皮をむきながら、しばらく耳をすました。
「それでケヴィン様が、今日の午後近衛隊の方たちを呼ぶそうだから、お茶の準備をしておくようにって」
「お茶の準備ってのは、菓子を作っておけってことか？」
「さあ？　それでいいんじゃないかしら？」
「じゃあとっておきのを作らせてもらうかな」
「よろしくね」
話は終わったようだ。ケヴィンを誰が邸に入れたのかとか話題にならなくてほっとする。
バレて何だかんだ言われるのはめんどくさいもんね。
アネットはこっそり肩をすくめる。
「ケヴィン様っていえばさぁ」
野菜の桶を囲んで一緒に皮むきをしている女の子の一人が、ふとしゃべりだした。
「ゆうべ夜遊びに出てたってホントなんだ？」
「そーみたい。何か、近衛隊の仲間に誘われて断れなかったんだって」
他の子たちも口々に話し出す。
「何で殿下は一緒じゃなかったんだろ？」
「夜遊びってことはさ、お子様禁制のどっかへ行ったんじゃない？」
「いやー！　お子様禁制ってどこよ！？」
一人が叫ぶと、料理人から叱責が飛ぶ。
「うるさいね！　黙って仕事しな！」
「はーい！」
返事はいいが、すぐさま声をひそめて話を続行する。
「ケヴィン様もやっぱり普通の男の人だったのね」
「真面目を絵に描いたような、あのストイックさがよかったんだけ

どなー」
「だよねー」
アネットも適当に話を合わせる。

正直、アネットもびっくりだった。あの泥酔っぷりも、そのあとのことも。
ケヴィンに真面目とかストイックであってほしいと特には思ったことはないけれど、今まで聞いていたイメージが１８０度ひっくり返ってしまったような気がする。
今まで遠目にしか見たことのなかったのに、急に接近してしまったせいだ。
背が高いとは知っていたけど、実際に並んでみて、本当に高かった。アネットの肩など、肘置きにしかならなかった。
見た目より重い腕。
厚い胸板。
どんなに抵抗してもびくともしなかった、力強さ。

「アネット、何赤くなってんの？」
隣の女の子に眉をひそめられ、アネットは慌てた。
「え、な、何でもないよ？」
ヤバいヤバい。ツッコミ入れられたらどうするよ、あたし。
考えを振り払い、皮むきに専念する。

朝食ができあがると、順番に食事が始まった。
食堂も上の使用人と下の使用人とに分かれていて、下の使用人は園丁や馬丁といった男の使用人から食事を始め、アネットたち女の下働きは最後になる。
食事の順番が来るころには昼の分の野菜をむき終え、食事の最中は次の仕事までの一息の時間だ。

アネットはいつもの癖でエプロンのポケットをさぐった。
「あれ？　あれっ？」
「どうしたの？　アネット」
ポケットをいくら探っても、あるはずのものに指が触れない。
「守り袋がない……」
「アネットの守り袋って“あれ”？　すっごい汚れててほつれてて、ボロ切れみたいなヤツ」
そこまでひどくはないと思うんだけど……。
と、内心思いながら、アネットは答える。
「うん、それ。どっかで見なかった？」
見回した下働きの仲間たちは、ふるふると首を横に振った。
「見てない。てか、そんなん見付けたら即ゴミ行きだよ」
「なくしたんなら、いい加減捨てたら？」
苦笑いしながら言われて、アネットは同じような笑みを返す。
「あー……うん、そだね……」
「そーしなよ。でさ……」
さっそく次の話が始まる。
アネットも話に混ざりながら、心の片隅で失くしたもののことを考えていた。

あんなもの、持ってたってしょうがない。
そうはわかっていても、どうも捨てられない。
何てゆーか、もう習慣なんだよね。持ってないと気持ち悪いってゆーか。

スープにパンをひたして食べながら、アネットはもんもんと考える。
どこに落としたんだろう。
昨日の晩にはあったし、そもそもあれはポケットの裏に軽く縫い付けてあった。簡単に落ちるはずがない。

昨夜の行動を反芻し、思い至った。
あれだ。間違いない。
とすると、落とした場所はご主人様の息子のベッドの中。
「ちょっとアネット。あんた今度は顔色悪いよ？」
隣でご飯を食べる女の子に顔をのぞかれ、アネットは顔をひきつらせつつ取り繕った。
「う、ううん！　何でもない平気！」
ヤバい、ヤバいよ。もしそうだとしたら、何でそんなところに落ちてたんだって話になっちゃう！
――ま、腹をすえておけばいいか。
どうせバレたとしても、上の人にお叱りを受けて、女使用人のみんなにやっかみを受けるくらいのことだ。……それがコワかったりするのだけど。
ふと思い出す。
そういえばあれがアネットの物だと知っているのは、使用人たちの中でもごく一部だ。
なんだ。バレる心配もないんじゃない？

気が楽になったところで、どうやって探そうかと考えた。
アネットのような下働きは、邸内を好きに歩きまわることはできない。ご主人様方やお客様の目に触れてはならず、移動には使用人専用の階段や通路を使わなくてはならない。いわゆる“表”を歩こうものなら、格好ですぐバレる。
夜中なら何とかなるかもしれないけど、夜は部屋の主がお休みだ。昨夜はホントに特別で、今まであんなに遅くに帰ってきたことはなかった。
だからケヴィンの寝室に探しに行くのは無理。
落としたのはベッドの中。つまりはシーツの上。シーツは毎日替

えるだろう。上手くすればシーツの中に紛れて洗濯室までくるかもしれない。
「……あんた、何やってんの？」
「え？　えっと、その、洗濯の前にちょっとごみを払っておこうかと思って」
丸められ、ワゴンに乗って洗濯室に届いたシーツたち。いつもなら洗い場にぽんぽん置くのに、今日に限って一枚一枚広げるものだから、仲間に変な目で見られた。それでも馬鹿をよそおって全部確認。
なかった。
枚数からして、ケヴィン様のシーツも出てるはずなんだけどなぁ……。
残念に思いながら、アネットはせっけん水をかけられたシーツを踏んだ。

シーツに紛れてなかったということは、ベッドから落ちて掃除のときに捨てられたということになる。誰かが拾ったりしなければ。
……あんなもの、誰も拾わないか。

この日の午後は、調理室いっぱいに甘いにおいが広がった。
「んーいいにおい！」
「おいしそうなにおいよねー」
「一かけらでいいから恵んでくれないかしら？」
「ムリムリ。どーせ余ったお菓子は、上の使用人がきれーさっぱり食べちゃうわよ」
主人たちが食べ残したものは、使用人が食べてもいいことになっている。でもおいしいものほど上の使用人たちに食べられてしまい、下の使用人であるアネット達の口に入ることはない。

それにしても、甘いにおいは久しぶりだった。
この邸に住む人々は、甘いお菓子を好まない。それでも主人であるクリフォード公爵と子息のケヴィンの二人だった頃は、夕食後のデザートが作られていた。でも7年ほど前、甘いものを苦手とするシグルド王子がこの邸に引き取られてから、お菓子の類は一切作られなくなった。
久しぶりのにおいをかぎ、下働きの仲間たちとはしゃいだ声を上げていたアネットだったが、頭の片隅でずっと守り袋の行く先の心当たりを考えていた。

邸に住む人々が寝静まった夜更け、アネットはごみかごを外に引きずり出して地面の開けたところにぶちまけた。
明日の朝にはかまどにくべられて燃やされてしまうごみ。探すなら今晩しかない。
満月に近い夜でよかった。おかげでランプがなくとも何とか見える。
目を凝らし、ごみを一つひとつあたっていく。
正直、何でこんなことまでするのかと、アネット自身も思わないでもない。
それはあれよ。別になきゃないであきらめがつくんだけど、探さないでは諦めにくいってゆーか。
心の中で自分に言い訳する。

半分くらい探したところで、しゃがんだ体勢がちょっとつらくなって、休憩しようと立ち上がった。指先をスカートで払い、うーんと伸びをする。
すると視界の端に人の影が見えた。ぎくっとしてそろそろ振り返る。
アネットが気付いたからか、その人物は影から月明かりの中に出

てきた。
んげっ！　ケヴィン様！
アネットは顔をひきつらせる。
何でまたここに……今日も酔ってる？　――わけないか。本日はお父上、王子殿下とご一緒に夕食をお召し上がりになり、談話室でまったりおくつろぎになったとみんなが噂してた。
……もしかして、昨夜の相手があたしだとバレたとか？
いや、バレても困ることはないんだけどね。クビとか言われたら昨夜のことをバラすって脅せばいいだけだし。
それでも緊張に身構えていると、近付いてきていたケヴィンは腕を伸ばせば届く程度の距離で立ち止った。
アネットの瞳をまっすぐ見ながら、こぶしを持ちあげて手のひらを上にしながら開く。
「探しているのは、これか？」
手のひらの上には、汚れほつれた、小さな袋が載っていた。
アネットが探していた守り袋だ。
何でケヴィン様が持ってるの？
多分、ベッドの上でケヴィンがこれを拾ったからだ。
正解なら、昨夜の相手が自分だとバラしてしまうようなものだ。
目を上げて、様子をうかがった。
これをわざわざ見せるってことは、もしかして昨夜の相手を見付けようとしてる？
ケヴィンが何を考えているのか、表情からは読み取れない。
目の前には今日一日探し続けた守り袋。
悩んだ末、アネットはうなずいた。
さあ、どうくる？
するとケヴィンはこぶしを握り直し、ひっくり返してずいと差し出してきた。
え？
戸惑っていると、ケヴィンはアネットの手首をつかんで持ち上げ、

手の中に守り袋を握らせた。そして背を向けて行ってしまう。
……ええと？
わけがわからない。
一体ケヴィンは何をしたかったんだろう。
まさかこれを返したかっただけ？
これがもっとましなものだったら理解もできた。
でも仲間ですらごみと言うこれを、お貴族様が一介の下働きに返しにくる？
……
……
……
「あ、そうだった」
守り袋が見つかったからには、足元のごみたちに用はない。
早く片付けて眠らないと、すぐに夜が明けてしまう。
アネットは返してもらったお守り袋をポケットの奥底にしっかり入れると、ぶちまけたごみを片付け始めた。

一章―4

月明かりの下、ごみを庭にばらまいてしゃがみこむ少女は、ケヴィンが予測した通りベッドに落ちていた小袋を探していた。

記憶はあいまいだが、覚えている。

薄い色の長い長いおさげ髪。自分自身、何を思ってのことかまでは覚えていないが、指を差し入れほどこうとした。

ケヴィンが近付くと警戒して、小袋を見せてもなかなかうなずかなかった。

警戒されても仕方ないだろう。酒に酔っていたとはいえ、あのようなことをしてしまったのだから。

大事なものだろうそれをなかなか受け取ろうとしないほどの警戒ぶりに、謝罪の言葉も口にできなかった。

最低だったと思う。

世の貴族の中には使用人や領民を、彼らの意思を無視して好き放題に扱うというが、ケヴィンはそれを正しいとは思わない。彼らにだって心はある。傍若無人な態度に、傷つくことだってあるだろう。

どこでどのような生を受けたか。その違いのためだけに発生する理不尽。

シグルドも、王子という高貴な生まれでありながら、生母の出自が低いために軽んじられ、王家を守るべき近衛隊士にまでひどい扱いを受けている。

根強い階級意識と、それに振り回される人々。

シグルドを見ていて思う。理不尽な扱いを受ける者は、実力を十分に発揮することはできない。正当な評価を受けられないとあきらめれば、実力など発揮するのも確かに無駄というもので――。

「何、百面相してるんだ？」

声をかけられ、ケヴィンは我に返った。さきほどまで剣を使った

模擬戦を行っていたシグルドが、正面に立ってケヴィンの顔を見上げている。
そのうしろからヘリオットが近付いてきた。
「百面相？　ただ顔をしかめてただけじゃないのか？」
「違うよ。さっきからぼーっと何か思い出したり、落ち込んだり、難しいこと考えてたりしてた」
あいまいではあるが、考えていたことを言い当てられてどきっとする。
シグルドは満面の笑みを作り、ヘリオットを振り返った。
「な？」
ヘリオットは苦笑する。
“な？”って言われても、俺にはケヴィンの顔色を読む芸当はできねーよ。てか次、おまえの番だ、ケヴィン」
そうだ。シグルドが終わったのなら、今度はケヴィンの番だ。
腰にさげていた練習用の剣を抜きながら、ケヴィンは広場の中央に出る。

ヘリオットは15歳だが、剣の腕前は他の仲間より抜きんでていて、指南を求める仲間は多い。ほとんどが下級貴族の出の者だが。
その“ほとんど”に当てはまらないのが、シグルドとケヴィンだ。
今ではすっかりヘリオットたち下級貴族の仲間とみなされ、そのおかげで上級貴族の隊士たちの執拗な嫌がらせは減った。

ラウシュリッツ王国の近衛隊への入隊基準は、上級貴族と下級貴族とで違う。
上級貴族は推薦のみによって入隊が決まるが、下級貴族は推薦だけでなく剣の腕が必要となる。
この国は200年近くに渡る戦いのない時代をへて、国を守り戦う軍人より、国王に代わって政治の一端を担う文官に重きが置かれるようになった。

そのため近衛隊士になることを望む上級貴族の子弟は減り、以前は入隊を許されなかった下級貴族の子弟の登用が始まった。
だが、この国の階級意識の壁は厚い。下級貴族登用にあたって、差別化が求められた。それが“剣の腕”だ。
近衛隊は王家を守るべき者たちの集まり。しかし、平和に慣れ特権意識から剣の腕を磨くことを忘れた近衛隊士たちは、お飾りとしての役割しか果たしていなかった。そこで差別化と同時に隊全体の剣術向上を目的とし、近衛隊に推薦された下級貴族は剣術の試験に合格することも必須と定められた。
このことに危機感を持った上級貴族の者たちが剣の腕を磨くようになったかというと、そこは思惑通りとはいかなかった。危機感だけは持った彼らは、下級貴族の隊士を虐げることで矜持を保ち、そんな上級の隊士たちを下級の隊士たちは軽蔑した。
剣の腕で登用された下級の隊士たちは、えりすぐられ集まった仲間たちの中でどんどん剣の腕を磨き、実力の差は広がる一方だった。権力をかさにきて下級の者を虐げてきた上級の者は、彼らの剣の腕に恐れを抱き次第に距離を置くようになる。
こうして近衛隊内部は分裂した。

そんな状況の中に放り込まれたシグルドは、上級の隊士たちのうさばらしの対象となった。
しかしそのシグルドが下級の者たちと親しくするようになったことで、上級の者たちは手が出しにくくなったらしい。下級の者たちと行動を共にするシグルドを、彼らが遠くからいまいましそうに見つめている姿を何度か目にしたことがある。
――奴ら、いい顔。
側にいた仲間が、彼らに聞こえない程度の声で言った。
それで理解した。上級の者たちへの嫌がらせのつもりで、シグルド、そしてケヴィンを自分たちの陣営に引き入れたのだと。
だが、彼らは試した。シグルドを気に入らなければ、仲間にする

つもりはなかったのだろう。
シグルドはその試しに合格した。
だから仲間と認められ、守られている。
それにしても、何故シグルドは剣術で試され、ケヴィンは酒を飲まされたのか。
何を理由にそういうことになったのか、さっぱりわからない。
確かに、ケヴィンはシグルドより6歳も年上でありながら、シグルドのように試してもらえるような剣の腕はない。しかし試されるのならば、満身創痍になるまで立ち向かっていってもよかった。

広場の真ん中に立ったケヴィンに、ヘリオットはにやにやと笑った。
「愛しの王子様の試合を見ないで、何考えにふけってたんだか」
揶揄されてむっとする。たった今ケヴィンの顔色は読めないと言ったばかりなのに、ヘリオットは何かに気付いたらしくにっと口の端を上げる。
しゃくに障って、ケヴィンは開始の合図と同時に切りこんでいった。
「お！　今日はいつになく果敢だね！」
一つ年下だが、小憎たらしいことにヘリオットの剣の腕は本物だ。多少は策を練らないと簡単に負かされてしまう。
しかし今日は、無性に打ち込んでいきたくなった。
そうしたら面白がられて、あとに引けなくなって、……結果は散々だった。

疲れを押し隠し夕食をとっていると、共に食事を取るケヴィンの父トマスが手を止めて不思議そうにケヴィンを見た。
「どうした？　いつに増して疲れている様子だが……」
「今日のケヴィンはすごかったんだ！　何度ヘリオットに負かされ

ても攻めていって、疲れすぎて起き上がれなくなるまで頑張ったんだ！」
ケヴィンの代わりに、シグルドが無邪気に答える。
止められなかった。
自らの不名誉を誇らしげに話されて、ケヴィンは今すぐ食事を切り上げて食事室を出て行きたくなった。
トマスは目を丸くしてまじまじとケヴィンを見、それから面白がるようにくつくつと笑った。
「楽しそうにやっているようで何よりだ。昨日もわたしの留守中に隊の仲間が遊びに来ていたそうだね」
「……はい。申し訳ありません……」
「何を謝ることがある？」
トマスは本気で不思議そうな顔をする。
聞いていないのだろうか？
ケヴィンはわずかに眉をしかめる。
近衛隊士といっても、二十歳になるまでは見習いで、正規の隊士と比べ休みを取りやすい。
ヘリオットをはじめとする仲間全員が休みを取り、クリフォード公爵邸を訪れお茶の席に着いたが、貴族であるにもかかわらず彼らの作法はめちゃくちゃで、好き勝手に紅茶を淹れるわ、シグルドの紅茶に砂糖を入れて遊ぶわ、狭い部屋の中を走り回るわ、物こそ壊さなかったが邸中に響き渡るほどの大騒ぎだった。
正直、彼らと親しくなったことを後悔したほどだ。
答えられないケヴィンの代わりに、シグルドが答えた。
「すごく楽しかったって、みんな喜んでたよ。また来たいって言ってた」
それにトマスはにこにこと答える。
「そうですか。ではまた招かなくてはなりませんね。よい仲間に巡り合われたようで、よろしゅうございました、殿下」
「うん！　みんな剣がすごくうまいんだ！　いっぱい訓練しないと

おいてかれちゃうんだ。それでね――」
楽しそうにヘリオットたちの話をするシグルドに、ケヴィンは内心ため息をついた。
彼らとどう付き合っていくべきか。
シグルドくらい幼少であれば、ケヴィンもこんなに悩まなくてすんだかもしれない。

悩んだものの解決策を見いだせずに訪れた、二度目の招待日。
ケヴィンは目をみはった。
みなソファにゆったりと座り、メイドの給仕でお茶を楽しんでいる。
何故？　と聞けもしないケヴィンに、そろそろお開きにしようという頃、仲間の一人が言った。
「いやー前回は楽しかったよ！　俺らの大騒ぎを見て青くなったり焦ったりするおまえがさ！」
怒りのあまり、ケヴィンは卒倒するところだった。
その剣幕を見て、彼らはそそくさと辞去した。
玄関まで見送って戻ってきたシグルドが、心配そうにケヴィンをのぞきこんで言った。
「ケヴィンがあんまり無表情だから、みんな違う顔を見てみたいって思ったんだよ」
六歳も年下のシグルドになぐさめられてしまい、ケヴィンの気持ちはさらに落ち込む。
殿下にもわかっていたことを、わたし一人が気付いていなかったということか。
「気になさらないでください。――わたしの修業が足らなかっただけのことです」
つい八つ当たりのような言葉を口にしてしまった。悲しそうに顔を歪めるシグルドをメイドに任せ、ケヴィンは一人外へ出た。

頭を冷やそうと、夕暮れにさしかかった庭を散策する。
感情の抑制ができなかった。シグルドに当たってしまうなど、未熟にもほどがある。
ヘリオットたちに散々酒を飲まされた日から、何だかんだと失態続きだ。
彼らのからかいに気付けもしなかったし、負けるとわかっていながらヘリオットにがむしゃらに打ちかかってしまった。
あの問題も解決していない。
泥酔して、使用人に手を出してしまった。
こんなときどうすればいいか、ケヴィンにはわからない。

気付けば、裏庭に回っていた。
井戸があって、使用人が水を汲んでいる。
淡い色の長い長いおさげ髪の。
「ケヴィン様、どうかなさいましたか？」
物陰から彼女を見ていたケヴィンは、うしろから声をかけられぎくっとした。
振り向けば、そこには見知った使用人が立っていた。
「静かに」
と、声をかけ、もう一度少女を見る。
少女は使用人の声に気付かなかったのか、桶を持って近くの扉によたよたと歩いている。
そのうしろ姿を見送っていたケヴィンは、ふと思いついてつぶやくように言った。
「あの者に新しい衣服を用意してやってくれ」
忠実な使用人は、無駄なことを言わずにただ「かしこまりました」と返事した。

一章―5

一体、何だったんだろ？
返されたぼろぼろの守り袋。手元に戻ってきて嬉しいという気持ちは薄く、頭の中は疑問符でいっぱいだ。
ケヴィンはきっと、わざわざ探しに来たのだろう。守り袋の持ち主を。
――探しているのは、これか？
真夜中の裏庭で、ケヴィンは手の中のものを月明かりにさらした。
声音には、本当の持ち主か探るような雰囲気。
うなずいたら、昨晩の相手だと白状するようなものだ。
けれどアネットはうなずいた。守り袋を返してほしかったから。
そしてケヴィンの出方をうかがった。
ケヴィンの醜態を見たことを口止めするのか。それともアネットをクビにすることで醜態をなかったことにしようとするか。
が、アネットの予想を裏切り、ケヴィンは黙って守り袋をアネットの手のひらに押し付けて去っていった。

返しに来ただけ？　そんなのってアリなの？

下働きの仲間たちでさえごみと言い放つ守り袋。それを高貴な生まれであるケヴィンがわざわざ返しに来る？
わけわかんない。
でも一つだけわかることがある。
ケヴィンはあの夜のことで、アネットを叱るつもりがないということだ。
叱るのなら、守り袋を返してくれる時に何か言ってきただろう。
どの程度だかわからないけど、ケヴィンにはあの夜の記憶がある。
そしてアネットがあの夜の相手だということにも気付いているはず

だ。
けれどそのことを問い質してくることもなかったし、その後何があるわけでもない。
これはもしかして、あの夜のことは忘れていいってこと？
らっきー♪
気がかりがなくなって、ようやくいつもの生活に戻れる。

そのはずだった。

その日も、調理室やその周辺に、甘いにおいがただよった。
「今日も近衛隊の方々がおみえになるんだってね！」
「さっきちらっと見たけど、上の料理長はりきってたよ。久しぶりのお菓子作りだもんね。あの人、本当はお菓子作りのほうが好きなんだってね」
「それにしてもいーにおい！　しあわせ～」
こういう日は仕事も楽しくなる。

お菓子のにおいの残る下の使用人の休憩室で夕食を食べていると、女使用人の頭であるオルタンヌが入り口から顔をのぞかせた。
「アネット。ちょっとおいで」
「ふぁい」
席を立ったが最後、夕食に戻れなくなるかもしれない。残り数口のパンとスープを急いで口の中に詰め込み、もごもごしながら入り口前にいるオルタンヌの前まで行く。
オルタンヌはあきれたように小さくため息をつき、アネットに背を向けて廊下を歩きだした。
アネットは口の中の物を少しずつ飲み込みながらついていく。
それにしても珍しい。上の女使用人もたばねるオルタンヌは、事

情があってアネットに声をかけることはめったにないのだ。
しかも何故か、普段は下の使用人の立ち入りを禁止している、主人たちが暮らす邸の“表”に向かっている。
嫌な予感がした。
今頃になって、あの夜のことを怒られたりしたりして……。
あれから１０日以上たつから考えにくいけど、他にはやらかした覚えがない。
口の中のものをすっかり飲み込んだアネットは、ひやひやしながらオルタンヌについて一階の廊下を歩く。

階段室に向かう様子がないことに気付いたころ、アネットは何か変だと思った。
わざわざ“表”に連れてきてまで叱るのなら、邸の主人の所へ連れていかれるはずだ。そういう話を聞いたことがあるのに、何故か上の階に行かない。
主人であるクリフォード公爵の部屋は三階だ。
向かう先にあるのは、記憶に間違いがなければ客室のはず。

入るように言われたのは、覚えていた通り客室だった。
“裏”とは違っておしみなくランプの灯された部屋。つややかな皮のソファや柱にほどこされた金色の装飾に目をちかちかさせていると、オルタンヌに言われた。
「扉を閉めなさい」
「あ、はい」
アネットは入ってきた時のままにしてしまった扉を、慌てて閉める。
振り返ると、オルタンヌは部屋の中央に置かれたテーブルの横に立っていた。
テーブルの上にはフリルのついたピンク色のドレスが置かれている。

きれいなドレス……。
目の保養になるが、嫌な予感がする。先程とは別の、嫌な予感が。
側に行くと、オルタンヌは神妙な顔をしてアネットに言った。
「ケヴィン様からの贈り物です。これを着て、今夜ケヴィン様のお相手をなさい」
ドレスを見たところで予想がついたけど、ひとの口から聞くと衝撃的で聞き直したくなる。
「えっと、それってつまり……」
オルタンヌは困ったように目じりを下げた。
「つまりその、ベッドを共にするということです」
ここまで言われれば、これ以上聞き直すのは愚というものだ。
下働きに分不相応な贈り物をするってことは、やっぱりそういうことよね……。
アネットはがっくり肩を落とす。
それを見たオルタンヌは、気遣わしげに声をかけてきた。
「すまないわね、アネット。ケヴィン様のご要望なのよ。浮いた噂の一つもないケヴィン様を見ていて、今後結婚された時の生活を心配してたビィチャムさんが、今回のことをことのほか喜んでいてね。あなたにどうしてもお願いしたいと言うのよ」
ビィチャムとは、この邸の男使用人の頭だ。忠義に厚く、クリフォード公爵の唯一の子息であるケヴィンをことのほか大事にしている。
ビィチャムの心配はもっともだと、アネットも思う。16にもなって女に興味がないなんて、不能か別の趣味があるのかもと疑っても仕方ない。
アネットがあきれ交じりのため息をつくと、オルタンヌもため息をついた。
「お手当はちゃんとつけます。その後の面倒も見ます。だから、嫌

だろうけど頼まれてくれないかしら？　……ケヴィン様は一体どこであなたを見染めたのかしらね……」
どこかといえば、やっぱりあの夜、ベッドの中でなんだろうなぁ……。
アネットはドレスの袖を持ち上げた。
オルタンヌはほっとしたように笑みをつくった。
「頼まれてくれるのね。助かるわ。お手当の他にもほしいものがあったら、多少のものなら融通するわ」
「でしたら、このことはみんなには内緒にしてください。ケヴィン様とそういう関係になったって知られたら、これからの仕事がやりにくくなっちゃうから」
あっさりした口調で言ったつもりなのに、オルタンヌは悲しそうに表情を歪める。
別にそんなに悲愴な顔をされるようなことでもないんだけどなぁ……。
どうしたものかと思案して、アネットは口を開いた。
「初めての相手がケヴィン様のようなかっこいい人だなんて、らっきーなくらいですよ」
そう言ってにこっと笑ってみせる。
オルタンヌは、アネットのお気楽な様子に目をぱちくりさせた。

別に大したことじゃない。
結婚すれば誰だってすることだ。それに悪い邸に当たれば、その邸の主人に無理矢理慰み者にされていたかもしれないし、使用人の誰かに手篭めにされてたかもしれない。
クリフォード公爵は清廉潔白な人で使用人をそのように扱ったりしないし、邸の使用人たちにも教育が行きわたっていて、強引な人もいない。
ただ、残念に思う。
ケヴィンはそういうことをしない人だと思っていた。

汚れてすり切れた守り袋を、ごみだと思わずにアネットに返してくれた。
優しい人だと思っていた。下働きの気持ちも汲んでくれる、思いやりのある人だと。
結局、勝手な思い込みだったわけだけど。
守り袋を返してくれたのは、誰だったのかを確かめて、相手をさせるためだったのか……。
そう思うと、本当に残念に思う。

ケヴィンの相手をするということで、お風呂に入らせてもらえた。身綺麗にするためにごくたまに入らせてもらえるけど、いつもは水でしぼった布で体を拭くだけ。お湯で体を洗えるのは気持ちいい。これもらっきーだ。
きれいなドレスを着れるのもらっきー。
「急いで用意したものだから、ちょっとサイズが合わないわね。あとで直すから今夜はこれで行ってちょうだい」
アネットにドレスを着せてくれながら、オルタンヌが言う。
……そりゃそうよね。一晩だけで済むとは限らない。

いつもおさげにしている薄茶色の髪は、編まないことにされた。背中でふわふわと髪が揺れて何だかくすぐったい感じがする。
一生着るはずがなかったドレスを着せてもらい、ちょっと気持ちが浮き立つ。
支度が済んでケヴィンの部屋に移動する時も、オルタンヌに先導されてちょっとだけお姫様気分だった。

「ここで待っていなさい」
ケヴィンの寝室まで連れてこられて、アネットは一人残された。
一人なのをいいことに、アネットは部屋の中をいろいろと見て回る。

１０日とちょっと前、初めてここに来たときはいろいろあってゆっくり部屋をながめる余裕なんてなかった。
ベッドサイドのテーブルに置かれたランプの明かりをたよりに、分厚いカーテンをめくって窓の外をながめてみたり、壁紙に描かれた細かい模様を目をこらして見てみたり、部屋の中に置かれているタンスの装飾彫りを指でなぞってみたりする。

それらもあきてしまうほど時間がたち、アネットはようやくベッドに目を向けた。
ふかふかで寝心地のいいベッドだった。もう一度寝てみたいとは思うけど、今はそんな気になれない。
さすがのあたしも、そこまで図太くないっていうか……。
これからすることを考えると、ベッドにはあまり近付きたくない。
相手がケヴィンのようにかっこいい人でらっきーと言ったのは本当だが、だからといって進んで抱かれたいと思うわけじゃない。
正直、怖い。
そう思ったとたん、緊張が高まってきた。
体が震え、心臓が痛いくらいに早鐘を打つ。
落ち付け、あたし！
心の中で言い聞かせたって、何の効果もない。
胸を押さえて深呼吸しているところにカチャという物音がして、アネットは背筋を伸ばして硬直した。

どこか疲れた様子で寝室に入ってきたケヴィンは、顔を上げてすぐアネットの姿を見付け凝視した。
「誰だ！？」
怒鳴られてびくっとする。
恐々としながらも、アネットとだとわからないのかもしれないと思い至った。
アネットはしどろもどろになりながら答えた。

「守り袋を拾っていただいた者です。ドレスをくださってありがとうございました」
すると威嚇するようにアネットをにらみつけていたケヴィンが、ふっと視線をゆるめる。
「あ、ああ……」
間の抜けた受け答え。アネットの変わりように驚いたのだろう。本人だってびっくりな変身ぶりだ。
ケヴィンは口ごもりながら言った。
「気に入ったか？」
「はい」
それっきり長い沈黙がおりる。

ケヴィンの行動を待つアネットと、そんなアネットを凝視するケヴィン。
アネットは耐えきれなくなって、口を開いた。
「自分で脱いだほうがいいですか？」

ケヴィンから返事はなかった。

アネットは覚悟を決めて胸元の結び目を解いていく。

一章―6

今日は疲れた。さっさと寝支度をして寝てしまおう。
そう思って足を踏み入れた寝室に、なぜかあの娘がいた。

――自分で脱いだほうがいいですか？
ケヴィンは驚いて目を見開いた。
何を言っている？
絶句しているうちに娘は胸元を合わせる紐をするすると解いていく。
たった一つのランプの明かりに左側から照らされて、ほのかに浮かび上がる佇んだ彼女の姿。白く細い指先が滑るように、編み上げられていた紐を引きぬいていく。
わずかな間見入ってしまい、反応が遅れた。
ケヴィンは早足で近付き、みぞおちあたりまで紐を解いた、彼女の片方の手首をつかまえる。
とっさに出てきた声は、意図したものとは違う、低くて威圧的なものだった。
「何をしている？」
こんな言い方をしたかったわけじゃない。ただ、彼女を止めたかっただけで……。
失敗したと思った。けれど彼女は、ケヴィンの後悔をよそにきょとんと見上げてくる。
「え？　ですから自分で服を……」
その理由を聞いているというのに！
憤る気持ちを抑え、ケヴィンは言葉を選ぶ。
「……何故、服を脱ぐ必要がある？」
彼女は目をしばたたかせた。
「だって、そのつもりであたしに服を贈ってくださったんでしょう

？」
「そんなわけがあるか。服は身に付けるためにあるものだ」
何でそんな発想が出てくるんだ。
唖然としていると、娘も何を言われているのかわからないといった様子で首をかしげた。
「でも、下働きに似つかわしくないドレスを送ってくださるということは、そういうことなんでしょう？」
「――そういうこととは、どういうことだ？」
要領を得ない物言いにいらだちを覚え、つい詰問するような口調になる。
娘は言いにくそうに口ごもった。
「それは……あたしを着飾らせて、ベッドでお相手をさせようという……」
は？
間抜けた声をうっかり出すところだった。
何をどうしたらそんな話に？
思考が上手く回らず、ケヴィンはめまいを覚える。
落ち付け。こういう時こそ平常心だ。まず状況を確認しよう。
ケヴィンは冷静を装って問いかける。
「誰がそんなことを？」
「ビィチャムさんです。ケヴィン様の結婚後の生活を心配してたビィチャムさんがすごく喜んで、オルタンヌさんを通じてどうしてもお願いしたいって」
開いた口がふさがらないとはこのことだ。
意中の相手に贈り物をすることで気を引くという方法を知らないわけではないが、今回のことをそう捉えられてしまうとは思わなかった。それに、“結婚後の生活を心配してた”とは一体何の話だ？
言葉を失い視線をさまよわせたケヴィンは、自分が娘の手首をとらえたままだったことに気付いた。そして彼女の手の向こうに、開いた胸元の艶めかしい肌を見てしまう。

ケヴィンは慌てて目をそらした。
「……服を直してくれ」
そっと手を離し、ケヴィンはよろよろとベッドに近寄った。
疲れているところに、さらに疲れた。
体を投げ出すように、乱暴にベッドの端に座る。ちらっと見れば、娘は背を向けず紐を閉じていたので、ケヴィンのほうが下を向いて見ないようにした。
この間から、わたしは何をやっているんだ……。
何かするたびに、墓穴を掘っているような気がする。こんなときこそ慎重にならなくては。
こつこつと小さな足音がして、ピンク色のドレスのすそが下を向いたケヴィンの視界に入る。
「直しました」
その声に顔を上げることなく、ケヴィンは言葉を選びながらゆっくりと話した。
「服を用意させたのは、君の服が使い古されてぼろぼろに見えたからだ。新しい仕事着を新調してやってくれという意味で言ったのだが、どうやら取り違えられてしまったようだ。――君をどうこうしたかったからではない」
言葉の伝達がまずかったせいで、不快な思いをさせてしまっただろう。
申し訳なく思うのに、娘は拍子抜けするほどあっさりと言う。
「あ、そうだったんですか。じゃあこの服お返しします」
「いや、それは外出用にでもとっておいてくれ」
せめてもの罪滅ぼしだ。作業着は別で用意させればいい。今度こそ違う意味に取られないよう、正確に。
娘はぷっと吹き出した。
「こんな上等なドレスを外出着にする下働きなんて聞いたことありません。ていうか、下働きに外出着も普段着もありませんよ。いつだって同じ服です」

「そういうものなのか？」
「そうですよ。念のため言っておきますけど、このドレスで下働きの仕事なんてできませんからね？」
娘は笑いながら、冗談口調で付け加える。
ケヴィンは罪悪感を覚えた。彼女の笑顔に、あの夜のことはなかったことにしようという気遣いを感じて。
それではこちらの気が済まない。
当人に聞くのが手っ取り早いと、ケヴィンは思った。
「なら何が欲しい？　金か？　今よりましな仕事か？」
娘の表情から、すうっと笑顔が消えた。

一章―7

「なら何が欲しい？　金か？　今よりましな仕事か？」
うわ～言ってくれるなぁ。
アネットは心の中でつぶやいた。これはちょっと……いや、けっこうイタかった。
そういう聞き方をするってことは、下心あって近付いたと思われているのだろう。主人の息子に一介の下働きが近付くなんて、そう思われても仕方ないんだろうけど、それにしたってイタい。
だから、今回のことを笑って終わりにしようとしたアネットの表情は崩れてしまった。
お金はあったらいいと思うし、仕事はもう少し楽になったらありがたい。でも、それを目的に近付いたと思われるとツラい。

ベッドの端に座ったままアネットを見上げていたケヴィンは、立ち上がって頭を下げた。
「失礼だということは重々承知している。しかしわたしは、それくらいのことでしか君に償えない」
顔を上げると、辛そうにアネットから視線をそらす。
あれ？　何か様子が……。
ケヴィンはアネットの困惑をよそに、目をそらしたまま苦しそうに言葉を続けた。
「あまりよくは覚えていないが、わたしは君に不埒な真似をしたのだろう？　金や仕事で償うのは卑怯だと思うが、わたしにできることはそれくらいしかない」
不埒？　卑怯？
これ以上言葉を続けさせるのは悪いと思い、アネットは口を開いた。
「あのぅ……ケヴィン様はあたしに何をしたと思ってるんですか？」

「……」
一瞬アネットに視線を向けたケヴィンは、“責めは甘んじて受ける”とでも言いそうな雰囲気でうつむいてしまう。
アネットはぽりぽりと頭をかいた。
「あたし、何もされてませんよ？」
驚いたように顔を上げ、ケヴィンは勢い込んで言う。
「そんなことはないだろう！　もうろうとしていたが、確かに――」
言いかけて思い出したのか、赤くなってまたうつむいてしまう。

確かにまったく何もなかったわけじゃない。
抱きしめられて。
押し倒されて。
キスされて。
髪をくしゃくしゃにされた。
でも、最後までいったわけじゃないし、ケヴィンは今、償おうとしてくれている。
アネットを傷つけたかったわけじゃない。ただ言葉が上手くなかっただけ。
だったらやっぱり、あの夜のことはこれで終わりにしちゃったほうがいい。

アネットは場を和ませようと笑い出した。
「あれくらいのこと、たいしたことありません。本当に覚えてないんですか？」
「あ、ああ……」
言い淀むけれど、覚えていないのは間違いないようだ。なら余計なことは言わないほうがいい。
「ケヴィン様はあたしを巻き込んでベッドに倒れちゃったんですが、そのあとすぐ寝ちゃったんですよ」
一部はしょって話す。

「そのあとケヴィン様の下から這い出て、靴を脱がせて毛布をかぶせたんですけどね。寒そうに震えてたからあたためてあげようと思いまして、ベッドにもぐり込んだんです」

眠って動かなくなってしまったケヴィンの下で、アネットは何とか腕を動かし、エプロンのポケットに押し込んだ布を引っ張り出してケヴィンの胸元を拭いた。

アネットの部屋から邸の中に入った時、手近にあった布をひっつかんで、ケヴィンが上着にこぼした水を拭いたのだ。それをエプロンの真ん中についたポケットに押し込んで、二階の部屋まで連れていった。

ポケットはケヴィンの体に押しつぶされてしまい、布を取り出す時に力が入った。そのときに中に軽く縫い付けてあった守り袋も、引っ張られて取れてしまったのだろう。

順番を間違えたと思う。ケヴィンの下から這い出してから、ポケットから布を取り出して拭いてあげればよかった。

ベッドから降りたアネットは、ケヴィンの靴を脱がせ毛布をかけ、床に落とした上着を椅子にかけて、寝室を出る前に念のためと思って様子をうかがった。

ケヴィンは震えてた。体を丸めるようにして。

そりゃあ寒いだろう。たくさん濡れていたし、拭いたとはいえまだ湿ったシャツを着ていて、脱がせられそうになかった。毛布の上から何かをかけようと思ったけれど、どこに何があるかわからなかったし、上着は濡れてしまっている。

それについつい誘惑されてしまった。ふかふかのベッドに。

さっきは這い出すのに精一杯だったから、今度はあたためるついでにちょっとだけ堪能したいなー、なんて。

震えが止まるまでと思いながら、靴だけ脱いで毛布の中にもぐりこんだ。

隣に横になったとたん抱き寄せられた。あたたかさを求めて、甘

えるようにすりよられて。
今度こそがっちり抱きかかえられて逃げられなくなった。
男に抱きつかれているという状況にドキドキしながらも、“あたたかくなれば離してくれるだろう”と考えているうちに、すごく眠たくなってきてしまって。
そのまま眠ってしまったのだ。

――という細かい話はせずに、簡単にまとめた。
「震えが止まるまでって思ってたんですけど、そのまま明け方まで寝ちゃいました。ごめんなさい」
アネットはぺこり頭を下げる。
が、ケヴィンから申し訳なさそうな表情は消えなかった。
「しかし、わたしが君に面倒をかけたことに変わりない」
「面倒ってほどの面倒なんてかけられてませんよ。むしろ一生ご縁がなかったはずのふかふかのベッドに寝れてらっきーだったというか……」
「だが、君はいいのか？　本来なら君と結婚しなくてはならないようなことを、わたしはしたんだぞ？」
はぁ！？
「あれだけのことで、何であたしと結婚しなきゃならないんです！？」
「――同じベッドで一夜を明かした」
「だからそれは、あたしがうっかり寝過ごしちゃっただけで」
何か話が混乱してきた。一夜を明かしたという話は、今アネットが話したから知ったはずなのに。
ケヴィンは苦悩するように、重々しく言った。
「記憶があいまいであっても、わたしがしたことに変わりはない。しかしわたしには、この家の嫡子という義務がある。君を妻にすることはできない。だから他のことで償いたいと言っているんだ」
――悪気はないんだろうけど、むかむかしてきた。

こっちが頼んでもないことを、申し訳なさそうに断るなっての！
「償ってほしいなんて言ってません。あたしに悪いと思うなら、さっさと話を終わらせて忘れてください！　だいたいこんなところを他の使用人に見られたりしたら、困るのはあたしなんですよ！？　この先仕事がやりにくくなったらどーしてくれるんですか！」
「あ――」
そのことはわかってくれたようで、ケヴィンはつぶやいて押し黙る。
アネットはとげとげしく言葉を続けた。
「そういうことですから、この場から早く解放していただけるほうがあたしには助かるんです。それともビィチャムさんが望んでいるように、“そういう仲”になってみますか？　そしたらこの服も“お手当”として受け取りますよ？」
イジワルついでに流し目を送ってみせると、案の定ケヴィンはたじろいであとずさる。
こーゆー反応も何か傷つくなぁ……。
顔をひきつらせながら、アネットは言った。
「そーゆーことで。あたし、行きますね」
アネットは扉に向かって歩き出した。

オルタンヌさん、どっかで待ちかまえてるだろうなぁ。
アネットはどう説明したものかと思案する。もしかするとビィチャムとも出くわすかもしれない。ビィチャムは“成果”を期待してるだろうから、何もなかったと話してそれで済むかどうか……。
アネットが五歩も歩かないうちに、うしろから声をかけられた。
「君はそれでいいのか？　夫でもない男に不埒な真似をされたというのに……」
途方に暮れた声。悲壮感さえ漂っているような気がする。
やれやれ。しょうがないな、このお坊ちゃんは。

アネットはきびすを返して、ケヴィンの前に戻った。見上げると、困り切った頼りなげな目でアネットを見つめ返してくる。
小さくため息をつき、アネットは苦笑した。
「相手があたしでよかったですね。相手によっちゃつけ込まれて、邸がつぶれちゃうところでしたよ。これからはビィチャムさんに相談してくださいね。心得てると思うから、ちゃんと処理してくれるはずです。――それと、今回のことをどーしても償いたいっていうなら、使用人全員にお菓子をふるまってくださいよ」
「は？」
ぽかんとするケヴィンに、アネットはにんまりと笑う。
「次に近衛隊士の皆さんが来る時でいいです。料理長さんにたくさん作るように言って、使用人全員に配るよう指示してください。全員にですよ？　そうしなきゃ下働きのあたしにまで回ってきません。――このお邸に何人使用人がいると思います？　行きわたるように作らせるとなると、すごい量になりますよ？」
我ながらいい考えだとアネットは思う。これなら念願のお菓子が食べられるし、ケヴィンの良心の呵責も解消できる。
ケヴィンは理解しがたいといった感じに眉をひそめた。
「何故、使用人全員に？」
「そりゃあ一人でいい思いをして、それがあとでバレたらコワいからです」
胸を張ってアネットはきっぱり答える。
どこかに視線をさまよわせて何やら考え込んだケヴィンは、しばらくして「わかった」と返事した。
「じゃあホントにもう行きますね」
「待て」
扉に向かおうとすると、また声をかけられる。
振り返ったら、ケヴィンがためらいがちに聞いてきた。
「君の名前は？」
あ、名乗ってなかったか。

「アネットです」
にこっと笑って答えると、アネットは今度こそ寝室を出た。

後日、近衛隊士たちがやってきたその日に、大量のお菓子が作られて、アネットたち下の使用人たちにも分けられた。
しかも何種類ものお菓子が下の使用人休憩室のテーブルに所狭しと並ぶ。
ケヴィン様ってば、いったいどういう指示の出し方をしたのかしら……？
アネットは内心あきれ果てつつ、下働きの仲間たちと一緒にお腹いっぱい食べた。

その夜、夜なべ仕事の息抜きにふと外を見てみたら、井戸の側に人影があった。
アネットは外に出て、ゆっくりと近付く。
「何でそんなところにいるんですか？　ケヴィン様」
「ここにいれば、君に会えるような気がしていた」
この人、どーいうつもりでこんなこと言うんだろう。
他意はないとわかり切っていても、アネットの頬は赤らんでくる。
暗がりでよかった……。
今宵の月は半月。満月の時ほどの明るさはない。
ケヴィンはアネットの頬に気付かない様子で、平坦な声で尋ねてきた。
「菓子は食べたか？」
「ありがとうございました。美味しかったです。お腹いっぱい食べさせてもらいましたよ。おかげで夕飯が食べられなかったです。――何て言って料理長にお菓子を作らせたんですか？」
「たまには使用人たちにも菓子を食べさせてやってくれと言って、

あのドレスと同じ額の資金を渡した。一度では使い切れないと言うから、また菓子がふるまわれることがあるだろう」
あのドレスって、そんなに高かったんだ……。
「どうした？」
額を押さえてうなだれたアネットに、ケヴィンは不思議そうに声をかける。
アネットは顔を上げ、肩をすくめて笑った。
「あんまり使用人を甘やかしちゃダメですよ。一度に一種類も食べられれば十分です」
「そうか」
言いながら、ケヴィンは上着のポケットから何かを取り出した。
長い紐のついたそれを、手のひらに載せてアネットに突き出してきた。
「下街でみつくろってきた。これに入れて首に下げておけば、なくすことはないだろう」
紐付きの守り袋だった。この間のドレスのような上等なものではなく、庶民の服の端切れのような質素な布で作られている。
これなら下働きのアネットが持っていてもおかしくない。
学習してらっしゃいます、お坊ちゃま！
「ありがとうございます」
アネットは素直に両手を差し出す。アネットの手のひらの上に、ケヴィンは守り袋を落とした。
それにしても。
「あの、お聞きしたいんですけど、あたしのアレをどうしてケヴィン様はごみだと思わなかったんですか？」
ケヴィンは不思議そうに首をかしげた。
「何故あれをごみだと？　擦り切れ汚れても持ち歩いているだろうものだから、相当大事にしているのだと思っただけだ」
アネットの胸の奥が、ほっこりと温かくなった。

第一章　完

二章ー1

「今日もケヴィン様は外で“お食事”なんだって」
みんな、どんなお食事なのか知っていながら、お上品に“お食事”と言う。
別に隠すほどのことじゃないと思うのに、何故かそう言うように上の人から指示があって。「お貴族様のすることってたまにわかんないわ」とアネットは思う。

その日の深夜繕いものをしていると、外でブーツの底が土を蹴る人の足音が聞こえて、アネットは小さなランプと、あらかじめ用意していたコップを二つつかんで外に出た。
アネットの部屋は、邸の裏庭に面している。
月星の明かりにぼんやりと照らされた井戸の側に、人影が二つあった。そのうちの一つがアネットに近付いてくる。
「こんばんは～。アネットちゃん」
「こんばんはです。ヘリオット様」
小声であいさつをかわした。
近付いてランプをかかげれば、人好きのする柔和な顔立ちがぼんやりとだが確認できる。
ヘリオットは、甘えるような口調でアネットに言った。
「お水ちょーだい」
「はいはい。じゃあこれ持っててくださいね」
近付いてきたヘリオットにコップを二つとも渡すと、アネットはヘリオットの横をすり抜けて、井戸に桶を落として水をくみ上げる。
もうすっかりおなじみのやりとりだ。
滑車に通した縄を引いて持ち上げた桶を引き寄せて井戸の縁に置くと、隣に立ったヘリオットがそこからコップに水を汲み、もう一人にコップを押しつけた。

「ほらケヴィン」
「飲んだらさっさと帰れ」
「へいへい」
冷たい一言に、ヘリオットは軽口で答える。ケヴィンはいまいましげに片眉を上げるが、何を言うわけでもなく水を飲み始めた。
コップになみなみと汲んだ水をあおるように一気に飲み干したヘリオットは、もう一杯汲みながらアネットに声をかける。
「ねーアネットちゃん。今度ご飯一緒に食べに行こうよ。おごるよ？」
「やだなー、ヘリオット様ならお誘いできる人いっぱいいるでしょ？　あたしは仕事が忙しくって、ごめんなさーい」
これもいつもの会話。
時と場合によるけど、こういう時の“ご飯”ってそれだけの意味じゃないわよね……。
何のつもりがあってこういう誘いをかけてくるのかわからないけど、もてあそばれるのも、そのつもりで出向いてからかわれるのもごめんだ。
それにヘリオット様のこれは、“社交辞令”っぽいのよね。“女とみたら誘うのが礼儀”みたいな……。
そういう相手は、仕事を楯に断るに限る。
これもまたいつも通りだけど、ヘリオットはあっさりと退いた。
二杯目もくーっと飲み干すと、アネットにコップを返す。アネットはそれを両手で受け取った。
「残念！　暇ができたら声かけてよ。じゃあこいつよろしく」
「はぁい。おやすみなさ～い」
「おやすみ～」
背を向けて軽く手を振り、ヘリオットは足取り確かに去っていく。
その姿が建物の影に見えなくなったところで振り返ると、ケヴィンはすでに戸口に向かって歩き出しているところだった。
アネットは桶に汲んだ水を近くの庭木にまくと、桶を元の場所に

戻して音を立てないようにケヴィンに駆け寄る。
ふらつくケヴィンを横から支えた。
「ケヴィン様って、けっこうお酒に弱かったりしません？」
ケヴィンからの返事はない。
機嫌悪くさせちゃったかな？
男性はたいていの人が、お酒に限らず“弱い”と言われることを嫌うと聞いている。
ケヴィンを前にすると、どうもうっかりしてしまいやすい。
出会い方のせいだろうか。
一カ月と少し前、頭脳明晰、品行方正と言われてきたケヴィンの失態を、アネットは二度も目撃してしまった。そのせいか、ついつい馴れ馴れしくなってしまうのだ。
……こういう“お付き合い”が続くのも原因の一つだと思うけど。
アネットは胸の内でひとりごちる。
夜にお酒を飲んで帰ってくるのは邸の誰もが知ってるのに、何故かケヴィンはここから邸に入ろうとする。本来なら話をすることも近付くこともないはずだったのに、あの時のことがきっかけでいまだに縁が切れない。
主人の家族と使用人が親しくしてるのは、あまりよろしくない。ケヴィンの外聞もあるし、アネットもこのことばバレれば働きづらくなる。
でもそのことを強く言って、ケヴィンに近づかないようにしてもらおうというのもなかなかできない。
何だかんだ言っても、ケヴィン様とお近づきでいられて嬉しいのよね……。
出迎えて、水を汲んで、部屋を通す。そしてたまにこうして支えてあげる。
それだけのことだけど、アネットにとってひそかな楽しみの一つになっていた。

中に入ると、ケヴィンは壁に寄せて置かれたベンチにさっさと座り、コップをまたあおった。さっき飲み干した様子だったから、アネットが見ていないうちに桶からもう一杯汲んだのだろう。
左手でコップを持つケヴィンの小指に、金色の指輪がきらり光った。
貴族だと指輪だけでなく腕輪や首飾りといった、いくつもの装飾品を身に付けるものだというけど、ケヴィンがこの指輪以外に身に付けているところを見たことがない。もしかすると装飾品は嫌いなのかもしれない。それでも身に付ける指輪には、何か思い入れがあるとか。
つらつら考えていたところで、ふと思い出した。
「そういえば、ロアル君はどうしたんです？」
ロアルとは最近ケヴィンの従者になった少年だ。夜の外出が多くなったケヴィンを心配して、邸の主でありケヴィンの父であるクリフォード公爵が付けた。
ケヴィンより一つ年下で、男爵家の傍系に当たる彼は、あまり貴族らしくなく、快活で人当たりのいい少年だ。だけど従者のお勤めはこれが初めてだからか、ケヴィンに上手に仕えているとは言い難い。
ケヴィンは先程の不機嫌が続いているのか、むっすりと答えた。
「あいつは酒場で潰れて起きないから置いてきた」
「あらら」
思わず同情の声をもらしてしまう。
明け方、邸の扉を叩いて大騒ぎして、ビィチャムさんに大目玉をくらうロアルが目に浮かぶようだ。というか、見てはいないけど、何日か前にすでに大目玉をくらったと噂話で聞いている。
もうちょっとうまく立ちまわればいいのに。
空になったコップをケヴィンから受け取りながら、アネットはため息交じりに言った。
「ロアル君にも、あたしの部屋からこっそり入れるって教えてあげ

てくださいよ」
すると、顔を上げたケヴィンに何故かにらまれた。
「そこに座りなさい」
指し示されたのは、木でできた三本脚の丸椅子。さっきまでアネットは、そこに座って繕いものをしていた。
座るのはいいんだけど、何で説教モード？
内心首をかしげつつ、アネットはケヴィンと差し向いになるように椅子に座った。

二章―2

様子をうかがうような上目づかいをしながら丸椅子に座ったアネットを、ケヴィンはベンチに座ったまま見据えた。

「前々から思っていたのだが、君はもっと自分の身を守ることを考えたほうがいい」

「はぁ……」

アネットは気の抜けた返事をする。その態度にケヴィンのいらつきが増した。

「君はわかっていない。あいまいな態度は相手をつけ上がらせるだけだ。嫌なら嫌で、はっきり拒絶の言葉を口にしなければ、いつまで経っても相手は退いたりしないものだ」

下街の酒場に飲みに行っていることをとっくに家人に知られているのに、何故裏からこそこそと邸の中に入ることをやめられないでいるかというと、帰宅しようとするケヴィンにヘリオットがくっついてきて、アネットにちょっかいをかけるからだ。それをアネットがきっぱりとした態度で拒絶しようとしないから、ヘリオットは懲りずにアネットを誘う。

彼女はわかっているのだろうか。ヘリオットが女と見れば誰でも口説く女たらしだと。

酒場で一緒に飲むことが繰り返されるうちに、だんだんわかってきた。

ヘリオットは外見を裏切らない軟派な男だ。

下街のどこを歩いていても行き交う女に声をかけ、女から声をかけられることも多い。そして酒場から女と一緒に姿を消すこともしばしばだ。何故かそろそろお開きにしようかという頃には戻ってきているのだが。

今夜も女の化粧や香水の移り香をにおわせながら戻ってきて、邸

の裏までついてきてしまった。
女を抱いたであろう直後に、別の女を口説く。
そんな不誠実な男に嫌がるそぶりもなく、それどころか気を引くかのように返事をはぐらかす。
それがどれだけ危険なことか、彼女はちっともわかってやしない。

案の定、アネットはケヴィンの気も知らず、にこにこと笑いながら答えた。
「ヘリオット様のあれは、冗談に決まってるじゃありませんか。あたしが真に受けたらヘリオット様も困られるだろうから、はぐらかしているだけです。挨拶みたいなものですから、ケヴィン様も気になさらないでくださいよ」
挨拶？　あれが挨拶だと？
ヘリオットの行状を知らないから、そんな能天気なことを言っていられるのだ。
とはいえ、彼女を怖がらせるわけにも、このような不届きな話を聞かせるわけにもいかず、ケヴィンの言葉もあいまいになる。
「君が思っているほど世の男たちは紳士的ではない。もう少し警戒心を持つべきだ。君の言動が相手にどのような影響を与えるか、考えたことはあるか？」
困ったような顔をして、アネットは首をかしげる。
「えーと……まぁ、それなりに？」
アネットの返答を聞いて、ケヴィンは額を押さえた。
これは絶対にわかってない。
よくもこんなで、今まで無事に過ごせたものだ。
頭痛までしてくる。
「……だいたい、ロアルにまでここのことを教えて、もしものことがあったらどうするつもりだ？」
アネットは一瞬きょとんとし、それからけらけらと笑い出す。
「ロアル君に限ってそんなことありませんって」

「君はわかっていない」
ケヴィンはきつい口調で告げて、アネットの言葉をさえぎった。
「子供みたいに体が細くても、あれはれっきとした男だ。その気になれば、君一人くらいねじ伏せられるだけの力を持っている。そんな者と夜中に二人きりになってしまう機会をわざわざ作るなんて無防備にもほどがある」

言い切ってから、ケヴィンはふとこう思った。
……いや、彼女はどうもしないのかもしれない。
ケヴィンのときだってそうだった。酒に酔ってのこととはいえ、ケヴィンは確かにアネットをベッドに押し倒し、体に触れてキスまでした。自らの意思でそのようにしたとは言い難いが、その行為は間違いなく、ケヴィンがアネットに心配していることの前段階と言える。そのようなことをされたというのに、ケヴィンと違ってアネットには記憶がしっかりと残っているはずなのに、何故か彼女はたいした償いも求めずあっさりとケヴィンを許した。
それに、使用人頭に命じられたからといって、簡単に体を差し出そうとまでして。
そのようなことがあったせいか、ケヴィンはアネットを意識せずにはいられない。
酔って足元をふらつかせたケヴィンを支える、彼女の細い肩や小さな手、腕に感じる豊かな髪の柔らかさに、心臓が跳ねる。
しかしこれは、彼女をいとしいと思ってのことではない。
条件反射のようなものだ。一度は男女の仲になりかけた、その時のことを忘れられないがゆえの。
それに、いとしかろうと単なる欲望であろうと、彼女を己のものにするつもりはケヴィンにはない。
貴族の中には使用人に気まぐれに手を出して、あとは金などで解決して終わる者もいるが、ケヴィンはそんな無責任な行為を嫌っている。

――そのはずだったのに、いざ自らが過ちを犯した時、結局彼らと同じことをするしかなかった。恥ずかしいと心底思う。使用人はモノじゃない、人だ。主従関係はあっても、将来にかかわることを金などで安易に解決してそれで済ませていいはずがない。

けれどあのときは、それしか償う方法を考えつかなかった。

いくら身分や金を持っていても、償えないことがある。

だから彼女に対する時、ケヴィンは自分に言い聞かせていた。

彼女の未来を保証できるわけではないのだと。

このように、ケヴィンはアネットのことを思いやっているのに、当のアネットは自らのことに無頓着すぎる。

ケヴィンがどれだけ心を砕いたところで、最終的に彼女を守れるのは、彼女自身でしかありえないのに。

ここまで言ってようやくケヴィンの気持ちをわかってくれたのか、アネットは口をつぐんで黙り込んだ。

わかってくれれば、それでいい。

ほっとしてケヴィンが息をついたところに、アネットがぼそっと言った。

「それで言ったら、今の状況もかなりヤバくありません？」

は？

声も出せずにぽかんとすると、アネットは肩をすくめいたずらっぽく笑った。

「今のあたし、夜中に男の人と二人きりですよね？」

アネットの立てた人差し指が、彼女とケヴィンを交互に指し示す。

ケヴィンは血が逆流する感覚を覚え、とっさに叫ぼうとした。

「わたしは……っ」

そのようなことは断じてしない――と続けようとして、ふと思い立った。

普通に言ったって、どうせ聞きやしない。ならば、いっそ。

ケヴィンはうっすらとくらい笑みを浮かべた。

「……では、わたしが今、その気になったと言ったらどうする？」

「え……」

アネットがわずかに目を見開く。

それを見て、ケヴィンは満足そうに笑みを深めた。

「今ここで、君にわたしの相手をするようにと言ったら……？」

彼女は、少しばかり怖い思いをしたほうがいい。
そう思って更に脅しをかけたつもりだったのに。
アネットはあっさりと即答した。
「だったらお相手しますよ？」
一瞬何を言われたのかわからず、ケヴィンは目をしばたたかせる。
アネットは念押しするようにゆっくりと言った。
「ですから、夜のお供にあたしをご所望でしたら、お相手しますって」
そう言ってにっこり笑うアネットに驚いて、ケヴィンは座っているベンチを大きく揺らしのけぞった。
「なっ……！　何を言ってるのか自分でわかっているのか！？」

同様に声が上ずる。
アネットは会話の内容に合わない朗らかな笑顔で言った。
「そりゃあもちろん。ケヴィン様みたいなかっこいー人の相手だったら、むしろらっきーかなって」
開いた口がふさがらないとはこのことだ。

予想外の返答に驚き。
脅しが効いていないことに腹が立ち。
女性の口からこのようなことを聞いて焦り。

いろんな感情が押し寄せてきて対処しきれず、硬直したままぐるぐる考える。
彼女を凝視したまま。

どのくらい経っただろう。

彼女の顔からいつの間にか表情が消え、じっとケヴィンを見つめ返していた。
「ケヴィン様」
「――何だ？」
つぶやくようにもらされた呼び声に、ケヴィンは平静を取り繕いながら答える。
アネットは淡々と言った。
「ここ、あたしの部屋なんです」
「――は？」
この物置きが？
細長く狭い部屋の半分に荷物が雑多に積み上げられ、どう見ても物置にしか見えない。

落ち着かなくなり腰を浮かせかけ、部屋のあちこちにちらちら視線だけ向けていると、アネットはケヴィンの脇を指差した。
「それでそのベンチ、あたしのベッドなんです」
「！！！！！」
ケヴィンは飛び上がるようにして、アネットがベッド代わりにしているベンチから立ち上がった。

二章―3

多分ケヴィンの中には、女性の部屋はむやみに立ち入っていい場所ではなく、女性の使うベッドに腰掛けるなんてもってのほかという、がっちがちの固定観念が染みついているのだろう。

……予想していたとはいえ、そういう反応はちょっと傷つくなぁ。

焦ってベンチから飛び退いたケヴィンを眺めながら、アネットは肩をすくめた。

――今ここで、君にわたしの相手をするようにと言ったら……？

これは単なる怖がらせ。そのつもりがないことはすぐにわかった。

ケヴィンはこういうことをさせるような人じゃない。そのことは一カ月前からよく知っている。

使用人頭に頼まれて、夜の相手をするためにケヴィンの部屋を訪れた時、ケヴィンはアネットが服を脱ごうとするのを止めて、それどころか酒に酔った上での出来事を償ってくれようとした。

償わなくていいと言ったアネットに、ケヴィンが困惑した理由はわからないでもない。

酔っていたとはいえ、ケヴィンの手はアネットの体をまさぐり、唇に唇を押しつけた。

それが性的な意味合いのある触れ方だったということは、アネットにもわかっている。

でも、それだけのことだ。

最後までされたわけでもないし、ケヴィンはひどく反省していた。

そんな彼が、アネットに夜の相手をさせるわけがない。

それに。

ただ見つめられただけで言われても、怖さに欠けるのよねぇ……。

本当に怖がらせたかったら、押し倒すか、せめて手を伸ばしてくるくらいしないと。
ヘリオットならやりそうだけど、艶事にあまり縁のないらしいケヴィンは、きっとそういうことに考えが及ばなかったのだろう。
ただ、そのようにされたからといって、実際にアネットが怖いと思うかどうかはわからない。
――だったらお相手しますよ？
本気、というか、実際そういうことになっても、別にかまわなかった。
初めての相手がケヴィンだったらっきーだとホントに思うし、ケヴィンが悪い女につかまってしまうくらいなら、いっそアネットを遊び相手にしてくれたらと思う。
ケヴィン様はあたしのことを危なっかしいと思ってるみたいだけど、あたしからすればケヴィン様のほうが危なっかしいんだけどなぁ。
気分はケヴィンの母親か姉のようだ。いや、もしそうだったらケヴィンの相手にはなれないんだけど。

とはいえ。
――では、わたしが今、その気になったと言ったらどうする？
かすれ声でそう言われた時には、さすがにドキッとした。

「すっすまない！　しかし、君はこれを本当にベッドに？」
立ち上がったケヴィンは、信じられないような目でベンチを見て、それからアネットのほうを向いた。
「こんな狭いところですし、ベッドの数も限られてますからね。寝る時はそこに畳んであるマットを敷いて寝るんです。寝心地悪くないですよ？」
ベンチの隅に畳んで置かれた寝具を指して、アネットは言う。
ケヴィンはまだ信じられない様子でわずかに目を見開いていたけ

れど、よろよろと洗濯室に続く扉に近付いていった。
信じられなくても、女性の部屋だと知ったからには早々に退散しようってことね。
ケヴィンが固まってしまいいつまで経っても動かないから、ちょっとショックを与えてみるつもりでここがアネットの部屋だとバラしてしまったけど、これでもうここには来なくなってしまうかもしれない。
うーん、残念なことしちゃったかなぁ。
言ってしまったものは仕方ない。
アネットは丸椅子から立ち上がって、ケヴィンについていく。
扉を開いたところで、ケヴィンは振り返った。
「今まで頼み忘れていたのだが」
「何でしょう？」
「このことは殿下には内緒にしてほしい」
このこと？
いろいろあり過ぎてどれのことかわからない。泥酔して真夜中に帰ってくることなのか、アネットとこうして話していることか、それとも一カ月前のあれをきっかけにアネットと知り合ったことを言っているのか。
わからなかったけれど、どうせ返事は一緒だ。だから聞き返すのはやめた。
「わかってますよ。っていうか、あたしじゃ王子様にお会いすることもできませんって」
ケヴィンは背が高い。アネットとでは、頭一つ分の身長差がある。
何か考えているような、問いたげな視線で見下ろしてくるケヴィンに、アネットは心得てますというようににっこり笑った。
「誰かに話すと王子さまにまで話が伝わっちゃうかもしれませんし、誰にも言いませんよ」
内緒にしておくのは、アネットの保身にもなる。こうしてケヴィンと話していることが知れれば、使用人のみんなに何を言われるか

わかったものではないから。
ケヴィンはどう思ったのか。
戸枠に体をもたせかけ、額に手を当てて苦しそうに息をついた。
ちょっと悪酔いしているのかもしれない。
「ご気分悪いんですか？　早くお部屋に戻ったほうがいいですよ」
アネットはケヴィンの隣に立って、腕を肩の上に担ごうとする。
そのために伸ばした手が、ケヴィンの手のひらに押しのけられた。
「一人で戻れる」
そう言って戸枠から離れるけれど、支えを失ったケヴィンの上体はゆらゆらと揺れている。
洗濯室は床に段差がある。アネットは身をかがめてケヴィンの脇に滑り込み、体を伸ばしてケヴィンの腕を担ぎあげた。
「ここは危ないですから、洗濯室の外までは送ります」
今度は拒むことなく、ケヴィンは少しアネットに寄りかかった。
アネットはそれを支え、よろよろと歩く。
出口の手前で、ケヴィンはアネットの肩から腕を外し、背を向けるようにして一人廊下に出た。
足元がおぼつかない様子なのに、アネットに部屋まで送らせる気はさらさらないらしい。
アネットはそれ以上のことはせず、洗濯室からちょっとだけ顔を出してケヴィンを見送った。
「転ばないでくださいねー……」
返事はなく、ケヴィンは長い廊下を足元をふらつかせながら壁伝いに歩いて、暗がりの向こうに消えていった。

今日は朝から、邸の中が甘い匂いでいっぱいだった。
こういう日は、午後から近衛隊士たちがやって来て、使用人全員にお菓子が配られる。
ケヴィンからアネットへの“償い”だ。アネットは一度きりと思

っていたのに、今では習慣になっていた。
仕事に一段落つく頃、待ちに待った午後の休憩の時間がやってくる。
洗濯室の後片付けを終え、うきうきしながら廊下を歩いていると、休憩室のほうから声が聞こえた。
「あれ？　一個余ってる」
「誰かまだ食べてない？」
「どうせ数が間違ってただけでしょ」
「食べちゃお」
え！？　ちょっと待って！
走っちゃいけないと言われている廊下を小走りし、アネットは休憩室に飛び込む。
目にしたのは、十人くらいの仕事仲間と、彼女たちの手によって大皿の上でぼろぼろにほぐされたケーキだった。
「あ……」
アネットに気付いた彼女たちの中から、小さな声がもれた。自分たちがつまむお菓子が誰のものだったのか気付き、気まずそうに眉尻を下げる。
アネットはとっさに笑顔を作っていた。
「あ、あたしはいいです。ちょっと、いろいろやることがあって……」
「あ、そう？　悪いわね」
年配の女性はほっとした顔をして、すぐさま指先につまんだままだったお菓子を口の中に放り込む。それを見た他の人たちも、次々とかけらになったお菓子を口に運んだ。
それを最後まで見届けることなく、アネットは洗濯室へと引き返した。
そう。いろいろとやることがある。それは本当のこと。
洗濯物を取り込んで畳んで、シャツやシーツにはアイロンをかけ

なくてはならない。それが終わったらすぐに夕飯の野菜の皮むきを始めないと。
休む暇なんてホントはない。それはみんなにも言えることなんだけど。
……いじめられてるわけじゃない。ちょっと忘れられちゃっただけ。お菓子ならまた次もある。
アネットは頬をぺしぺしと叩いて気持ちを切り替え、洗濯室から外に出て洗濯物を取り込みはじめた。

最近の夜は、ケヴィンが邸にいると知っていても、何かのついでに外を見てしまう。
お菓子を食べ損ねてしまった日の夜、繕いもので凝り固まった体を伸びしてほぐしながら、扉の窓から外をのぞいた。
すると井戸の傍らに人影を見る。
伸びを終えたアネットは、ランプを手に取り、迷うことなく扉のかんぬきを外して裏庭に出た。
真夜中、外に出て人影に近付くのは危険だとわかっている。
が、暗がりでよく見えなくても、アネットにはそれが誰なのかすぐにわかった。根拠なんてない。ただの勘だ。
ランプをかざしながら近付いていくと、真っ暗な庭を見渡すようにしていた人物がアネットに顔を向けた。
「ケヴィン様」
今夜はヘリオットたちと“お食事”には行かず、邸の中でくつろいでいたはずだ。
「どうかしたんですか？」
「君に聞きたいことがあって来た」
「だったら声をかけてくださいよ。あたしが気付かなかったらどうするつもりだったんです？」
「……その時は頃合いを見て戻るつもりだった。真夜中に女性を訪

ねるのは非常識だとわかっている。だがこの時間にしか君に会うことができないから、君が気付いてくれるのを待っていた」
優秀なのかやっぱり非常識なのか、どっちとも言い難い発言。
アネットは小さくため息をついた。
「遠慮なんて今更でしょう？　真夜中に何度あたしの部屋を通り道にしたと思ってるんです？　ともかくこっちに来てください。そこだと誰に見られるかわからないから」
建物から少し離れた井戸の周囲からは、屋根裏部屋の小さな窓も見える。みんな寝静まった夜中でも、誰かが目を覚ましてふと窓の下をのぞかないとも限らない。
アネットは部屋に戻りかけたけれど、ケヴィンは動こうとしなかった。
もう一度ため息をついて振り返る。
「あたしはそこの部屋で寝てますけど、物置に変わりないんです。むしろあたしのほうが間借りしてるっていうか。だから気にしないでくださいよ」
側に戻って、空いている手でケヴィンの手首をつかむ。引っ張ると、拒むことなくケヴィンはついてきた。

“物置き”に入ってすぐ、アネットはケヴィンにベンチをすすめる。
「それも今は単なるベンチです」
そう言い切って、自分はさっさと丸椅子に座る。
木箱の上に置いてあった服を膝の上に置き、小さなランプの明かりをたよりに繕いものを始めた。シーツの端のしまつや、衣服のつぎ当て。縫わなければならないものはいくらでもあって、一晩で終わらないこともある。
「ためこむと後が大変だから、失礼させていただきますね。それで聞きたいことって何ですか？」
ケヴィンは少し迷ったようだけど、そのうちベンチに腰をおろし

た。
「今日の菓子は美味かったか？」
「え――」
唐突な質問。その内容に、アネットはぎくっとして針を進める手をわずかに止めてしまう。
アネットの心中を知ってか知らずか、ケヴィンは淡々と言い直した。
「料理人に、今日の菓子は美味かったかと聞かれた。わたしはそう好きではないから、聞かれてもよくわからないんだ。それに、君にやるつもりで作らせているものだから、君の意見を聞いたほうがいいと思い、返事を保留している」

あきれて返事ができなかった。
そんなの、適当に答えておけばいいのに……。
だいたいその場で答えられるはずのものを保留になんかして、変に思われなかったんだろうか。

そう思いながらも、アネットはほっとしていた。
食べてないのがバレたわけではなさそうだ。
「美味しかったですよ」
あの時のみんなの様子からして、それは間違いないと思う。
「やわらかくってふわふわしてて、また食べたいです」
昼間見た光景を思い出しながら、アネットは感想を作っていく。余っていた分をあっという間に分けてしまうくらいだ。きっとみんなもまた食べたいと思っているはず。
これ以上の感想を言いようがない。アネットは話を終わらせるように言った。
「それにしても、そんなことをわざわざ聞きに来てくれたんですか？　ちゃんとした答えを言わなきゃならないからって、真面目にもほどがありますよ」

ケヴィンは何も言わなかった。
間が持たなくなりそうになって、アネットは陽気な口調で続ける。
「これからは“美味かった。また食べたい。新しい菓子にも期待している”って答えておいてくださるといいです。あたしいつも、そんな感じのこと思ってますから」

しゃべることがなくなると、部屋の中は急に静まり返った。
今日の天候は穏やかで、風の音すら聞こえてこない。
真夜中過ぎの邸の中からは、物音一つしない。
進める針やわずかな衣擦れの音は、賑やかしにもならなくて。

沈黙に息苦しさを感じ始めた時、ふいにケヴィンは立ち上がった。
外に続く扉のほうへ足を向ける。
「どちらに行かれるんですか？」
「庭を少し散策してから戻る。今夜はここを通らないから、君は早く寝るといい。――夜ももう遅い」
「そうですね。……おやすみなさい」
木箱の上に繕いものを置いて立ち上がったアネットを、ケヴィンはちらり振り返った。そしてつぶやくように「おやすみ」というと、静かに扉を開けて出ていった。

二章－4

アネットに感想を聞きに行ったのは、料理人から聞かれただけでなく、ケヴィンも知りたいと思ったからだ。
料理人は自信作だと言った。近衛仲間たちにも好評だった。
だから彼女がどういう感想を持ったか、興味があった。

しかし彼女の口から聞かれたのは、どこか言い淀んだ感じのするあいまいな言葉ばかりだった。
その上、半ば強引に話を終えようとした。
彼女らしくない、どこか逃げ腰な態度。

思わず追究したくなったが、寸でのところで思いとどまった。
少しも顔を上げず話し続ける彼女の様子に、問い詰めれば傷つけてしまいそうな雰囲気を感じ取って。
これも彼女らしくない。ケヴィンが警戒心を持たせようとして脅しをかけたときだって平然としていて、むしろケヴィンのほうが焦って慌てさせられたというのに。

問いかけの言葉を口にするのを止めると、他の言葉も出てこなくなった。
彼女との間に生じた初めての沈黙に耐えきれなくなって、ケヴィンは早々に彼女のもとを辞した。

聞かないと決めたのなら、忘れてしまうのがいい。
気持ちを切り替えようと夜の庭を散策した。けれど疑問が強くなるばかり。ベッドに入ってもなかなか寝付けず、疑問を翌日まで持ち越した。

「おいおい、どうしたよ。気ぃ入ってねーな」
近衛仲間があきれ声で言う。
訓練用の剣を不意に打たれて取り落としてしまったケヴィンは、恥入りながら剣を拾った。
今は型の訓練だ。二列に並んで向きあい、決められた型通りに剣を振っていく。ただ、それだけだと緊張感を持続させにくいので、向きあった相手に打ちかかっていってもいいことになっていた。
型を間違えないように剣を振り、相手からの攻撃に注意し、逆に打ち込む機会をうかがう。
そんな訓練のさなかにぼんやりしてしまい、ちょっと剣を叩かれただけで落としてしまった。
何をやっているんだ、わたしは。今は集中すべき時ではないのか。
剣を拾って身を起こすと、型を続けている周囲の仲間たちに合わせて、ケヴィンは剣を振りはじめる。
「すまなかった。また頼む」
相手は軽く肩をすくめ、それからすぐに打ち込んでくる。振り下ろされた剣を、ケヴィンは型の流れを利用して打ち返した。

その後は何とか集中を保つことができたが、それで疑問が消えたわけではなかった。集中するために抑え込んでいた分、戒めを解いた途端考えが占められてしまう。
どうしてこんなにも気になるのか。
彼女らしくない。そう思ったのが疑問の始まりだったが、らしくないと言えるほど彼女のことを知っているわけじゃない。
なのに忘れられないのだ。引っかかりを覚えてしまった彼女の言動を。

このままでいては、翌日には更に集中力を欠いていることだろうと想像がついた。

疑問を解消しなければ。
だが、彼女に問うのはやはり気が引けた。
かといって、使用人頭のビィチャムや他の使用人に聞くわけにはいかない。問えば以前のように誤解されるだろう。あのときは誤解を解くのに苦労した。ぼろぼろの服を見かねて指示を出しただけと言っても変に勘繰られて。何とか解けたからよかったものの、そうでなければ彼女に迷惑をかけるところだった。あの時以降、彼女とたまに会っていると知られれば、今度こそ何を言っても通じないだろう。
ならばどうしたらいいか。

悩んだ末、夜、シグルドが家庭教師に勉強を教わっている最中に、私室に戻ってロアルに言った。
「内密に調べてほしいことがある。絶対に他言無用だ。守れるか？」
書斎机の肘掛椅子に座り、机の上に肘を突いて顔を上げる。
そしてケヴィンはぎょっとした。
「……何て顔をしている？」
目をきらきらさせ喜色満面な表情をしながら、胸の前で両手を握り合せていたロアルは、ケヴィンが気味悪そうに目をすがめたにもかかわらず、諸手を上げて叫んだ。
「主人から内緒話！」
「声が大きい！」
騒いだら内緒話も内緒でなくなる。
ロアルは夜の外出が多くなったケヴィンに父公爵がつけた従者だが、人に仕えるのは初めてだといい、今はただケヴィンのあとをついてくるだけだ。ケヴィンも従者をつけて歩くのはこれが初めてなので、ロアルの扱いに迷っている部分も多い。
今回初めてついてくること以外の仕事をロアルに頼もうとしたのだが、ケヴィンはすでにその判断を後悔し始めていた。

「それで何を内密に調べればいいんですか？」
「……」
声をひそめながらわくわくと聞いてくるロアルにげんなりしながらも、彼にしか頼めないことを思い出して、ケヴィンはしぶしぶ切り出した。
「先日邸の者たちに菓子が配られた時、使用人全員に菓子が行きわたったかどうかを調べてもらいたい。できそうか？」
ロアルはあごにこぶしを当てて首をひねった。
「聞いて回れれば簡単ですけど、内密にってことになると難しいです。そもそも何で内緒にしなくちゃいけないんですか？」
近衛隊士たちに飲まされて酔いつぶれたり、明け方直前に正面玄関の扉を叩いて大騒ぎをしたりと頭を抱えてしまう行動の多いロアルだが、頭の回転は悪くないらしい。するどいところを突かれて、ケヴィンは喉をつまらせる。
ロアルの言う通り、使用人全員に確認するなら内緒にする必要はない。ケヴィンが指示したことなのだから、それがきちんと行われているか調べるだけのこと。
しかし、ケヴィンが知りたいのは特定の一人に配られているかどうかだけだった。もし配られてなかったとしても、彼女が隠したがっているからには表ざたにするわけにはいかない。
ケヴィンが返答に悩んでいると、ロアルは「んー」とうなりながら考え込んで、それから口を開いた。
「もしかして、知りたいのはアネットさんに関してだけだったりしませんか？」
「――！　何故彼女のことを知っている！？」
ケヴィンは誰にも、アネットのことを話していない。
まさか彼女とのことを、使用人たちに知られているのか！？
焦って腰を浮かせかけたその時、ロアルはあっさりと答えた。
「ヘリオット様から聞いたんです」
ケヴィンは椅子に座り直し、額を押さえた。

そうだった。ヘリオットだけは知っていたか……。
もちろんヘリオットにも話したことがない。だが、夜中邸に帰る時、いつの間にかついてきていて知られてしまった。
隊内で言いふらす様子がなかったから、油断していた……。
うなだれるケヴィンに、ロアルはすねたように言う。
「そういう話は事前に教えておいてくださいよ。そうすれば普段から関係ありそうな噂を集めておきますから。もちろん秘密厳守もわかっています。それでアネットさんのことなんですが、多分食べてないと思いますよ」
何でもないことのように続けられた言葉に、ケヴィンは表情を引き締めて顔を上げる。
ロアルは気にした様子もなく続けた。
「彼女、この邸の中で立場がめちゃくちゃ弱いんですよ。拾われて育ててもらった恩義もあってせっせと働くんだけど、他の人たちがそれにつけこんでいろんな仕事を押しつけてるみたいで。お菓子も、誰かに欲しがられてあげちゃったんじゃないでしょうか」
「拾、われた……？」
「そうです。この邸の前に捨てられていたのを公爵様が拾われて、使用人に育てるようおっしゃったんだそうです。公爵様はそれっきりアネットさんに関わらなかったそうですけど、オルタンヌさん――今の女使用人頭さんは、亡くした娘さんの名前をつけて大事に育てたんだそうですよ。ですがやっかむ人はどこにでもいるんですね。オルタンヌさんの娘として扱われるアネットさんが成長してくるにつれて、オルタンヌさんの後釜を狙う人たちがアネットさんを邪険にするようになって、そのうちみなしごが自分たちと同じ扱いなのはおかしいと抗議を始めたっていいます。そうしたらアネットさんは自分から下働きになると言い出して、それまで住んでいたオルタンヌさんの部屋からも出たんだそうです。ですが、アネットさんが公爵様に拾われてオルタンヌさんに育てられたっていう事実は変りませんからね。いつ上の使用人になってもおかしくない立場を妬ん

で厳しく当たる人とか、妬む人がいるせいでアネットさんが強気に出られないのをいいことに利用してる人とかいるみたいです」
話を聞いていくうちに、憤りがこみあげてくる。
「生まれや生い立ちは彼女のせいではないだろう？　そうした者たちは、罰せられてもおとなしくならないのか？」
ロアルに向ける視線がついきつくなった。ケヴィンににらまれて、ロアルは少しびくびくしながら答える。
「ば、罰せられてはいません。ホントにささいなものなんです。他の人より八つ当たりされやすいだけだったり、仕事を押しつけられるといっても、一人じゃとてもできないような量を押しつけられてるわけでもなくて。最初の頃はもう少しひどかったらしいですけど、彼女が下働きとしてなじもうと頑張ったからでしょうね。今では他の下働きと大差ない扱われ方をしてます。まあ、その“他の下働き”たちが図に乗ってアネットさんに仕事を押し付けるんですけど。――ここで下手に罰したりしたら、アネットさんを特別扱いしたことになって、せっかくのアネットさんの努力が水の泡になってしまいます」
彼女の努力。
その言葉に、怒りがすうっと引いた。
――ホントにささいなものなんです。
そうしたものに、ささいも何もない。悪意は悪意だ。彼女を貶め傷つけようという意図に変わりない。
彼女の努力で減っているというが、本当に放置しておいていいのか？
彼女を拾ったという父はこのことを知っているのか？　オルタンヌは自分の養い子がそういう目に遭っているのに何もしないのか？
視線を落とし悩み始めたケヴィンに、ロアルは励ますように言った。

「アネットさんなら大丈夫ですよ。そういうイジワルをする人たちを、周りの人間はちゃんと見てます。イジワルをする人は嫌われやすいですからね。今では彼女たちのほうが、肩身の狭い思いをしているかもしれません」
「どうしてそう言い切れる？」
疑いの目をして質問を投げかければ、ロアルは胸を張って答えた。
「それはこの噂を聞けたからです。僕の考えも多少挟みましたけど、ほとんど聞いたまんまですよ。アネットさんが今でもよく思われてなかったら、こんな好意的な噂にはならないでしょう？」
確かにその通りだ。
ロアルはケヴィンが思っていたより、頭の回転がいいらしい。

彼女が前回の菓子を食べていないかもしれないことはわかった。
それと同時に、生い立ちや置かれた立場も。
彼女とは数えるほどしか会っていない。だが、ロアルから聞く彼女の話は、ケヴィンが想像もしなかったものばかりだった。
彼女の立場が弱くて、八つ当たりされたり仕事を押しつけられたりしている？
ケヴィンが見ていた彼女からは、そうしたことは一切感じられなかった。明るくて能天気で、ケヴィンが心配するほどに無頓着で。
しかしそうした印象のすべてが、彼女の努力の成果だとしたら……？

それからケヴィンは、使用人たちの声を注意して聞くようになった。
ケヴィンの遠くで、あるいは近くでケヴィンに聞こえないようにとささやかれる会話から、さまざまな人間関係が感じ取れるようになる。役目だけではわからなかった使用人たちの上下関係や交友関係、誰が好かれていて誰が嫌われているかなど。

散策の折り、裏庭に回って使用人たちに見られないところから話を盗み聞いた。
「今日、やたらと洗濯物に破れがみつかることない？　あたし、裁縫嫌いなんだよね。あーめんどくさ！」
「あの子にやらせればいいよ。よろこんで引き受けるから」
「アネットって仕事を押しつけられても嬉しそうに引き受けるよね。押しつけられてるってわかってないんじゃない？」
明るい笑い声が響く。悪気の自覚がないからか、一層醜悪に聞こえる。
彼女たちは知らない。アネットが毎夜遅くまで繕い物をしていることを。そうして懸命に、自分の居場所を守っているということを。
どうして彼女が使用人全員に菓子を配るよう言ったのか、本当の理由がわかったような気がした。

男でも甘い物好きは多いものだ。
世間では男が菓子などを口にするのがはばかられる中、ここなら人目を気にせず食べられるということあって、クリフォード公爵邸に招かれるのを楽しみにしている近衛隊士も多い。
出した菓子を、彼らは遠慮なく平らげていく。帰る頃にはひとかけらも残らない。
取っておきたいなら今しかない。
彼らが一つの話題に盛り上がっている隙を見て、ケヴィンは持っていたハンカチにこっそり菓子を包もうとした。
それをシグルドに見られてしまう。
「何やってるんだ？」
ソファの背もたれのほうから手元をのぞきこまれて、ケヴィンはしくじったと思った。理由の説明をできるわけがないから、気付か

れないようにしたかったのに。
「ケヴィンは菓子がそんなに好きじゃないだろ？　誰にやるんだ？」
最近ヘリオットたち近衛仲間の口を真似て、シグルドの言葉遣いはあまりよろしくない。かといって彼らの前であまり丁寧な言葉を使うと嫌な顔をされたりからかわれたりするので、言葉遣いを正すようにとはなかなか言えない。
返答があると信じて疑わない目で見つめられ、どう答えたものかと迷っていると、ヘリオットがシグルドのうしろにやってきてシグルドの肩をぽんと叩いた。
「そーいうことを聞くのは野暮ってもんだよ、殿下」
ヘリオットが口にした下世話な言葉に、ケヴィンは口に何も入れていないのにむせ返りそうになった。
「“野暮”って何だ？」
無邪気に尋ねるシグルドに、ヘリオットはにこにこ笑いながら答える。
「聞いたりしないで、想像して楽しめってこと」
……野暮とは無粋。人の機微（きび）、特に男女間の情のやりとりにうといということだ。
ヘリオットの説明は正しくない。でも何故か、間違っているという気もしない。
訂正すべきと思いながらも、聞かれたくない話を抱える自分に話が向くのは困る。
ぐるぐると考えているうちに、シグルドとヘリオットの間で話が進んでいた。
「わからないことをどうやって想像するんだよ？　そんなことして楽しいのか？」
「楽しーよ、とぉっても。たとえば、こういうお菓子が好きなのはどんな人だと思う？」
「おまえらとか？」
「ははは っ確かに。そーじゃなくて、世間一般にお菓子が大好きだ

って言われてる人たちがいるだろ？」
「うーん……」
背もたれから離れ、シグルドは腕を組んで考え込み始める。
シグルドと接する女性と言えば世話係をはじめとする使用人ばかりなので、思い付かないのだろう。
ヘリオットも察したのか、すぐに答えを出した。
「女性や子どもがこーいうのを喜ぶんだよ。殿下は甘いものが大嫌いだから、例外だけどね」
「そういうものなのか？　……俺もちょっともらっていこうかな」
その言葉にぎょっとして、ケヴィンはソファから立ち上がった。
「殿下！　もしやどなたか親しい方がいらっしゃるのですか！？　どこのどなたなんです！？」
するとシグルドは、目元を赤らめてふいと視線をそらした。
「誰だっていいだろ？」
その反応に、ケヴィンは青ざめる。
シグルドがわざわざ菓子を持っていきたくなるような相手に、ケヴィンは心当たりがない。子ども――同世代以下の同性の友人相手に、このような表情はしないだろう。
それに何より、シグルドがケヴィンに隠し事をするなんて、今までになかったこと。
ケヴィンは思わず声を荒げていた。
「よくはありません！　殿下は我が家でお預かりさせていただいているとはいえ、れっきとした王家の血を引く王子であらせられます！　わたしは」
「おいおい、そんなとこまで口出すのかよ。いいじゃないか、誰と親しくしたって」
ヘリオットのあきれた声が、ケヴィンの言葉をさえぎる。
ケヴィンはヘリオットをにらみ付けた。
「いいわけがないだろう！　殿下がどのような相手と親しくなさっているか知っておかなければ、何かあったあとでは手遅れになる場

合だってあるのだぞ！？」

“そこまで”親しくしている相手を、ケヴィンが知らなかったことが大問題だ。シグルドは王城でたまに姿を消すが、その時に会っている相手に違いない。それ以外の行動は把握できているのだから。父は子どものすることだから問い質さないようにと言っていたが、特定の相手と親しくしているのを見過ごしていいとは思えない。

「そんなに過保護にしてどーすんの」

ヘリオットは小馬鹿にするように口の端を上げる。その態度にケヴィンは苛立った。

「過保護になどしていない！　わたしは交友関係にまで口を出すつもりはない！　ただ、把握しておきたいだけで」

「それが過保護だって言ってんの」

言い合いを始めたケヴィンとヘリオットに、他の近衛隊士たちは何事かと興味津々に集まってくる。

そしてケヴィンが過保護かどうかの議論が始まってしまい、シグルドの交友関係についての言及を忘れ、同時にケヴィンが答えられずにいた話もうやむやになった。

二章ー5

静寂に張り詰めた空気が、小さな物音に揺らされた。
小さなランプの暗い明かりを頼りに繕い物をしていたアネットは、顔を上げて廊下のほうから聞こえてくる足音に耳を澄ます。
コツン……　コツン……
こんな時間に、誰が……？
固い靴底が、板敷きの廊下を静かに踏んでいるようだ。その音は次第に近づいてくる。
アネットは体をこわばらせ、呼吸さえも小さくした。
こんな真夜中にこっそり邸内をうろつくなんて、よからぬ用事だと思っておいたほうがいい。
木箱の上に繕っていた上着を置き、そっと立ち上がって、音を立てないように洗濯室に続く扉に近付いた。扉に耳を当てるようにして集中する。

足音はどこへ向かっているのか。
邸の裏側にあたる洗濯室周辺の並びには、調理室や貯蔵室など、いろんな用途の部屋が並んでいる。
考えられるのは食べ物やお酒をくすねにきたということだけど、それぞれがしまわれている貯蔵庫には、頑丈な錠前がかけられていて鍵は男使用人長のビィチャムさんが厳重に管理している。

他に何があるだろうかと考えているうちに、足音が変わった。
カツン
先程より硬質な音が、少し大きく響く。
アネットはぎくっと体を震わせた。
木の廊下ではなく、石のように固いものに足を降ろした音。それが隣の、洗濯室から聞こえた。

洗濯室の床は石が敷き詰められているから、歩くとそんな音がする。
けど、何で洗濯室に入って来るの？
疑問を想い浮かべているうちに足音はどんどん近付いてくる。
まさかだけど、目的はあたし……？
そう気付いたとたん、血の気が引いた。
とっさにドアノブに視線を降ろす。ドアノブには木の棒が括りつけてあって、今は鍵代わりに戸枠のほうへと渡してある。
でもこんなの子どもだましだ。何度か強く引っ張られているうちに壊れてしまうだろう。
こんな真夜中に来るなんて、それこそよからぬことに違いない。アネットをいじめにきたか、それとも――。
逃げなきゃ。
この部屋には、さいわいもう一つ出口がある。
逃げようとしていると気付かれると、急いで追ってくるかもしれない。
そうっと扉から離れ、音を立てないようにゆっくり歩く。

その足が三歩目を降ろさないうちに、扉がノックされた。
どきっとして、片足で立っていた体が倒れそうになる。前のめりになりながらも荷物に手をかけ、かろうじて転ぶのだけは回避する。
と、扉の外から声がした。
「わたしだ。……寝ているのか？」
その声に、アネットはほっとする。

というか、脱力した。
あたしに警戒しろとか言っておきながら自分は何やってんのよ、このお坊ちゃんは。
今まで邸の中にいてもわざわざ外を回って来ていたから、全然思いもつかなかった。

不自然な体勢から体を起こして、アネットは扉の前に戻った。
鍵代わりの棒を外して、洗濯室のほうへと開く扉をそっと押す。
一歩引いて扉が開く場所を作ったのは、ランプを片手に持つケヴィンだった。
「ちょっと、いいだろうか……？」
遠慮がちに言う。アネットは小さくため息をついた。
「誰にも見られませんでした？」
「ああ」
「ここだと何なので、中に入ってください」
扉から手を離し、荷物が半分以上占めていて細い通路のようになっている部屋の奥に向かう。
ケヴィンは少しためらったようだけど、何も言わずに入ってきて扉を閉めた。
「どうぞ」
ベンチを指差し、アネットはさっさと丸椅子に座る。
「今夜はどうしたんですか？」
ケヴィンはベンチに座っても、返事をしようとしなかった。切り出すのをためらうように、伏し目がちに視線をさまよわせる。
アネットは小さく肩をすくめ、繕い物の続きを始めた。
「……それは全部、繕い物か？」
ケヴィンが向けた視線の先に、アネットも繕い物を続けながらちらり目を向けた。
そこには雑に畳まれた服やシーツが積まれている。量は、アネットの胴体と同じくらいの高さだろうか。
「そうです。ご主人様方には一度破れた物はお出ししませんけど、繕って使える物は使用人に下げ渡されるんです」
ベッドシーツも衣服も全部。だからアネットの服は最初からつぎはぎだらけだった。
それをケヴィン様が“ぼろぼろ”とか思うから、めんどくさい話になったのよね……。

二カ月ほど前のことを思い出して、思わず小さな笑いがこぼれそうになる。
「一晩でこんなに縫うのか？」
繕い物の山に目を向けたままつぶやくように言うケヴィンに、アネットはおどけて答えた。
「さすがに無理ですよ。適当なところで切り上げますって」
今日はいつもより多い。急ぎのものは今縫っている上着で終わりだから、あとは好きなところで切り上げられる。

話はそこで途切れた。
一体何をしに来たんだろう……。
ケヴィンがこういう雑談をするためだけに来たとは思えない。
別にいてくれてもかまわないけど、こうも話が続かないと何だか居心地悪いなぁ……。
アネットは縫い針を進めながら、話題を探して考え込む。
そうした頃になって、ケヴィンはおもむろに口を開いた。
「君には、両親がいないそうだな」
何でそのことを？
アネットは驚いてとっさにケヴィンを見た。
「ロアルから聞いた」
「ロアル君から？」
何を？　とは聞けなかった。ケヴィンがロアルから何を聞いたのか知らないけど、話の流れから何となくわかって。
知られたくなかったな……。
何が変わったわけでもないのに、これまで身近に感じていたケヴィンが遠ざかったような気分になった。
そう。何も変わっていない。最初からケヴィンは貴族で邸の主人の息子で、アネットは邸の下働き。もともと立場に距離がある。本当なら、言葉を交わすことも会うことも許されないほどに。
沈みそうになる気持ちを浮上させようと、アネットはわざと明る

く言った。
「そーなんですよ。両親がいないっていうより、捨てられてたって言うか。らっきーだったんですよね。捨てられてたのがこのお邸の前で、拾ってくれたのが公爵様で、ちょうどオルタンヌさんがお子さんを亡くされたところで、あたしのこと実の娘のように育ててくれたし、こうして働かせてもらえてるし」
「ここを部屋にしているのは――」
「それはまあ、屋根裏に部屋がなかったってだけのことです。他の人は一つの部屋に六人だったり、三階の上にある屋根裏部屋まで毎日上がっていかなきゃならないですけど、あたしは一人部屋で仕事場の隣に部屋もらえて大助かりです」
大部屋で一緒に寝起きしてたらどんな意地悪をされてたかわからないから、これもらっきーだったと思う。
そのことだけは内緒にして、にこっと笑いかける。木箱の上に置いたランプに手を伸ばしながら、納得しかねた様子のケヴィンに言った。
「ケヴィン様が持ってきたランプがあるから、こっちは消してもいいですか？」
「あ、ああ……」
「節約するよう言われてるんですよー。ケヴィン様のランプのほうが明るいし、二重にありがたいです。屋根裏部屋にいたらこんな風にケヴィン様が訪ねて来てくれるはずなかったですから、あたしってつくづく運がいいと思うんです」
公爵様に拾われ、使用人の中でも地位のある人に育てられ大した苦労もなく成長でき、待遇のいいお邸で働かせてもらっている。多少いじめられはしたけれど、少しずつ認められて嫌がらせも少なくなった。
他のお邸ではきっとこうはいかなかっただろう。だからこのお邸の前に捨てられて、拾ってもらえたことは、アネットにとって人生最大のらっきーだったと思うのだ。

「……それに捨てられたからって、実の親に愛情がなかったわけじゃないんですよ」
つまみを絞ってランプを消してから、アネットは椅子に座りなおして胸元に手を当てた。
その服の下には、ケヴィンがくれた小袋が下がっている。
この小袋のおかげで、アネットはあれ以来大事なものをなくすことなく、なくす心配がほとんどなくなって安心した日々を送っている。
「ケヴィン様に拾っていただいた守り袋は、あたしがこのお邸の前に捨てられていた時、手首にひっかけてあったんだそうです。中に銅貨が一枚入ってました」
庶民の風習だ。子どもの安全と健康を願って、小さな袋の中にお金を入れて持たせる。
「暮らしに困って捨てたんなら、きっと銅貨一枚だって惜しかったはずです。それを手放す子どもに持たせたってことは、それだけ親に愛されてたってことだと思うんですよ。――中に入ってた銅貨は、とっくに使っちゃったんですけどね」
ペロッと舌を出してみれば、ケヴィンはあきらめたように目を伏せた。それからふと思い出したかのように上着のポケットをさぐると、中から真っ白いハンカチを取り出す。
それを持った手を伸ばしてくるのでアネットが手のひらを差し出すと、ケヴィンはその上にハンカチを置いた。
ハンカチに、何かが包まれている。
折りたたむように包まれているのをゆっくりと広げていくと、中から手のひらより少し小さいくらいのクッキーが出てきた。
今日も食べそこなってしまったものだ。
「使用人全員が食べたはずのものだ。こうして持ってきても不公平にはならないだろう」
食べてないこともバレちゃってるんだ……。
何故食べなかったのか、ケヴィンは知りたいと思っているだろう。

食べられなかった状況を何とかしたいと考えているかもしれない。
その必要はないのだと言い訳しなきゃと思ったけれど、アネットが口を開く前にケヴィンは言う。
「このような形でも、受け取るのは嫌か？」
ケヴィンのこの言葉に、アネットはほっとした。
言い訳は必要ないのだと感じて。
「……いいえ。ありがとうございます」
クッキーのはしっこをかじってみると、さくさくした触感と甘くて香ばしい味が口の中に広がった。
ケヴィンは立ち上がり、自分の脇に置いていたランプと、木箱の上の、明かりを消した小さなランプとを交換する。そうしてからまた、ベンチに腰をおろした。

無言のまま、じっと見つめてくる。
その沈黙は、居心地の悪いものではなかった。
「おいしいです。さくさくしてて、甘くて、香ばしい……」
感想を口にしたら、涙が込み上げてきた。
全身に満ちてくる想いに押し上げられるように。

でも、その想いは口にしてはならない。
そう思うとよけいに目がうるんできて、食べながらそれを隠すのにアネットは懸命になった。

二章ー6（前書き）

シグルドは十三歳になり、初めての性体験をいたします。相手はもちろんシュエラじゃありません。その場の描写はありませんが、そのことについての言及が入ります。それらに嫌悪を覚えられる方はこの回は読まれないことをおすすめします。また、シグルドの初恋に関する話（これも相手はシュエラじゃない）や色事の駆け引きのようなシーンが入ります。苦手な方はご注意ください。今後こういった注意書きはなくしていこうと思いますが（毎回入れるべきかとか書き方に悩むので……）、必要だと感じる描写が出てまいりましたらご一報いただけると助かります。

二章ー6

ケヴィンが見ていた彼女は、本当の彼女ではなかったのかもしれない。
そう思った時、落胆した。
親しげにしているようで、実はまったく心を開いてくれていなかったのかと。

だが、自分の生い立ちを何でもないことのように話す彼女を見ていて、そうではないのだと理解した。
彼女は、彼女だ。
明るくて能天気で、警戒心が足らなくてケヴィンをやきもきさせる。
たとえそれが、生い立ちや置かれた立場を隠すための仮面だったとしても、それも含めて彼女なのだ。
そんな当たり前のことに気付いただけなのに、焦燥にも似た、知りたいと思う欲求は静まった。

彼女が隠そうとした理由は、今でもわからない。
だが明らかにしたいとは、ケヴィンはもう思わなかった。

菓子を食べながらアネットが涙ぐむのを、ケヴィンは見て見ぬふりをした。
気付いてほしくなさそうだったから。
手を伸ばしてなぐさめたい思いに耐え、ただじっと彼女を見つめていた。

それ以来、たまに彼女の部屋を訪れるようになった。

もちろん深夜。ランプと差し入れの菓子、それに書物を持って。
ケヴィンが持っていたランプの明かりの下、彼女は菓子を口にしつつ繕い物をし、ケヴィンは書物を読んだ。
ほとんど言葉は交わさない。だが、それは心地のいいひとときだった。

――・――・――

月日はまたたく間に過ぎ、シグルドとともにケヴィンが近衛隊士見習いとなって早三年。
シグルドは成長と共にますます剣の腕を上げ、実力者ばかりの下級貴族出身の近衛隊士の中でも抜きんでた才能をあらわすようになった。上級貴族出身の隊士たちはもはやシグルドに手を出すことはできず、上級貴族出身の隊士でも下級貴族の隊士たちを虐げるありように疑問を持っていた者たちは下級貴族と行動を共にするようになり、隊内の派閥の均衡は完全に下級騎士に傾いた。そのため上級貴族の一派は、隊内で肩身の狭い思いをすることとなる。
シグルドを貶めるためにラダム公爵が弄した策は、こうして失敗に終わったのだった。

もうすぐ十四歳になるシグルドが、ある日を境に急に荒れだした。
何かにつけて反抗的になり、近衛隊の訓練にも勉学にも身が入らず、ケヴィンの制止を聞かないで近衛仲間と下街の酒場へ繰り出す。
理由を尋ねても答えない。父公爵も十三という年齢ならよくあることと、何もしようとはしない。
ケヴィンははらはらしながら、シグルドを見守るしかなかった。

そんな日が続いたある日、どうしても外せない用事があって、ケヴィン一人遅れて酒場に着いた。
下街を歩くのにケヴィンの普段着は目立ちすぎるということで、近衛仲間から借り受けた質素な上着をまとっている。それでも目立ってしまうのは、下街の住人らしくない姿勢や歩き方のせいなのか、それとも下街で目立つヘリオットの知り合いだと知られてしまっているからか。
道行く女にからかいの言葉をかけられながら、細い路地に面した酒場の入り口の木戸を押し開ける。
日が暮れても明かりがそこかしこを照らす路地と比べ、店内は多少うす暗く感じた。酒を飲みつまみを食い、大声で談笑する男たちの熱気に、一瞬だけだが息がつまる。
「お、来たな！」
近寄ってきたヘリオットを無視して、ケヴィンは目をこらして店内を見回した。
シグルドの姿が見えない。
店内は奥に向かって細長く、右半分に四つの丸テーブルが一列に並び、その周囲を所狭しと椅子と人とがひしめきあう。左半分は通路とカウンターになっていて、右にも左にもシグルドの姿は見当たらなかった。
「殿――シグルドは？」
身分を伏せるため呼びなれない名前を口にすると、隣にまで来たヘリオットがにやり笑って人差し指で上を指した。
「上でお楽しみ」
その言葉に、ケヴィンは蒼白になる。
この酒場には二階があって、さまざまな用途に貸し出されている。仲間内だけで飲みたい時や、ここより更に下街に行くために粗末な衣服に着替えたりする。

ベッドもあるので仮眠もとれるが、“お楽しみ”といえば女を呼び出して――。
一度は血の気の引いた頭が、次の瞬間一気に逆流する。
ケヴィンは怒りに任せ、こぶしを振り上げた。
しかし振り下ろしたそれは、ヘリオットに簡単に避けられてしまう。
「ちょっとは落ちつけよ」
「落ち付いていられるか！　おまえか！？　そそのかしたのは！」
今ならまだ間に合うかもしれない。止めに行かなければ。
ケヴィンはヘリオットを怒るのを後回しにして、店の奥にある階段に向かおうとした。それをヘリオットが二の腕をつかんで止める。
「待てよ。大丈夫だって」
「何を根拠に大丈夫などと！」
振り払おうとするが、ヘリオットは肩にも腕を回してケヴィンを押さえ、強引に引っ張っていく。椅子のないカウンターの端に場所を取り、回した腕で顔を引き寄せて声をひそめた。
「相手は俺のなじみの女。明朗会計を身上としてる奴だから、あとで面倒が起こることもねーよ」
それも心配していたことだが、しかし。
なおも手を振り払おうとするケヴィンに、ヘリオットはささやく。
「行ってからずいぶん経つから、もう遅いと思うよ？」
それを聞いて、ケヴィンはカウンターに肘をついて頭を抱えた。
「まだ１３歳の子どもなんだぞ……」
女を知るには早すぎる。
ケヴィンから腕を離したヘリオットがぼそっとつぶやいた。
「その“１３歳の子ども”が、自分から言い出したんだけどね」
「！！！」
衝撃に言葉が出せず、顔を上げ間近のヘリオットを凝視して口をぱくぱくさせる。
てっきり誰かにそそのかされたのだとばかり思っていた。

話が途切れたところを見計らって近寄ってきた店主に、ヘリオットは安い酒を二杯注文する。店主はすぐに酒を注いできて、二人の前に並べた。ヘリオットが銅貨を数枚、カウンターの上に滑らすと、それを受け取って店主は離れていく。

ヘリオットは店主が他の客の相手を始めたのを見計らって、ケヴィンに言った。

「女を抱くことでしか晴らせないうさってのもあるのさ」

「……彼にどういううさがあるのだと言いたい？」

すごみをかけて問いかけても、ヘリオットは頓着せず答える。

「たとえば失恋したとか」

ケヴィンは息を飲んだ。

「それくらいしか思いつかないんだよね。ああいう唐突な荒れ方をするってのはさ」

ケヴィンは気をもんでいたというのに、ヘリオットは察していて黙っていたというのか。

いや、それよりも。

「だから言ったんだ……交友関係を把握しておかないと、あとで取り返しのつかないことになると」

ケヴィンもうすうす気づいていた。

シグルドが誰かに恋をしていると。

――誰だっていいだろ？

二年前、菓子を欲しがるシグルドに不審を覚え問いかけた際、シグルドは返事をはぐらかし目元をわずかに赤らめた。

その時はヘリオットたちに邪魔をされて、聞き出すことができなかった。

日を改めて何度か問い質そうとしたが、そのたびに上手いぐあいに逃げられて。

ケヴィンにも軽く考える気持ちがあったのだと思う。恋をしているといってもしょせんは子ども、単なるあこがれにすぎないのだと。

だが、ここ数日の荒れようが失恋のせいなら、それほどまでに真剣だったということになる。

事前に知っていれば、殿下をああまで苦しめずに済んだかもしれないものを……。

うなだれるケヴィンの肩に、ヘリオットは手を置いた。

「経験を積み重ねていかなきゃおとなになれないんだからさ。そんなに気にすることないって。アイツと同年の近衛連中も経験してる奴はしてるんだから、別に目くじら立てる必要ないんじゃねーの？

ヤバい女には近付かないように、一応目ぇ光らせてるしさ」

……そうなのかもしれないが、だが、しかし。

眉間にしわを寄せて悩んでいると、ヘリオットが前屈みになって顔をのぞきこんできた。

「おまえもやっとく？」

「何をだ？」

ケヴィンはうろんな目を向ける。するとヘリオットは上を指差した。

「お楽しみ」

目を吊り上げてにらむと、ヘリオットはかわすように体を退いてへらっと笑った。

「あ、おまえにはいらんか。何たってアネットちゃんがいるもんね」

――全身が、沸騰するかと思った。

ヘリオットの胸倉をつかんで引き上げる。

「彼女はそういう女じゃない！　おまえも手を出してみろ！　ただじゃすまさん」

ケヴィンの激昂ぶりに一瞬目をみはったヘリオットは、すぐに何

かをたくらむようないやらしい笑みを浮かべる。
「そういう女って何？　友人の女に手を出すほど飢えちゃいないよ」
頭に血の上ったケヴィンは、ヘリオットのたくらみに気付かない。胸倉をつかんだ手でヘリオットをゆさぶる。
「友人！？　誰だ、それは！」
ヘリオットは笑いをこらえながら答えた。
「おまえのことだろ」
「――何？」
意外なことを言われ、ケヴィンの手は止まる。ヘリオットはくつくつ笑いながら、ケヴィンの手を外した。
「だから、その友人ってのはおまえのこと。アネットちゃんはおまえの女なんだろ？」
「違う！　彼女はそんなことをする女じゃない！」
「だからさぁ、そんなことって、どういうことだと思ってんの？」
「……」
答えられるわけがない。否定の言葉であっても、彼女を汚してしまうような気がして。
ヘリオットは肩をすくめながら、小さくため息をついた。
「あのね、アネットちゃんが金とか物とかになびかない女だってのはわかってるよ。あの子は好きな男以外には自分を許さない女だ。俺なんてちょっと誘いをかけただけでぴしゃーっと閉め出されちゃってたんだけど、気付かなかった？」
「何の話だ？」
「ほら、おまえを邸に送り届ける時、俺いっつも誘ってただろ？でも彼女は、一度だって誘いをかけられそうな隙を見せなかった」
「え――？」
ぼうぜんとするケヴィンを見て、ヘリオットは面白そうに眉を上げる。
「おまえ、気付いてなかった？　“仕事忙しくってごめんなさーい”なんて言われたらとりつくしまもねーよ。どーせ“男と気軽に言

葉を交わして、警戒心ってものがないのか”とか思ってたんだろ」
その通りだ。だが――。
一度にいろんなことを言われて、思考が追い付かない。

その時、階上から少々派手めな衣服を着た女が降りてきた。
気付いて振り向いたヘリオットに、女は不機嫌そうに口をとがらせながら後ろ頭をかく。
「もう！　子どものお守なんて勘弁してよね」
ヘリオットは近付いてきた女を、両腕を広げて迎えた。
「悪かったよ。助かった。おまえくらいいい女じゃないと任せられなかったんだ。足りなかったんならサービスしよっか？」
「あはは。客がサービスしてどうすんの？」
しなだれかかる女を、ヘリオットは腕の中に囲って支える。
この女が、さっきまで……。
見てられなくなって、ケヴィンはそっぽを向いた。
女はケヴィンに目を止め、ヘリオットの片腕にしがみつくようにしながらケヴィンの前に来る。
「あら、いー男。誰？」
「あのお子様の兄貴。過保護なんだ」
女は物珍しそうに、ケヴィンの頭からつま先までをじろじろ見た。
「へー……サービスするから試してみない？」
女がヘリオットからケヴィンに移ってこようとする。
醜悪だ。安っぽい香水のにおいに息がつまる。
迫ってくる女からできるだけ離れようとカウンターの縁に張りついていると、ヘリオットがまだつかまれている腕で女を止めた。
「やめといてやってくれよ。そいつ純情なんだ。今青春まっさかり」
「あら、まあ」
女は目を丸くして、先程よりも遠慮のない視線でケヴィンを眺めまわす。何を思ったのか含み笑いをもらすと、ヘリオットの手をするりと離す。

「まだ夜も早いから、他のところで仕事してくるわ」
「そっか。またな」
「またよろしくね、ヘリオット」
出口に向かいながら、女はケヴィンに向かって小さく手を振った。
「フラれたら声かけてね。なぐさめてあげる」
女は木戸を開けて酒場から出ていった。
見送っていたヘリオットは、戸が閉まるとケヴィンのほうを向いて、さっきの女と同じような笑い方をした。ケヴィンがむっとすると、肩をすくめる。
「ひどい顔色してるぜ。今日のところは帰ったら？　――シグルドのことは面倒みとくからさ」
この男にはいつも見透かされているような気がする。
今はシグルドと顔を合わせたくなかった。どんなふうに接すればいいかわからなくて。
だが、シグルドの従者ともいえる立場にあるケヴィンが帰るというのは……。
頼みにしたいロアルは近衛仲間たちの間で、酔いつぶれて机に突っ伏している。
迷っていると、ヘリオットは小さく笑いをこぼし、ケヴィンの耳元に小さく言った。
「アネットちゃんを“そういう女”にするかどうかは、おまえの心がけ次第だ。大事にしてやんなよ。あ、これあげる」
差し出された小さな紙包みを、ケヴィンは胡散臭げに眺める。
「何だ？　これは」
「避妊薬」
「いらん！」
大事にしろと言ったすぐそばから、こんなものを出してくるのか。大事にするのなら、このようなものを必要としないようにすることが第一だというのに。
ヘリオットはケヴィンの返答を予想していたのか、あっさりと紙

包みを懐にしまった。
「もしもの時のために持っておくのが、男のたしなみだと思うんだけどね。まあいいや。欲しくなったらいつでも言ってね。そんじゃ様子見に行ってくるわ」
ヘリオット“ははは”と明るい笑い声を立てて階段を上がっていった。

二章―7

ケヴィンは家々の戸口にかけられた明かりをたよりに、夜道を急いだ。

ヘリオットの思い通りになるのはしゃくにさわるが、今すぐ彼女に会って確かめたくて。

――あの子は好きな男以外には自分を許さない女だ。

そうなのか？　本当にそうなのか？

なら、彼女が言った言葉の意味は――。

気が逸(はや)って、半ば走るように邸に戻ったはいいが、そこでケヴィンは途方に暮れた。

どのように尋ねたらいい？

“ヘリオットがこのようなことを言っていたが、君に心当たりはあるか？”とでも聞くのか？

何から何までヘリオットのおぜん立てに乗って、恥ずかしくないのか？

そもそも知ってどうする？　彼女が自分を好きだとしても、何がどうなるわけでもない。

ケヴィンには役目がある。然るべき家から妻を迎え、跡継ぎをもうけて、国のために働く。

彼女は次期公爵の妻にふさわしいとはとても言えない。かといって彼女を愛人の立場に置くつもりは毛頭ない。愛人を持つのは妻に対して不誠実だし、彼女を日陰の身に置いて不幸になどしたくない。

彼女の気持ちを知ろうが知るまいが、結局は何も変わらないのだ。

なのに知りたいという思いが止まらない。

迷い悩んでいるうちに、ケヴィンは知らず裏庭の井戸の側まで来

ていた。
彼女の部屋の前に立つこともできず、ただただじっと真っ暗な井戸の穴を見つめ続ける。
どのくらいそのようにしていたのか。
そんなに経っていなかったようにも思う。
静けさの中にかたんという音が聞こえた。
はっとして音がしたほうを見れば、扉がそっと開かれるところだった。
「ケヴィン様？」
かすかだけれど、はっきりとケヴィンの耳に届く声。
小さな、手元しか照らさないほど小さなランプを持って、彼女が暗がりの中に出てくる。
本当に警戒心のない。ここにいるのが、ケヴィンではなく危険人物だったとしたらどうするつもりなのか。
しかし彼女は、迷うことのない足取りで、ケヴィンの側までやってきた。
「どうしたんです？　声かけてくださいって言ったじゃないですか」
屈託なく話しかけてくる。
今ここで、ケヴィンの抱えている葛藤を打ち明けたら、彼女はどんな反応をするだろうか。
「今日は酔ってないみたいですね」
ケヴィンがそんなことを考えているとも知らず、アネットはいつものようにできるだけ音を立てないように井戸から水を汲んだ。持ってきていたコップで汲んだばかりの水をすくい、ケヴィンに差し出す。
「早く中に入ってくださいよ」
他の者に見られたくないと常々言っているのは覚えている。だが簡単に男を部屋に誘う彼女に心配は尽きない。
――誘うのはケヴィンだからか？

部屋に戻りかけたアネットは、数歩行ったところでケヴィンがついてこないことに気付いて戻ってきた。
手元のランプに、彼女の顔が浮かび上がる。困ったようなあきれたような顔をしているが、そこに警戒の表情は一切ない。
たったそれだけのことに胸が震え、引き寄せられるようにケヴィンの体は前に傾(かし)いだ。
「え？　ケヴィン様？」
彼女は肩と空いている方の腕を使って、慌ててケヴィンを支える。
ケヴィンが受け取ったコップの中身が跳ねて、ぱたぱたと地面に散った。
「あれ？　やっぱり酔ってるんですか？」
ケヴィンは彼女の肩に顔をうずめるようにしながら思った。
酔っている……。そうかもしれない。
頭がくらくらして思考が定まらない。たがの外れかけた心に、不埒な思いがよぎる。
このまま酔った振りをして、彼女を抱きしめてしまえたら――。
背中に手を回したくなる衝動に耐えて動けずにいると、彼女のランプを持つのとは逆の腕がそっとケヴィンの背中に回される。
自分でも滑稽だと思えるくらいに、背中が大きく揺れた。
それに気付かなかったわけがないだろうに。
彼女はまるで気にした様子なく、そばにあるケヴィンの耳元にささやいた。
「気分が悪いんですか？　あたしの部屋で休んでいきますか？」
ケヴィンはかっと火照り、全身を硬直させる。
どのようなつもりで、そんなことを言うのか。

――だったらお相手しますよ？
二年ほど前に彼女が口にした言葉が、脳裏に巡る。
あのときは冗談だと思った。小うるさいケヴィンを黙らせようとして、思ってもないことを口にしただけだと。
だが、違うのか？
先程のヘリオットの言葉が、アネットの言葉に混じって渦を巻く。
――あの子は好きな男以外には自分を許さない女だ。
酒場を出る前から繰り返される自問が、再びわき上がってくる。
そうなのか？　本当にそうなのか？
だから彼女は、こんなにも無防備にわたしを受け入れるのか？

渇望する。
知りたいと。
知ったところでどうにもならないとわかっていながら、どうしようもないくらいに身の内が騒ぐ。
乾いた喉が水を欲するように。
肺が空気なしではいられないように。

何故これほどまでに望むのか、理由を考えられないほどに切羽詰まりながら、かろうじてたった一言紡ぎ出す。
「君は、わたしが好きなのか……？」
どのように尋ねたらいいのかとさんざん悩んだ甲斐のない、唐突で単純極まりない言葉だった。

肩口でケヴィンの頭を支える彼女が、ほんのわずか息を飲んだような気がした。
「……好き、ですよ？」
少しの間を置いて返ってきた答えに、ケヴィンは片手にコップを

持っていたことを忘れ、彼女の両肩をつかんで自分から引き離した。
木のコップが地面に落ち、コップを満たしていた水が足元にぶちまけられる。
互いに、そのことに気をとられることはなかった。
ランプのかすかな光を頼りに、二人の視線がからみあう。
驚きに目を見開くケヴィンに対して、アネットの無表情にも近い顔からは感情の色がうかがえなかった。

何を思ってそのように言うのか。
その言葉は本当なのか、嘘なのか。

言葉の意味とちぐはぐな反応にケヴィンが戸惑っていると、アネットはもう一度口を開く。
「好きにならないわけがないです」
そう言って、彼女はにっこりと笑う。
「小汚い落し物を拾ってくれるし、お菓子は食べさせてくれるし、これで好きにならないわけがないです」

ケヴィンは少なからぬ落胆と、猛烈な自嘲を覚えた。
自分一人動揺している。他人の言葉に惑わされて、気分を高揚させ落とされる。何とも滑稽ではないか。

冷静になって考えれば、わかりきっていたことだ。
このような返事しか返って来ないと。
彼女はなれなれしいようでいて、実のところケヴィンには一定の距離を置いている。ケヴィンは貴族で、アネットは平民で使用人。そのことを彼女は自覚しすぎている。
だからもし彼女がケヴィンに想いを寄せていたとしても、それを口にすることはない。
――ですから、夜のお供にあたしをご所望でしたら、お相手しま

すって。
二年前、何を思ってこのように言ったのか、ケヴィンにはわからない。
だが、問い質したところで彼女が心の内を語ることは決してないのだろうということだけは察せられた。
そして、彼女が胸におさめた想いを、ケヴィンに問い質す資格はないのだ。

腕を伸ばしてさらに彼女を引き離し、ケヴィンは顔をそむけた。
「――そうか」
彼女を抱きしめたい衝動はいつの間にか消え失せ、ケヴィンはのろのろと歩き出す。
アネットの部屋から離れていくケヴィンに、彼女は小さく声をかけた。
「どちらに行かれるんですか？」
「……殿下を、酒場に置いてきてしまっているんだ」
顔を合わせづらいからといって、仕えるべき方を置いてきていい理由にはならない。
いや、それを言い訳にしていたのだ。彼女に早く確かめたくて、――会いたくて仕方なくて。
「今夜はこちらからは戻らない。早く休むといい」
「そうですか。――おやすみなさい」
背を向け顔を見ないまま言えば、さびしげな彼女の返事に呼びとめられたような気さえする。
――呼びとめられてなんかいない。そう思いたいだけだ。
「……おやすみ」
振り切るように一言言うと、ケヴィンは大股に歩き出した。

邸の表に回り、通用門をくぐって通りに出る。

ふと、空を見上げた。
空いっぱいにちりばめられた星と、ぼんやりと浮かぶ欠けた月。
見つめればそれなりにまぶしいのに、降ってくる光は地上をほとんど照らさない。
届きそうで、届かない。
彼女の心と同じように。
どんなに望んだところで、手に入れることはできない。
――……ああ、そうか。
ケヴィンは見上げた目を手のひらで覆った。
欲しいんだ、彼女の心が。つまりは、わたしは彼女を――。
芽生えたばかりの想いを、ケヴィンはうつむき、頭を振って打ち消そうとする。

望んではならない。
想いが結ばれたとしても、幸せな未来はないのだから。
不幸になるのは自分じゃない。彼女だ。
だから。
彼女が大事なら、これ以上踏み込んではいけない。

彼女が作ったこの距離を自分も守ろうと言い聞かせ、ケヴィンは下を向いた顔から手のひらを外した。
守り通せないのなら、二度と彼女に近付いてはならない。

街路を照らす家々の明かりが乏しくなりつつある夜道を、決心を胸に刻みつけるかのように踏みしめながら、ケヴィンは下街の酒場へと急いだ。

シグルドはその夜を境に、次第に落ち着いていった。何かをふっ切ったように以前の快活で人を惹き付けずにはいられない明るさを

取り戻していく。
しかし、すべてが元通りというわけではなかった。
シグルドの面差はどことなく大人び、子どもらしい無邪気さが消えた。

時が否応なく流れていくのと同じで、人も立ち止ってはいられないのだと思う。
子どもは大人にならなくてはならず、人は常に未来を選び取って先に進まなくてはならない。
彼女との未来が選べないのなら、そろそろ潮時なのかもしれない。
彼女と偶然交わった道を元通りに分かつ。
そうすべき時が近付いている。

シグルドの酒場通いは落ち着いてからも続き、お目付役であるケヴィンは酒を控えるようになって、わざわざ裏庭に回って邸に入ることはしなくなった。
その頃より、今までなかなか仕事を回されなかった下級貴族出身の近衛隊士たちにも、王家の人々や彼らの住まう王城内の館の警護を任されるようになる。見習い身分であるケヴィンたちも忙しくなり、全員が一度に余暇を取れなくなっていった。
そのため仲間たちをクリフォード邸に招く機会も減っていき、同時に菓子を使用人に配る習慣も、深夜彼女に菓子を持っていくこともなくなった。

今は胸に痛みを抱えていても、会わずにいればやがて彼女とのことを過去の出来事にできるだろう。
そう思っていた。

――・――・――

それから二年が過ぎ、シグルドがもうすぐ１５歳になるという頃。
隣国の内乱は、さまざまな思惑を持って介入する他国によって、戦況が激化していく一方だった。
参戦するラウシュリッツ王国軍は、思うような戦果を上げられず、敗退に次ぐ敗退を余儀なくされていた。
このまま行けば何の利も得られないまま隣国から軍を引き揚げなくてはならない。
そこでラダム公爵は、戦況の打開策としてシグルドを国軍総指揮官にすることを提案した。戦場に王族が赴けば士気が上がる。その役目は武術に秀でたシグルドこそが適任であろうと。
これにはクリフォード公爵も反対したが、状況的にそれが妥当であったために議会の承認を受けて国王が決定を下してしまった。

そこにもう一つの問題が持ち上がる。

「おまえは駄目だ」
「何故です！？　わたしの武術の腕が劣るからですか！？」
クリフォード邸、公爵の執務室で、ケヴィンは必死に食い下がる。
執務机に腰を落ちつけた父トマスは、手元の書簡を脇によけて机の上で両手を組んだ。
「それだけではない。もし殿下と共におまえにもしものことがあったら、貴族の均衡の崩れを抑えられない」
もしもの時――それは戦死するということだ。戦況から見てその危険性が高いからこそ、なおさら共に在って守りたいと思うのに。

シグルドの出征が決まる直前、クリフォード公爵トマスは息子の意思確認もせずに、ケヴィンの近衛隊除隊届けを出してしまっていた。

近衛隊の中でも下級貴族の一派は、シグルドの護衛として戦地に赴くことになった。その中にケヴィンが含まれるのを回避する狙いがあったのだろう。

常日頃はおだやかな笑みを浮かべているトマスが、今は表情を引き締め厳しい視線で目の前に立つケヴィンを見上げる。

「国王陛下と王妃陛下、王太子殿下とその婚約者までもがラダム公爵とつながりが深い。その上王位継承権第二位のシグルド殿下と第三位のおまえまでが失われれば、ラダム公爵の孫の継承権が繰り上がり、もはや誰もラダム公爵の思惑を止めることはできない。……わたしがふがいないばかりに、殿下をみすみす危険にさらすことになってしまった。だが、だからこそ、おまえは守り通さなくてはならないのだ。おまえならば近衛隊を除隊してわたしの後継になるための勉強に専念するということにすれば出征を免れる。これ以上ラダム公爵の暴走を許すわけにはいかん」

そのことは理解している。だが、納得できるものではない。それでケヴィンは父を追って邸に戻り、執務室にまで乗り込んで抗議しているのに。

「トマスの言う通りだ」

ケヴィンについてきていたシグルドが、背後から声をかけてきた。

振り向けば、ここ数年でずいぶんと背が伸び男らしい顔つきになってきたシグルドが、真剣なまなざしでシグルドを見据えている。

「おまえまで戦場に赴けば、ますますラダム公爵の思うつぼだ。それは絶対に阻止したい。俺からも頼む。ここに残ってくれ」

二人の言っていることはわかる。本来ならそうすべきだ。

ラウシュリッツ王国を建国当初から支えてきた三公爵は、最年長

であるラダム公爵の策略によってその均衡を崩しつつあった。ペレス公爵の血縁には現時点で王位継承権を持つ者が一人もおらず、現国王に血縁のある他国の王女を嫁がせ自身の姪を王太子妃候補に推したラダム公爵が、議会、ひいては国王自身にも大きな発言力を持ち、国を私物化せんとしている。

それを阻止する側に回っているのが、クリフォード公爵の後見を持ったシグルドと、公爵の跡取りであり王位継承権を持つケヴィンの存在なのだ。

二人がいるから、クリフォード公爵は多少の発言力を保つことができ、ラダム公爵の専横抑止のために動くことができる。

今の状況でも国はほとんどラダム公爵の言いなりに動いているのに、その上シグルドと、ケヴィンまでもが失われたら、誰もラダム公爵を止めることはできなくなる。

わかってはいるが、それでいいのか？

幼い頃からずっと守ってきた王子。それを今になって見捨てろと？

「このことはクリフォード公爵派の主だった者たちとの話し合いで決まったことだ。貴族である以上、個人の感情のみで動けない時があることも知っているだろう。おまえが殿下をどれだけ大事に思っているかわかっている。だが、ここは耐えてくれ」

父に苦渋をにじませた表情で言われてしまうと、ケヴィンにこれ以上の抗議はできなかった。

父も派閥の者たちも、この決断を好ましいと思っているわけではない。

そうせざるを得ない。やむを得ないだけなのだ。

シグルドが戦地に向けて出発するのは、十五歳の誕生日を迎える

日と決まった。
残り少ないわずかな日々を今のうちに楽しもうと、シグルドや共に行く近衛隊士たちは下街に繰り出す。
ケヴィンも誘われたが、行けるはずもなかった。
自分一人、置かれた立場ゆえに戦場に赴くのを免れる。
それでいてのうのうと顔を出せるような神経を、ケヴィンは持ち合せていなかった。

その夜、早々に自室に引き上げ、戸棚に置かれていた酒を片っ端から空けた。
酔いつぶれてしまいたかった。
けれど酔いが回ってくる様子は一向になかった。
飲めば飲むほど頭が冴えるようで、昼間のやりとりが鮮明に思い出される。
どうしようもない。だが割りきることもできない。

ケヴィンは部屋の外に出た。
酔えなかったけれど、心のたがは外れかけていたのかもしれない。
気付けば洗濯室の前、彼女の部屋のすぐ近くにまで足を運んでいた。

二章ー8

――君は、わたしが好きなのか……？

そう聞かれて、息が止まった。

熱に浮かされたようにかすれた声に、心が打ち震える。

もしかしたら、とずっと思っていた。

アネットのことをしすぎるほどに心配し、ただの下働きを相手にしているとは思えないほど気にかけてくれた。

――ケヴィン様のランプのほうが明るいから、ありがたいですし。

何気に言ったこの言葉を覚えていてくれて、読書がてら明かりを分けてくれた。アネットが気を遣わなくていいように。

知っていると言えるほど、ケヴィンのことを知っているとも思えない。けれど、普段ここまで気を回せる人だとは思えない。

償いかもしれないと思った。それにしてもあれからもう二年以上、償いにしては十分すぎるし、そろそろ忘れてもいい頃だ。

だからそれ以外の想いがあるのではと期待してしまう。

そのたびに考えを打ち消してきた。

ケヴィンはただ優しすぎるだけなのだと。

そう思うしかなかった。

アネットとケヴィンが結ばれることはない。

アネットは下働きで、ケヴィンはアネットの勤める邸の主人の息子。

違いすぎる身分の差に、本来なら会って話をすることもすべきではない。

想いが通じ合っても、その先はきっと苦しくなるばかり。

――君は、わたしが好きなのか……？

そう、なのだと思う。

夜の相手をするようにと言われた時、アネットはがっかりした。
ケヴィンも所詮は男。性欲を満たすために、断るすべのない使用人に夜の相手を命じるのかと。
でもそうじゃなかった。
単なる言葉の行き違いだった。
アネットの思っていた通りの人だとわかって嬉しくなった。
多分、その時から惹かれていた。
――ですから、夜のお供にあたしをご所望でしたら、お相手しますって。
望んでいたのは、むしろアネットのほうだ。
刹那の結びつきであっても、ケヴィンに求めてもらえるなら喜んで自らを捧げたかった。
それと同時に、ケヴィンは結婚できない相手を求めることなんかしないとも考えていた。
下働きのアネットに対してすら、誠実な人だから。
もしそういうことになったら、ケヴィンはきっと苦しむ。
相手の将来を案じ、これから迎える花嫁との間でどっちつかずの自分を責めるに違いない。

言ってることと考えてることが矛盾してる。
自分でも馬鹿だと思う。
けれど矛盾を抱えてしまっても、想うことをやめられないのだ。

ケヴィンの想いに触れて、アネットの心は震え上がった。
望みが叶った喜びと、踏み込んではならないところへ来てしまった怖れに。
ここでその通りだと、本心から言えたらどんなに幸せだったことだろう。
でも、想いが通じ合ったその先にあるものを知っているから。

はぐらかすしかなかった。
いつものようににっこり笑いかけると、ケヴィンの目に失望の色が宿った。アネットの胸がずきんと痛む。
ケヴィンにこんな表情をさせているのはアネットだ。
傷つけたいわけじゃない。できるだけ傷つけなくて済むほうを選んだだけのこと。

アネットにその気がないと考えたのか、ケヴィンもアネットと同じことを考えたのか。
ケヴィンはアネットから目をそらし、背を向けてのろのろと歩き出した。
その背にすがりたかった。
すがって、さっき言ったことは違うと言ってしまいたかった。
アネットはそれを耐えた。
ケヴィンを苦しめたくない。だからこの想いは、決して見せたりなんかしない。

アネットの年齢は正確にはわからない。でも拾われた時の様子からして、もう十八歳になるだろう。
これまでに言い寄られたことも、縁談があったこともあった。
だけど、ケヴィン以外の誰かのものになる決心がつかなかった。
アネットは捨子で、拾ってくれた公爵にも、育ててくれた使用人頭のオルタンヌにも恩がある。だから命じられれば結婚するしかない。けど幸いにも誰も強要しようとはしなかった。

――もしかして、あの噂は本当なのか？
結婚を前提につきあって欲しいと言ってくれた人が言った。
――ケヴィン様の愛人をしてるって。そのことなら僕は気にしない。そんなこと、他の邸じゃよくあることじゃないか。愛人をやめ

てくれるならそれでいい。ご主人様に恩義があっても、君にだって幸せになる権利はあるはずだ。
幸せ？　私の幸せって何だろう。
誰かと結婚すること？
ケヴィン様以外の誰かと。
そう思うだけで胸がきしむ。
――ごめんなさい。
一言だけ謝った。すると彼は表情を曇らせた。
――もしかしてケヴィン様のことを愛しているのか？　どうしたって君はケヴィン様の妻にはなれない。ケヴィン様に身も心もささげて、みすみす不幸になるつもりなのか？
――違うの。あたしはケヴィン様の愛人なんかじゃない。ケヴィン様は愛人をお持ちになるつもりなんか一切ないのよ。……ただ、あたしが今はまだ結婚する気になれないだけ。
――そんなことを言っているうちに嫁ぐこともできなくなるぞ。
――その時はずっとこのお邸に雇ってもらうから、いいの。
ごめんなさい。優しい人。他の人から見たら不幸にしか見えなくても、あたしにはこういう生き方しかできない。
ケヴィンと出会ってしまったから。

――・――・――

あれから二年の歳月が流れた。
邸に近衛隊士たちが招かれる日が少なくなり、それと同時に“お菓子の日”も減って、ケヴィンの訪れも少なくなっていった。
真夜中、アネットの部屋を通って邸に入ることもなくなった。

ケヴィンが少しずつ、アネットから距離を置こうとしているのが感じられた。
それがいいと思う。
一緒にいる時間が長くなるほど、お互い離れがたくなる。深みにはまってしまう前に引き返したほうがいい。

ケヴィンと会えなくなったことが、たまらなく寂しい時もある。
けれどそれも、時が経つにつれ感じなくなっていくだろう。
つらさも寂しさも、長く心の中に留めておけるものじゃない。
そのうちに“こんなことがあった”となつかしく思える日がきっと来る。

シグルドの十五歳の誕生日が近付いて来るにつれ、邸の中では不安なうわさが流れるようになった。
三公爵のうちの一人が、シグルドとケヴィンを戦場に追いやろうとしていると。
戦場なんて噂の中でしか知らないけど、戦況が思わしくないことは聞いていた。
邸にいる誰もが、そのようなことにならないといいと願っていた。

誕生日が間近に迫ったある日、とうとうシグルドが戦場に赴くことが決定したという報せが届く。
「ケヴィン様は何とか行かなくて済んだんだって」
「それだけはよかったよね」
「ホントホント」
下働きの女たちが、噂話を交わしている。
そこにアネットが加わることはなかった。
求婚してきたあの人が言ったように、アネットがケヴィンの愛人になったという噂が流れていて、それが二年経ってケヴィンとのか

かわりがなくなった今でも続いている。積極的にいじわるをされるということはないけれど、女の使用人たちの大半に無視され続けていた。
この国は一夫一妻制が重んじられ愛人は嫌われるのだから仕方ない。特に相手がみんながあこがれるケヴィンなのだから、敵視されたっておかしくない。なのに無視だけで済むというのはらっきーなほうだ。
こういう噂は、当人が否定して回っても信じてはもらえない。
孤独だった。でもかまわなかった。
逢瀬が多ければバレないわけがないとわかっていながら、それをケヴィンに言わなかったのだから。
らっきーだったと、心から思う。
他の何をおいてもかまわないくらい、好きな人と出会えて。
だから後悔なんてしていない。

その夜、繕い物をしながらケヴィンのことを思った。
きっとシグルドは戦場に行き、自分がここに残ることで悩んでいると思う。
あれだけ大事にしていた彼を一人戦場に向かわせるのは、身を切るよりつらいだろう。
今回のことでいろんなことを知った。
ケヴィンの亡くなった母親は現国王の姉で、ケヴィンは現在第三位の王位継承権を持つということ。三公爵は均等に権力を持たなくてはならないのに、今は一人の公爵に権力が集中して国政がおかしくなりつつあるということ。これ以上おかしくならないようにするために、シグルドとケヴィンの二人共を失うような危険を冒してはならないということ。
ケヴィンがここに残される理由は、アネットにもわかった。
けど、感情がそれに伴うとは限らない。

シグルドが戦場に行かなければならない事態を阻止できず、自分はここに残らなくてはならない。ケヴィンのせいではないけれど、彼の性格を思うに、自身に責任を感じていることだろう。
ケヴィン様、自分を責めすぎてなければいいけど……。
そう思いながら針を進めていると、洗濯室からカツンと足音が聞こえた。
その音にはっとして、アネットは誰なのか確かめもせず洗濯室に続く扉を開く。

洗濯室の入口に寄りかかったケヴィンがそこにいた。

支えがなければ倒れそうな様子に心配して駆け寄れば、ケヴィンから強い酒のにおいがただよってくる。
うつむいてアネットを見ようとしないケヴィンに、アネットは言った。
「酔ってらっしゃるんですか？」
「……酔えないんだ」
その一言から、ケヴィンの苦悩が伝わってくる。
「ともかく座って落ち付きましょう。来てください」
アネットが腕をかついで支えようとすると、ケヴィンはアネットから腕を退いて自分で歩き出す。
ふらつくケヴィンを気にしながら、アネットは先導するように部屋に入った。
「座ってください」
思っていた通りのひどい有様だった。目はうつろで顔色は悪く、ベンチに座ると前屈みになって膝に肘をつき、つらそうに体を支える。
そのまま動かなくなった。
何をしに来たのか、どうしたらいいのかわからない。
「……水を汲んできますね」

そう言ってケヴィンの前から離れようとした時、不意に手首をつかまれた。
ケヴィンは重々しく口を開く。
「殿下が、戦場に赴かれることに決まったんだ」
「……そうみたいですね」
「だが、殿下も父も、わたしにここに残れと言う」
苦渋に満ちた声に、アネットは相槌すら返せなかった。
ケヴィンは、アネットをつかんだのとは反対のほうの手で頭を抱える。
「理屈ではわかっているんだ。王位継承者の上位を、これ以上ラダム公爵派で占めてはならない。殿下は王命だから向かわなければならないが、わたしにはその命令は下されなかった。だからわたしは戦場に行かなくて済むようにする。それが最善だと。だが、わたしはどうしても納得しきれないでいる。今までわたしは自分の手で殿下を守ってきた。それを今になって、一番肝心なこの時に放棄しなければならないのか？」
アネットから手を離し、ケヴィンは両手で頭を抱え始める。
不謹慎と思いながらも、アネットは喜びを感じていた。
こんなつらいときに、アネットを頼ってくれた。しばらく会わなかったけれど、ケヴィンの中にはまだアネットが存在する。
ならあたしは、その信頼に応えよう。
アネットは微笑み、ケヴィンの肩に手を置いた。
「しなければいいんじゃないですか？」
ケヴィンがぼんやりと顔を上げる。
「放棄しなければいいんです」
これを聞いたケヴィンの表情に、いらだちがにじんだ。
「そんなに単純な話では」
その言葉を遮ってアネットは言う。
「あたしには難しいことはわかりません。でも、要は死んではダメということでしょう？　ケヴィン様も――殿下も」

怒り出しそうだったケヴィンの顔が、虚を突かれたようにゆるんだ。
アネットは目を細めていっそう微笑む。
「殿下を守り通せばいいんじゃないですか？　そしてケヴィン様も生きて帰ってくればいいんです。そうすれば何の問題もないように思うんですが、違いますか？」

無責任な言い方になってしまったけど、突き詰めればそういうことなんだと思う。
ケヴィンだけでなく、シグルドも死んではいけない。
戦場に行ったからといって、絶対に死ぬわけじゃない。
だから二人で生きて帰ってこればいい。

「もちろん戦場になんか行ってほしくないですよ？　けど、殿下をこのままお一人で行かせてもしものことがあったら、ケヴィン様はきっと一生苦しむことになる。あたしはケヴィン様に後悔してほしくないんです。反対されるんなら約束すればいいんです。必ず生きて帰るって。そうすれば皆さん、きっとわかってくれます」

行ってほしくなんかない。
けど、それがケヴィンの望みなら、精一杯後押ししよう。
自分の感情は、心の底に押し込めて。

ケヴィンは額に手を当てため息をついた。
「それで許可が下りると、本当に思っているのか？」
「試してみなければわからないじゃないですか。ぶっちゃけ言いますと、ケヴィン様のお話からは“生きて戻る”っていう意思が感じられませんでした。そんな調子でお願いしたところで、戦場に行く許可なんかおりませんよ。あたしだったら心配になって絶対に許可しません。――ダメ元で試してみましょうよ。このまま何の努力も

せずに、みすみす殿下を見送ることになってもいいんですか？」
アネットが言い終えると、ケヴィンは額から手を降ろし、ゆっくりと顔を上げた。
途方に暮れたような顔をして、アネットを見上げてくる。

今なら許されるだろうか？
ケヴィンの望みが叶うことを願って。
戦場に向かうことになるだろうケヴィンの無事を祈って。
“知り合い”なのだから、どこもおかしくないはず。

自分に言い訳して、抑えきれない想いに引きずられるように、アネットは体をかがめてケヴィンの額に口づけを落とした。
唇は額に軽く触れ、一呼吸の間も置かずゆっくりと離れていく。

驚いたようにわずかに目を見開くケヴィンに、アネットは想いを隠してもう一度微笑んだ。
「無事に帰って来てください。みなさんのために」

二章ー9（前書き）

ここまでお読みくださってありがとうございます！　この回にて第二章終了です。しばし間があきましたが、三章更新開始いたしましたので、続けてお読みいただけると嬉しいです。

二章ー9

――約束すればいいんです。必ず生きて帰るって。

そんなことで覆るような決定じゃない。シグルドを王国軍の総指揮官にという提案が出てから何日も、父公爵をはじめ、派閥の主だった貴族たちの間で話し合われてきたことだ。そうして決められた決定を、一員であるケヴィンが拒否することはできない。

だが、彼女の言うことには一理ある。

――このまま何の努力もせずに、みすみす殿下を見送ることになってもいいんですか？

嫌だ。それこそ後悔するだろう。何もしなかった自分を一生責め続ける。シグルドが生還したとしても。

しかし、努力すれば叶うというものでもない。

なのに彼女は言った。

――無事に帰って来てください。みなさんのために。

“叶います”と言われるよりも強い言葉。ケヴィンがシグルドについて戦場に行くと信じて疑わない一言。

微笑みをたたえゆるぎない視線を注いでくる彼女を見たら、わけもなく叶うと信じられた。

下街の、いつもの酒場に足を踏み入れた。

遅い時間だからもう解散してるかもしれないと思ったのに、店の中はまだ宵の口と言わんばかりの喧騒に包まれていた。ほとんどが近衛隊士だ。明かりの乏しい薄暗い店内に渦巻く熱気、大声で談笑し、どこかかしかで誰かが酒の杯をあおっている。

そんな中、ヘリオットや数人の仲間たちが気付いてケヴィンに顔を向けた。

「来たな」

ヘリオットがにやり笑って言う。何もかもお見通しというような笑みが、いつもケヴィンのしゃくに障る。
ケヴィンは近寄ってきたヘリオットを押しのけて、テーブルの一つで仲間たちと談笑するシグルドに近付いた。
シグルドは近付いてくるケヴィンに気付き、口に運ぼうとしていた杯を下げた。
「ケヴィン」
「お話があります」
ケヴィンが短く返すと、シグルドは杯をテーブルに置いて姿勢を正した。
「聞こう」
場が、急に静かになった。
隊士たちが好奇の目で見守る中、ケヴィンは深く息を吸い、自分にも言い聞かせるようにはっきりと言った。
「わたしも戦場に行きます」
「……トマスたちが決めたことに、おまえは逆らえるのか？」
誰も言葉を発しない中、シグルドはにらみつけるようなきついまなざしでケヴィンを見上げる。
その視線をまっすぐ受け止め、ケヴィンは答えた。
「逆らうのではありません。説得します。父たちが危惧するのは、わたしたち二人ともが失われるということ。それを回避するために一番確実な方法として、わたしをここに残すことを決めました。しかし本当に望ましいのは、あなたもわたしも生きていることです」
そこまで一気に言ったところで、ケヴィンは間を置いてゆっくり息を吸った。
そして宣言する。
「わたしはあなたを守って、わたしも生きる。だから戦場へついていきます」
彼女に言われたことを自分の言葉に置き換えて口にしていくうち

に、身の内に自信が満ちてくる。
派閥の決定を覆すことは困難だ。それは今でも思うことだが、この自信さえあればやり遂げられるような気がした。
自分に足らなかったのは武術の腕でも父公爵たちに物申せる立場でもなく、これだったのだと今ならわかる。
ゆるぎない信念を持って、あきらめずに訴え続ける。努力はしないより、したほうがいい。
彼女が教えてくれたことだ。

「……あなたも反対してらしたので、まず先に報告させていただきたかったのです。ご歓談中お邪魔をいたしました」
反対をされても、もうシグルドの意見も聞く気はない。
きびすを返して立ち去ろうとした時、盛大なため息と一緒にシグルドは言った。
「ようやく覚悟を決めたか」
意外な一言に驚いて振り返ると、シグルドは立ち上がって口の端を上げる。
「俺はその言葉が聞きたかったんだ」
何の事だかわからず返答に窮していると、背後から両肩を強く叩かれる。
「遅いっつーの！」
とっさに振り向くと、肩の向こうでヘリオットがにやっと笑う。
「待ってたんだぜ？　俺たち。俺たちに役目があるように、おまえにも役目がある。役目だから残るんだって割り切れればいいけど、おまえにそういう器用なことはできないってわかってたからさ」
シグルドが席から抜けてケヴィンの横に立つ。ケヴィンはシグルドのほうに向きなおった。シグルドはあきれたように眉尻を下げる。
「おまえに生き抜く覚悟が見られなかったから、俺も反対したんだ。だが、その覚悟ができたのなら、俺もトマスたちの説得にあたろう。――だいたい、何だよ。おまえが戦場に行くのを反対された時、俺

は必ず死ぬみたいな顔しやがって。俺は戦場に死ににに行くつもりはないっつーの」
ヘリオットたちを真似た口調も、今回ばかりは恐縮して聞き入ってしまう。
そんなつもりはまったくなかったが、思い返してみればそう受け取られてもおかしくないような切羽詰まった言動をしていたように思う。
「フツーに考えれば、総指揮官が倒れたら軍全体に大打撃だろ。そうならないように幾重にも守るから、簡単には死なねーよ。俺らもシグルドを守るし。おまえ、ひっくるめてな」
おどけた口調で言うヘリオットに、シグルドは横やりを入れる。
「そういうおまえも死ぬなよ。――おまえらもだ。みんなで生きて帰って、ここで祝杯を上げよう」
「おお！」
シグルドが店内にいる近衛仲間たちを振り返りそう言うと、仲間たちは声を上げ、杯を掲げたりうなずいたりと思い思いの反応を返す。
そこにあるのは信頼。今までにも感じてきたことだが、ここまで実感したのは初めてだった。
シグルドが仲間たちの中心になりつつある。その中に加わり続けることができてよかったと、心から思う。
実際に彼らと一緒に行けるかどうかはケヴィンのこれからの努力にかかっているのだが、あきらめなくて本当によかった。

感慨深い思いに浸っていると、ヘリオットがケヴィンの横に立った。
「さてと、話がまとまったところで」
ヘリオットは仲間たちを見回してにんまりと笑う。
「今日はロアルのおごりだ！　存分に飲むぞ！」
「おお！！！」

先程より大きな声が上がる。何事かとロアルを探せば、ロアルは奥のテーブルで頭を抱えていた。
「きっと来ないから一人勝ちだぞって言ったのは誰ですか～。それに皆さんさっきから遠慮なく飲み食いしてたじゃないですかぁ」
……つまりケヴィンは賭けのネタにされ、ロアルはカモにされたということか。
そうだった。こいつらはそういう奴だった。見直すたびに後悔するのに、付き合いが始まって数年経ってもしてやられる。
ケヴィンは自分にあきれ、口元にほんのわずか苦笑いを浮かべた。
「僕のお給金じゃ、こんなにも払えません～」
わめくロアルに、ケヴィンは声をかける。
「ロアル、ここは私が支払う。――とわたしが言い出すことも見越していたのだろう？」
隣のヘリオットに続く言葉を向ければ、ヘリオットは悪びれずに肩をすくめる。ケヴィンはため息をついた。
「今夜のところは乗せられてやろう。ただし今晩だけだ」
店のあちこちから歓声が上がる。シグルドも一緒になって注文を叫んでいるところを見ると、どうやら賭けに参加していたようだ。
近衛仲間とつるむようになってから、次々と悪いことを覚えるのでいけない。さいわい女遊びにうつつを抜かすことはなく、その点は安心しているが。
気付けば、ロアルが感激に目を潤ませてケヴィンを見つめていた。
「ありがとうございます！　もしかして僕もおごってもらえるんですか？」
「……おごってやってもいいが、自重しろ」
今夜シグルドは酔い潰れるまで飲むだろう。そんな日にロアルまで介抱したくない。

翌日から、ケヴィンの戦場行き回避を決定したクリフォード公爵

派の元を順に訪れた。
いい顔はされなかった。逆に説得し返されることもあった。
それでも何度も足を運んで頭を下げた。シグルドがついてきてくれて一緒に頭を下げてくれることもあった。
策も確実性もないが、この方法しか取れなかった。
そのうちにケヴィンの意思を理解してくれる者が現れ、一緒に説得に当たってくれるようになり、そのおかげで派閥内の話し合いが再度持たれることとなった。
その場にケヴィンも呼ばれた。
「戦況は悪化の一途をたどっている。死ぬかもしれないのだぞ？」
「死ぬつもりはありません。何が何でも生きて戻ってきます。シグルド殿下と一緒に。戦況が悪いからこそ、戦場で活躍もしやすいでしょう。殿下が戦果を上げられれば、その名声が派閥の力となります。わたしはそれをお助けしたいのです。どうか許可を」
そうして最後の一人も折れ、ケヴィンはシグルドの書記官として隊列に加わることとなった。

出立までにもう幾日もない時のことだった。
準備と各所への挨拶と、慌ただしく残りの日々を過ごす。
すべきことが終わったのは、前日のことだった。

出立前の最後の夜も、シグルドや仲間たちは酒場へと繰り出した。
ケヴィンもそれに同行し、途中でロアルにシグルドを任せて酒場を出た。

彼女の幸せを考え、会わずにいるつもりだった。
なのに自分の弱さに負けて会いに行ってしまった。
久しぶりに姿を見せたケヴィンを、彼女は以前と変わらぬ様子で迎えてくれた。情けないありさまだったケヴィンを優しく受け入れてくれ、大きな助言を与えてくれた。

忙しさのあまり、あの日以来彼女の元を訪れていない。
あれだけ世話になったのに、挨拶なしで出立するわけにはいかないだろう。

……いや、それも言い訳だ。
挨拶にかこつけて、ケヴィンは夜道を急ぐ。
これからしばらく会えなくなる。
そう思ったら、無性に彼女に会いたくなった。

――・――・――

ケヴィンが久しぶりに訪れた翌日から、新たな噂が広まった。
何人もの貴族たちに、ケヴィンが頭を下げて回っているのだという。
「せっかく戦場に行かなくてよくなったのに、ケヴィン様も奇特な方よね」
「それだけ王子様のことを愛してらっしゃるのよ」
「ケヴィン様の、王子様のかわいがりようは異常よね。いくら従兄弟だからって」
「もう完璧に保護者！　まるで父親よね」
「えー？　どっちかっていうと父親っていうより母親って感じしない？　口やかましいところとか」
「言えてるー」

相変わらず好き放題だ。
忙しくて遊んでいる暇のない使用人にとって、噂話は娯楽の一つ。
単調な手作業の退屈しのぎに、限られた行動範囲で様々なことを知る手段として、噂話を交換する。

面白おかしくしようとして、尾ひれがつくのはいつものことだけど。
それにしても“父親っていうより母親”って……。
思わず吹き出しそうになったのを、アネットはじゃがいもの皮をむきながら必死にこらえる。

あの日以降ケヴィンが訪ねてくることはない。けど、こうして話はちくいち耳に入るから、アネットはやきもきすることなくいつも通りの日々を送ることができた。
自分の言った言葉がケヴィンの為になったのなら、それでいい。それ以上のことは望まない。

ケヴィンが忙しい日々を過ごしていた頃、ヘリオットが訪れた。
事情を話そうとするヘリオットに、アネットは「知ってます」と答えた。あきらめないことを勧めたのは自分だからと。
するとヘリオットは、寂しそうな笑顔を見せた。
「君は、強いね」
何を言われているのか、アネットは何となく察した。

ヘリオットは、アネットの気持ちに気付いている。
以前はわからなかったけど、今ならわかる。ヘリオットがアネットに誘いをかけたのは、アネットがケヴィンにふさわしいか確かめるためだ。貴族と関係を持って金品などをせびるやっかいな女だったりしないかどうかを。ヘリオットにも、ケヴィンは危なっかしく見えたらしい。
結局ヘリオットの誘いには一度も乗らなかったけど、そのおかげか認められているようだ。

アネットの気持ちに気付いているのなら、ヘリオットの言いたい

ことはこういうことだろう。
好きな相手が望んでいることとはいえ、戦場に向かうことを後押しするなんて並みの神経じゃない。普通なら好きな相手を戦場に向かわせようなんてしないだろうと。
それを強いと言われると、何だか違うような気がする。
ケヴィンに後悔させたくなかっただけで、それ以外のことは見ない振りをしていた。
それで強いと言えるのかどうか。

アネットは自嘲気味に笑った。それを見て、ヘリオットが言う。
「悪い意味で言ってるんじゃないよ。よく言ってくれたって感謝してる。ケヴィンのことだから、一人だけ王都に残ることになったら、自分を責め続けてどうにかなっちまう。俺から言えるようなことじゃなかったから、君が言ってくれて助かった。ありがとう」
「お礼を言っていただくほどのことじゃないです。あたしもそう思っただけで。……ケヴィン様は責任感の強い方ですから」
そう言ってアネットはにっこり笑う。

細く開いた戸口から漏れるわずかな光に照らされたヘリオットは、少しの間困ったような顔をしてアネットを見つめていたけれど、やがてあきらめたかのように上着についたポケットを探った。
「お礼ってわけじゃないけど、いいものあげる。必要になったら使って」

ケヴィンは忙しいから、アネットの所へは来られない。
自分にそう言い聞かせていたのに、ケヴィンはやっぱり律儀だった。
出立する前夜、邸の人たちが寝静まった頃を見計らって酒場から戻ってきたケヴィンは、裏庭に面した扉を叩いてアネットの部屋に

やってきた。
勧められてベンチに座ったケヴィンは、正面の丸椅子に座ったアネットをまっすぐ見て言った。
「殿下について行けるようになった。君のおかげだ」
「あたしは大したことしてないですよ。叶ったのはケヴィン様が頑張ったからです。――よかったですね」
思っていた通りの言葉に、アネットは頭の中で何度も繰り返してきた言葉を返す。
練習しておいた。ケヴィンに会うことができたら動揺してしまうと思ったから。

行かないで。
無事に帰って来て。

ここ数日心をさいなんできた二つの想いを胸の内に隠して、アネットはいつものようににっこり笑う。
「出立前にケヴィン様と会えたら、お渡ししたいと思っていた物があるんです」
そして服の下から守り袋を取り出した。
「持っていってください。お守り代わりに」
「え……」
アネットが手のひらに乗せて差し出したものを、ケヴィンは驚きの呟きをもらして凝視する。
とたんに恥ずかしくなった。
どうしてこんなこと思い付いたんだろう。
動揺しないようにといろいろ考えていたのに、やっぱり動揺していたらしい。
「あ、やっぱりダメですか？　中身、小汚いですもんね」
何でこんなこと思い付いたんだろう。他人から見たらごみにしか見えないものをお守りにして、なんて。

頬を赤らめ差し出した格好のまま固まったアネットに、ケヴィンは戸惑った声で言った。
「いや……大事なものなんだろう？　真夜中にゴミまであさってさがそうとしていたくらいに」
五年近く前の話を持ち出されて、アネットは苦笑いを浮かべた。
「そのことはもう忘れてくださいよ。……大事は大事なんですけど、もういいんです。これよりももっと大事なものができましたから」
「大事なもの……？」
アネットは微笑んではぐらかす。

守り袋は心のよりどころだった。両親を知らないアネットが、ただ一つゆるぎなく信じられる親の愛情の証。
だからこそ、ケヴィンに持っていてほしいと思った。親が自分に与えてくれた愛情が、ほんの僅かでもケヴィンを守ってくれるように。
アネットにとって今一番大事なのは、ケヴィンが生きていてくれることだから。

ためらうように瞳を揺らめかせていたケヴィンは、急にふっと笑うと、左の小指から指輪を抜き取った。
「なら、これを代わりに」
「えっ！？」
「これは母の形見だ。君の守り袋の代わりにしてほしい」
高価そうなものと交換というだけでもとんでもないと思うのに、これを聞いてアネットはさらに慌てた。
「だっだだダメですっ！　そんな大事なものと交換しなきゃならないなら、これ、持っていっていただかなくても……っ」
胸元に引き寄せて隠そうとした小袋を、ケヴィンはアネットが握り込む前に持っていってしまう。そして中から守り袋を取り出し、代わりに指輪を入れた。

「持っていてほしいんだ。――君に」
深くしみとおってくる声に、アネットは遠慮することをしばし忘れた。
ケヴィンは丸椅子に座るアネットの正面に膝をつき、小袋の長い紐をアネットの首に下げて、腰まであるおさげを一本ずつすくい取るように紐から抜く。

何故か夢の中にいるような気分になった。
酔った体を支えたことはあっても、こんなふうに触れられたことはない。
――いや、一度だけあった。
ケヴィンのベッドに押し倒され、髪をほどかれたあの時。

思い出したとたん、アネットの胸は騒ぎ出す。
息を詰めてケヴィンを見つめていると、三つ編みの毛先を手のひらからするりと落としたケヴィンが、アネットを見つめ返した。
めったに顔色を変えることにないケヴィンの瞳の奥底に、アネットは今まで見たことのない何かを見る。それは熱にうかされたように頼りなくありながら、アネットを捉えて離さない力強さがあった。

先程までの和やかな雰囲気が、いつの間にか別のものにすりかわっている。

息苦しさに、身動きが取れない。
頭はそのことでいっぱいなのに、アネットの口からは別の言葉がもれる。
「あたしの守り袋と、ケヴィン様の指輪とでは、つり合いが取れません……」
「金の価値じゃない。……君なら、わかっているだろう……？」
お互いの声が、苦しげにかすれる。

「だが、君が金銭的価値の差を気にするのなら、もう一つ、もらいたいものがある」
「何、を……？」
「――君に……口づけする、許可を」

どくん、と胸が高鳴る。
踏み込んじゃいけない、そう思うのに。
これが最後になるかもしれないと思ったら、抗い切ることはできなかった。

アネットのおとがいに、ケヴィンの手のひらがやさしく添えられる。
まっすぐ見つめられ、アネットは承諾の言葉の代わりに瞳を閉じた。
ゆっくりと近づいてくる気配がする。
暖かい息を感じたと思ったら、唇に柔らかい感触が触れた。
それは、ただ重なったまま、長い間離れることはなかった。

第二章　完

三章ー1

二度目のキスは、唇と唇がただ触れ合っただけの、不器用なものだった。

「君にも約束する。必ず生きて帰ってくると」

長い長いキスのあと、ケヴィンはそう言い残して戦地へと旅立っていった。

この言葉さえあれば、不安にも寂しさにも耐えていける。

そう思ったのに。

――・――・――

ケヴィンがシグルドに付き従って王都に帰ってこれたのは、旅立って三年後のことだった。

王城に到着し国王に謁見をたまわったシグルドは、その場で発言の許可を取り、戦場にいた頃から考えていた意見を口にした。

――これ以上の進軍は、いたずらに軍を消耗させるだけで何の利にもなりません。軍を止め、現在占領している地の守りを固めるべきです。

謁見に参列していた主だった貴族たちは、シグルドの“進言”に激昂した。王子であり王国軍の総指揮官とはいえ、国王に意見するなどもっての他だと言うのだ。

戦場を自らの目で見て軍をまとめてきたシグルドが進言できなくて、誰が戦場について国王に進言できるというのか。

シグルドはケヴィンら戦場から戻って来た者たちと一緒に、議論の場から追い出された。議会に参加する資格を持っていないからという理由で。

ここで進軍を止めるのは、侵略を推進してきた者たちにとって都合が悪いのだ。広大な盆地に国を構える隣国レシュテンウィッツ。ラウシュリッツ王国軍は国境から坂を下った先の、八つの村と二つの街しか手に入れていない。一人が手に入れるには十分な広さだが、大勢の貴族たちが分けあうにはあまりに狭かった。多くの富を投じて利がろくに得られないというのはおさまりがつなかいのだろう。また、ここで今まで虐げ続けてきたシグルドの言葉通りに国が動くと不都合な者たちがいる。王妃や、ラダム公爵が。

安全な王都でのうのうと暮らす貴族たちの思惑について論じていられるような状況ではない。手に入れた地は常に他国の軍がねつらっていて、守りに徹するよう命令を置いてきてあっても断続的に続く攻防戦に消耗は免れない。だが、国王より進軍はこれ以上行わない、占領地の守備に専念せよという命令が下るだけで、兵士たちの心持は大きく変わり無駄な消耗を防げる。

議会の決定をただ待つというのは落ち付かない。

近衛隊士たちとの約束もあって、下街の酒場へと繰り出した。

近衛隊士たちの酒がずいぶん進み部屋の隅に寝転がる者が現れるようになった頃、カウンターの片隅で酒を飲むフリをしながら馬鹿騒ぎに興じるシグルドを見守っていたケヴィンに、ヘリオットが酒の杯を持って近付いてきた。

「おまえ、こんなとこにいてもいーのか？」

ヘリオットが何を言わんとしているのかは、すぐに察せられた。ケヴィンはかすかに眉をひそめ無言でシグルドに目をやる。ケヴィンの反応は予測済みなのだろう。ヘリオットは気にした様子なく、ケヴィンの隣に並んだ。

「そういや昨日の晩って手もあったか」

ヘリオットに気付かれてしまった通り、確かに昨夜彼女のもとを訪れた。だが。

「あ、もしかして“他にいい人ができたからもう来ないで”とか言

われたとか？」
ぎろりにらむと、ヘリオットはおどけた様子で肩をすくめる。
……そうであったほうがどれだけ楽だったことか。
昨夜のことを思い出したケヴィンは、これまでなめる程度にとどめていた杯をぐっとあおった。

邸に帰り着いたのは昨日のことだ。逸る気持ちを押さえ、邸が寝静まったのを見計らって、アネットの部屋を訪れた。
三年の歳月が流れた。決して短くない期間。年頃であったアネットには劇的な変化があってもおかしくない。結婚してしまっているかもしれない。そのために部屋が変わり、今はもう洗濯室の隣には住んでいないかもしれない。
そんな怖れを抱きながら、裏庭に回って井戸の脇に立ち、何度も通った扉を見つめた。
今あの部屋に住んでいるのは、彼女なのか、それとも別の誰かなのか。
扉に近寄ることもためらっていたら、かすかな光の漏れる小窓に人影が現れ、あまり間を置かずに扉が開かれた。
ランプを掲げて近付いてくるのは、間違いなく彼女だった。
ケヴィンに気付いて出てきてくれたのだろう。忘れられてしまってはいないのかもしれない。そんな期待に胸が打ち震える。
が。
――そんなところに立ってないでくださいよ。誰かに見られたらどーするんですか。
予想外の第一声に、ケヴィンは反応できずに固まった。
戦場から帰ったのだから、もう少し感動があってもよさそうなものなのに、彼女はそう言ってケヴィンを自分の部屋へと追い立てる。今でもベッド代わりにしているだろうベンチにケヴィンを座らせると、そこでようやくこう言った。
――そうそう。おかえりなさい、ケヴィン様。お疲れ様でした。

そう言って深々と頭を下げる彼女に対し、あたりさわりのない会話をするしかなかった。彼女が口にするのはここ二年間の邸の様子ばかりで、ケヴィンのしたい話を差しはさめる雰囲気はとうとうつくれなかった。

五年ほど前、ヘリオットが言っていたことを思い出す。まさに閉め出されてしまったような気分だった。結婚したとか恋人ができたと言って拒絶するよりたちが悪い。

会って確かめたいという焦燥を抑えつつ入った部屋から、確かめられなかった落胆とすっきりしないものを抱えて出るはめになった。

あとになって思えば、その時は足らなかったのかもしれない。どうしても伝えなければという思いが。

議会の決定を待つという状況に置かれながら、心のどこかでシグルドの進言は通り、これまでの労がねぎらわれて、あるいはこれ以上活躍させまいとする勢力に阻まれる形で、シグルドは総指揮官の任を解かれ再び戦地に赴くことはないと思っていたのかもしれない。

ところが、事態は急変する。

「俺はそんなこと言ってない！」

議会の決定を経緯とともに知らされたシグルドは、それを伝えた父クリフォード公爵につかみかからん勢いで怒鳴った。

“これ以上の進軍は国王の威光をもってしてでしか不可能”――シグルドの進言は、このように言いかえられ、侵略反対派の強硬な抵抗もむなしく、議会で賛成が上回り、国王の遠征とさらなる侵略推進が決定された。その数日後、なおも国王に進言を続ける反対派がそのことを罪に取られ、謹慎、罷免の厳罰に処せられる。

シグルドは、国王遠征の準備が整うまで戦場を維持せよとの命令を受けて、国王に先駆けて戦場に戻ることとなった。

三章―2

「ねえ、聞いた聞いたぁ？　ケヴィン様、また戦場に行かなくちゃならないんだって」

午後の仕事に遅れてやって来た使用人が、まっさきに言ったのがこれだった。

アネットは動揺して、思わずむきかけのじゃがいもを落としてしまいそうになる。

この三年間、その繰り返しだった。

“戦いに勝ったそうだ。”“戦略的退却だってさ。普通の退却とどう違うんだ？”“どうやらヤバいらしいぞ。防戦一方だそうだ”――王都にもたらされ、邸に広まるうわさに一喜一憂する。必ず帰ると約束してもらったって、何の気休めにもならない。不安なものは不安なのだ。戦場に行くことをすすめたのは自分なのに。

だからケヴィンが帰邸したときには心の底から安堵し、胸が熱くなった。

よかった。よかった。よかった。

踊りだしたくなる気持ちを抑え仕事をしている最中も、アネットは夜が待ち遠しかった。来てくれるとは限らないのに。あれからもう三年だ。ケヴィンはもうアネットのことを忘れているかもしれない。そんな想いを抱きつつも期待をぬぐうこともできないから、深夜ランプを細く灯して繕い物をしている最中も、耳をすまして何度も立ち上がっては小窓から外をのぞいた。

姿が見えた時、どんなに嬉しかったか。

けど、急に怖くなって、アネットは椅子に座り体を低めた。

三年前のことを思い出した。ただ重なっただけの長い長い口づけ。離れたのを合図にまぶたを上げれば、目の前のケヴィンの熱い瞳とかち会った。

――君にも約束しよう。必ず生きて帰ってくると。
すごく嬉しくて、思わずうなずいていた。でも、あとになって気付く。
その言葉は、この先に進むという意味にも取れなかった？
真っ赤になりながら、体の芯が冷えていく。口づけのその先を望む気持ちと、ケヴィンを苦しめたくないと拒絶する気持ち。相反する想いが全身を駆け巡る。
ケヴィンだって思ったはずだ。この関係には先がないと。
一度は離れようとしてくれたはずなのに、どうしちゃったの？
あのケヴィンから判断力が欠落したとしか思えない。
幸福は一瞬。苦悩は一生。
いっときの幸福に浸る誘惑を振り切って、アネットは立ち上がった。ランプを手に小窓に近寄り、ケヴィンの姿を再度確認して扉を開ける。口にしたのは以前と同じ言葉だった。その言葉にがっかりしたケヴィンに気付きながら、アネットはケヴィンにペースを持ってかれまいとしゃべり続けた。
幸福を我慢すれば、苦悩は長引いても一生は続かない。
そう、自分に言い聞かせて。
でも、本当に苦悩を忘れられる日が来るの？　ここ三年、ううん、それよりも前からあきらめようとしてあきらめきれずにいたのに？

洗い場で皮むきをしていた下働きだけでなく、隣の調理場からも料理人たちが顔を出して、ちょっとした騒ぎとなっていた。
「ええ！？　もう行かなくてよくなったんじゃないの？」
「それがさぁ、エラいお貴族様たちの間で何かあったらしいよ。今度は国王様が戦場に行くことになったんだって」
「じゃあさ、シグルド様はどうなるの？　総指揮官って軍で一番エラい人よねぇ？　国王様が行くんなら、国王様が総指揮官になるってことにならない？」
「だからシグルド様は大隊長に格下げになるのよ。で、格下げにな

ったシグルド様にケヴィン様が書記官としてついていくってこと」
「それってひどくない？　この二年間軍を率いてきたのはシグルド様よ？　軍が勝利できるようになったのもシグルド様のおかげでしょうに」
「馬丁のクリフもそこがお貴族様たちのおかしいところだって言ってたわ。シグルド様でも軍を勝利に導けるようになるまで一年以上かかったのに、いくら国王様でも一度も戦場に行ったことのない人がすぐに軍を指揮できるわけがない。時間と兵力のムダだって」
「それは、あれだ。シグルド様に軍の指揮をさせて、国王様は総指揮官の地位におさまることで、シグルド様の立てた手柄を国王様がせしめるって寸法じゃねえのか？　最近国王様のご威光は落ち目だからな。今まで虐げてきた息子を戦場で活躍させて、自分はのうのうと王都でふんぞり返ってるってさ」
「どちらにしてもひどい話じゃない。シグルド様はたった十八歳なのよ。それを戦場に追いやったり、格下げして自分のための手柄を立てさせたり、ひどすぎるわ」
「あんたやけにシグルド様のことをかばうようになったわよね。“ケヴィン様〜”はどうしちゃったの？」
「ケヴィン様のことは今でも好きよ。でも成長して戦場から戻って来られたシグルド様もずいぶんとかっこよくなられたことない？」
「あたしもそれ思った！　無邪気なお子様だったシグルド様があんな風に成長するなんてびっくりよねぇ」
「いつも思うんだが、おまえら何で急に話が変わっても平気でしゃべり続けられるんだ？」
「内容ごとに切ってたら会話が弾まないじゃない。慣れよ慣れ。料理長もしゃべり続けてたらコツがつかめるようになるわよ」
「……そんなコツ、つかみたくもねーな」
笑い声が響く。
いつもの光景。ケヴィンのこともシグルドのことも、大きな話題として取り上げられても、所詮自分たちとは関わりのないこと。話

が済めば忘れ去られてしまう。
でもアネットはそういうわけにもいかない。
ケヴィンが再び戦場に行くと聞いて不安になったのと同時に、一つの確信が胸の中に浮かび上がっていた。

戦場から帰ったその日の夜、ケヴィンはあきらめた様子で去っていって、それ以来アネットのもとを訪れることはなかった。
けれども今夜、きっとまた訪れるだろう。あの夜アネットが言わせなかった言葉をもう一度携えて。

人々が寝静まった夜、邸の中にかすかな足音が聞こえる。その音は次第に近づいてきて、アネットの部屋の前で止まり、わずかなためらいの後、小さく二度叩かれた。

三章ー3

あたしが意固地になってケヴィン様を拒む理由。
それはケヴィン様を苦しめたくないから。

声はかけられなかった。だけど誰だかわかっていたから、アネットは聞かずに扉を開いた。
「こんばんは、ケヴィン様」
アネットはにっこり笑いかける。しかし表情に乏しいケヴィンの顔に思い詰めたものを感じ取って、アネットは思わず怯みそうになった。
今日こそ言うつもりだ。
それを聞いてはいけない。言わせてはならない。
アネットは決意を胸に気をひきしめる。
「ノックだけじゃなくて、声もかけてくださいよ。それで、どうしたんですか？」
「中に入れてもらってもいいだろうか？」
「……どうぞ」
断る理由もみつからなくて、アネットは仕方なく部屋の奥へ入っていった。ケヴィンはそのあとについてきて、扉を閉める。
荷物がひしめきあい、歩けるのは扉と扉をつなぐ細い通路のような空間だけ。その途中までできてアネットは立ち止った。
「座ってもいいだろうか？」
背後から声をかけられる。それだけで心が震える。悟られまいと、アネットは振り返って元気に答えた。
「いちいち聞かなくていいですってば。あたしが寝てない時は単なるベンチなんですから、好きに座ってくださいよ」
アネットは笑うのに、ケヴィンの表情は固い。無言でベンチに腰

掛けるのを見て、アネットは居心地の悪いものを感じながら三本脚の丸椅子に座った。
アネットが椅子に座ると、ケヴィンは口を開いた。
「再び戦地に赴くことになった」
「あ、はい。聞きました」
続けられる言葉が見つからない。“進軍を止められなくて残念でしたね”なんて軽すぎる。政治を仕切る貴族たちに腹立ちは覚えるけど、それはケヴィンに向けていい言葉じゃない。
……本当に言いたいのは“行かないで”。行くことが仕方ないとしても、早く帰ってきてほしい。無事でいてほしい。
でもそんな言葉を口にしたら、きっと今までの我慢が水の泡になる。
「今度は国王陛下も遠征することになった。今までは殿下が一つひとつの戦いを大きくしないことで犠牲を減らしてきたが、殿下が国王陛下の指揮下に入るとなると、そうも言っていられなくなる。……もしかすると、殿下の命を危うくするために隊が無謀な作戦にさらされることになるかもしれない。そうなるとわたしも無事に帰ってこれるかわからない」
淡々と語られた話に、アネットの心臓は握りしめられたかのように痛む。
あらためて言葉にされるとつらい。すがって引き留めたくなる。戦場に行くことを勧めたのはアネットなのに。
言葉を返せずにうつむいていると、ケヴィンの手がアネットの膝に伸びてきて、膝の上にあるアネットのこぶしをそっと包み込んだ。
熱い。
その熱さに驚いて手を退こうとするけれど、軽く握られただけで振りほどけなくなる。
ずっと欲しかったものだから。
でもダメ。
頭の中で警鐘が鳴る。

これ以上はダメ。聞いてはいけない。言わせてはいけない。
なのに動けない。いつもはよくしゃべる口も言葉を紡げない。
ケヴィンがとうとう話し出す。
「生きて帰れないかもしれないのに、勝手なことをしてすまない。だが、聞いてくれ」
一旦息を吸い、ケヴィンはゆっくりと告げた。

「君が、好きだ」

体から力が抜ける。
ごめんなさい、とは口にできなかった。言わせてしまってごめんなさいとも、気持ちに応えることはできませんとも。
「戦場に行って後悔したんだ。どうして想いを伝えずに来てしまったのだろうかと。――戦場は思っていた以上に過酷な場所だった。殿下は総指揮官だ。総指揮官が倒れればそれは軍の敗北を意味する。そのため殿下は幾重にも守られ、殿下に近い者ほど同時に守られることになる。だが、殿下一人を倒せば戦いに勝てるということから、敵は執拗に殿下を狙う。――わたしたちの周りでたくさんの者たちが死んだ。一緒に生きて帰ろうと誓った近衛仲間も、三人が死んだ。彼らの死を悼みながら、君のことを思い出さずにはいられなかった。もしここで死ぬことになったら、永遠に想いを伝える機会を失う。想いを伝えたくとも、君に手紙を送るわけにはいかなかっただろう？」
返事を待つケヴィンに、アネットは震える声で答える。
「あ、たりまえです。下働きに、手紙を出すお貴族様が、ど、どこにいるんですか」
「わたしが戦地に赴いたあと、君には恋人ができたかもしれないと思った。あるいは結婚が決まったかもしれなかった。手紙一通でそのしあわせを壊すわけにはいかなかった。だから会って、そのことを確かめてから君に想いを伝えようと、それを支えに今日まで来た」

握られたままの手が熱い。アネットの、女性としてはそんなに小さいわけではない手が、ケヴィンの手にすっぽりと隠れて見えない。

視線の持って行きどころがなく、途方に暮れてアネットはそれを見つめていた。

「いないのだろう？　結婚相手も、恋人も」

「何で、断言するんですか？　言ってないだけかもしれないでしょ……？」

「君はわたしが思っていたより、しっかりしている。そうした相手がいれば、顔向けできないような真似だけでなく、そう誤解されても仕方ないような状況も作ったりしない。このように、わたしを部屋に入れたり、手を握らせたりも」

手のことを指摘され、アネットはようやく動くことができた。立ち上がり、手を振りほどこうとする。

こんなことを許せば、特にこの状況だから、期待させてしまうにきまっている。どうしてそんなわかりきったことに気付けなかったんだろう。

手を握り込まれる前に振りほどかなくちゃならなかった。最初から、部屋に入れるべきじゃなかった。

今更気付いても遅い。

アネットの手はしっかり握られてしまっていて、引っ張っても離してもらえない。視線に気付いて握られた手から少し顔を上げると、ケヴィンの熱っぽい瞳にとらわれた。

目も、そらせなくなる。

「わたしを拒みたいなら言えばいい。恋人がいると、結婚相手が決まったと。そうできないことが君の答えだと思うのだが、違うのか？」

何でこの人にはわかってしまうの？

アネットは悔しくなって唇をかみしめる。

ごみみたいに汚れほつれた守り袋が、アネットにとってなくすこ

とのできない大切なものだったと。
全員に配られたはずのお菓子を食べられなかったことを、ほんのちょっと話しただけで。
そして今も。
拒まなければいけないと思いながらも、ケヴィンを想うあまり、アネットには決して口にできないことを。

「今度こそ生きて帰れないかもしれないというのに、このような話をしてすまない。だが、君の想いを確かめずには、戦場に行けそうもなかったんだ」
ケヴィンはベンチに座ったまま、アネットを見上げてくる。
この残りの距離が、アネットに残された最後の選択肢だった。
ここでもう一度手を振りほどこうとすれば、今度は離してくれるだろう。
だけどもう、抵抗などできなかった。
「……行かなければいいんですよ。今から王子様についていかないって言っても、ご主人様が――公爵様が何とかしてくださるでしょ？」
めったに動かないケヴィンの表情が、ほんのわずか喜びに艶めく。
「わたしにそれはできないと、君にはわかっているのだろう？」
「そう、ですけど……」
何でもかんでも理解されてしまうというのも、それはそれで何だかしゃくに障る。
面白くなくてふいと目をそらすと、ケヴィンは急に立ち上がった。
間近に迫る上質の上着に包まれた胸元に、アネットは焦って思わず体を退きかける。しかし一歩下がる前に、背中に腕を回されてケヴィンに抱き込まれていた。
頭上から耳元へ、かすれた声が降りてくる。
「これが会える最後の機会になるかもしれないというのに勝手だと思うが、願いを、一つ聞いてもらってもいいだろうか……？」

アネットはおかしくなって、小さく笑い声をもらした。
前と違って遠まわしではあるけれど、何でいちいち確認してくるんだか。
「そーいうことは、口にしなくったっていいんですよ。……ホントに嫌だったらちゃんと嫌がります」
そう言って、ケヴィンの大きな背中に手を回す。
「そうか」
アネットが背中に回した手でぎゅっとしがみつくのと同時に、アネットの背に回ったケヴィンの腕に強い力がこもった。

三章ー4

いつから、と言ったら、きっと最初からだろう。
けんめいに支えてくれる小さな体。
かいがいしい手。
文句のようなものを言いながらも、その声は責めるわけではなく優しさにあふれていて。
それらすべてに誘われて、酔いで自制が効かないまま、彼女を抱き込んでベッドに倒れた。
酔いが深かったために未遂に終わったが、もう少し飲んでいなかったらあのときに自分のものにしていただろうか。いや、そのようなことができるだけの自分が残っていたら、押し倒したりなどしない。彼女に礼を言って、それで終わりになっていただろう。
彼女は大切にしているものを落とすことはなく、ケヴィンはそれを拾うこともなければ償わなくてはならないと思うこともなく、そのまま同じ邸に住みながらも二度と会うこともなかったはずだった。
お互いに先のない想いだとわかっていたから、一度は離れようとした。だが、常にはない状況に心の戒めは解け、今こうしてここにいる。

彼女の頭に腕を貸し、抱き込むように肩に手を回して、もう一方の手で彼女の髪をもてあそんだ。綿毛のような柔らかな感触は心地よく、いつまでも触っていたい気分にさせる。この指は、ケヴィンより先にこの感触に気付いたから、あの夜ほどこうとしているかのように髪の網目に差し込まれたのだろうか。
ケヴィンのほうを向いて眠る彼女は、ランプのわずかな明かりの中、口元に笑みをたたえていた。念願のベッドに眠れて、至福を思っているのだろう。――この部屋に連れて来た時“もう一度ふかふ

かなベッドで眠れるなんて”と言われて当初の目的を忘れてやしないかと焦ったが、そのあとに彼女の表情に恥じらいが見えて、それでケヴィンは安心することができた。
ベッドの中で、彼女は今まで見せてくれたことのない表情をいくつも見せてくれた。その一つひとつがいとしくて、大事に、大切にしていきたいと心の底から思う。

窓にかけられた厚いカーテンが早朝のわずかな光を透かしはじめたころ、彼女は目を覚ました。間近にケヴィンの顔があることに一瞬動揺し、それから照れたような笑顔になる。
「おはようございます。ケヴィン様」
「……おはよう」
彼女とは今まで交わしたことのないあいさつに動悸を覚え、うろたえた。
ケヴィンはこんな些細なことにも心揺り動かされるというのに、アネットは先程の動揺が嘘のように抱き込むケヴィンの腕を押しのけて元気よく起き上がる。
その動きがしばし止まった。
痛みをこらえるように丸まった背中。
心配になりながらケヴィンは少し身を起こした。
「大丈夫か？」
「だ、大丈夫です。ちょっと痛かっただけですから」
押し殺したようなその声は、あまり大丈夫そうではない。
「すまない」
「そっ、そおいうことは言わなくていいです」
体が痛む原因は自分だと自覚するから謝るのに、彼女は何故か謝罪を拒絶する。
痛む体をかばうようにベッドから降りようとする彼女に、ケヴィンは声をかけた。
「もう少し休んでいくといい」

「そーいうわけにはいきませんよ。仕事もあるし、早く戻らないとみなさん起き出してきちゃいます」
ケヴィンに顔を向けることなく足を降ろし、体をかがめてベッドの下に落とした衣類に手を伸ばす。
長くて豊かな髪が背中から流れ落ちて、隠されていた肌をのぞかせた。カーテンを透かして入ってくる光はほんのわずかで薄暗いのに、その白さがまぶしくて、ケヴィンは思わず目を細める。
「わたしははずみで君を抱いたつもりはない。責任を取るつもりでいる」
自分の立場からすると、彼女との結婚は望めない。だが、結婚しなくとも彼女と共に未来を歩む道はある。
二年間、ずっと考えてきたことを口にしようとすると、彼女はやけに明るい口調でさえぎった。
「責任なんて、そんなこと考えないでいいんですよ」
背を向けたまま、下着を身に付けはじめる。それを止めたものか迷いながら、ケヴィンはベッドの上に体を起こした。
「しかし、子どもができていたら」
「あ、それなら大丈夫です。ヘリオット様から避妊薬をいただいてますから。安いものじゃないでしょうに、気前がいいですよね」
「ヘリオットのヤツ……っ」
ケヴィンは頭を抱えてうめいた。
なんてものを女性に渡すのか。それを受け取る彼女も彼女だ。恥じらいというものがないのか！？
すっかり身支度を整えた彼女は、ベッドに膝で乗って、素肌をさらすケヴィンの肩にシャツを羽織らせた。
「先にもらっててらっきーでしたよ。避妊薬がなければ、さすがにあたしもケヴィン様の望みを叶えて差し上げようなんて思わなかったですから」
それは関係を持ったとしても、続けるつもりはなかったということか？

ケヴィンは顔を上げて、彼女の二の腕をつかむ。せっかく彼女がかけてくれたシャツが背中をすべり落ちていったが、そんなことはどうでもよかった。
「わたしはようやく手に入れた君を手放すつもりはない」
彼女の瞳が見開かれて、揺れる。それはほんのわずかな間のことで、彼女はすぐにいつものにこにこした笑顔を見せた。
「あはは。ケヴィン様って意外とジョーネツテキだったんですね」
「笑い飛ばしてごまかさないでくれ。悩み抜いて覚悟した上で話しているんだ」
にらみ付けるようにして強く言うと、アネットはおどけた笑みを表情から消した。
残るのは、やさしいほほえみだけ。
「あたしはケヴィン様の子を産みません。愛人の座におさまるつもりもありません。だって、ケヴィン様はあたしを囲ったりしたら、もう奥さまを持とうとはなさらないでしょ？　それはダメです。ケヴィン様は公爵様のご子息で、いずれは公爵様になられるお方です。そんなお方が奥さまを持たないわけにはいかないじゃないですか。結婚なさるとしても、愛人がいたりなんかしたら、奥さまとなられる方がいい顔をなさるはずがありません。奥さまとあたしの板挟みになって、ケヴィン様が苦しい思いをなさるだけです。だからダメです」
やわらかな表情とはうらはらに、口調は頑(がん)としていて、考えを変えるつもりは一切ないという意思の強さがあった。
そんなつもりでわたしに抱かれてくれたのか……。
きっと彼女は、ケヴィンが結論にたどり着く前から知っていた。ケヴィンが彼女を選んだら、他の誰も選ばなくなるということを。
家を継ぐことを定められた貴族が結婚せずにいることは難しい。家族だけでなく親類縁者までもが相手選びと後継ぎ誕生を固唾をのんで見守り、そこに滞りがあれば我がことのように心配して世話をしようとする。自分のことでありながら、自分のことだけを考えて

いられないのが貴族社会のありかただ。
彼女はそのことまで理解し、ケヴィンの行く末を案じてくれている。

案じてくれるのなら、別のことに心砕いてほしいのに。

落胆した自分がどんな顔をしたかわからない。
彼女はなぐさめるかのように目尻を下げて、言い聞かせるようにケヴィンに言った。
「あたしはずっとあの部屋にいます。だから、奥さまをお持ちになるまでは部屋に入れて差し上げますから」
おどけて言う彼女の目をじっと見つめていたケヴィンは、視線をそらすように目を閉じて小さくため息をついた。
見つめ返してくる彼女の瞳は揺るぎがなく、簡単には説得に応じてくれそうもない。
それに時間もない。出立の日は迫っている。
「……渡した指輪は、まだ持っているか？」
「え？　そりゃあもちろん」
「何かあったら、それを持ってこの邸から西に二ブロック行った先にある邸に向かってくれ。そこで指輪を見せれば便宜を図ってもらえるよう、話をつけておく」
「……わかりました」
少々ためらいを見せたが、彼女はうなずいてくれた。

それにほっとしていると、不意に彼女の視線が泳ぎ出す。
いぶかしく思い目をすがめると、彼女は横に視線をそらして言った。
「あの、できたらシャツを着てもらえませんか？　さっきからその、目のやり場にこ、困ってるんです」
「――これは失礼した」

頬を赤くする彼女につられて目元を赤くしたケヴィンは、背後に落としてしまったシャツを拾い、そでに腕を通して胸板を隠した。

三章ー5

クリフォード公爵邸の広間では、この日華やかな夜会が開かれていた。

再び戦場に赴くことになったシグルドとケヴィンのための夜会だ。決して狭くはない場に親族や派閥の貴族たちがひしめくように集まり、ろうそくを立てられたシャンデリアに真昼のように照らされている。

夜会も終盤に近付き、招待客と一通りのあいさつを終えたところで、シグルドは派閥の貴族たちに囲まれた。

「シグルド殿下のご活躍はちくいち耳にしておりましたぞ。連戦連勝、まだ十八歳であらせられるのに大したものです」

「ありがとうございます、クレンネル侯爵。これも指揮官の心得を教えてくれた前総指揮官と、作戦を支えてくれた部下たちのおかげです。兵一人ひとりが国の財産と考えれば、一兵卒もむやみに犠牲にできません。できるだけ犠牲を減らす無難な指揮をとり続けたことが、結果的に連勝をもたらしたのだとわたしは考えています」

「若いのにしっかりとした意見をお持ちだ。そうです。国民は国の財産。これをおろそかにして国は成り立ちません。そして人心を集めるには、人を消耗品ととらえないことです。大勢の人間をまとめようとすると人を数で捉えがちになりますが、その一人ひとりがかけがえのないただ一人と理解する努力を怠ってはなりません。理解すれば民は国を支える大きな力となります。かの御仁たちはそういうことをわかってらっしゃらない。富を優先して人をないがしろにすれば、人は国のために、領主のために働かなくなる。それがどれほどの損失になるかわかっていない議員が多いことが嘆かわしいです。今回も殿下のお力になることができず、申し訳ない」

「気に病まれることはありません。クレンネル侯爵のような方が議会に残ってくださったことが、わたしにとって救いです。議会がか

の御仁たちのような者だけになってしまったら、わたしは戦う意義を失ってしまいます。あの者たちの富を手に入れるためではなく、あなたのような方々の安寧のために、わたしは戦ってまいります」
「嬉しいことをおっしゃってくださる。議会に残るという話で思い出したのですが、……」
シグルドとクレンネル侯爵の話にみな聞き入っている。
ケヴィンは周囲の貴族たちに「失礼」と声をかけながら、その輪を外れた。
できたら今夜中に会いたい人物がいる。
どこにいるかと見渡していると、着飾った女性たちと目が合い、彼女たちが近付いてきた。
「こんばんは。よい夜ですわね」
話しかけてきたのは縁戚にあたるホノリウス侯爵令嬢だ。名前はジェイン。こげ茶色の髪を頭の後ろで束ね、ゆるやかな巻き毛を何本かの束にして垂らしている。シャンデリアに乱反射する光が令嬢を四方八方から照らして、瞳の茶色の虹彩もよく見える。三年前の夜会では社交界にデビューしたてで少しおどおどした感じがあったが、今では堂々としたものだ。
「こんばんは。そうですね。お会いするのは三年ぶりですか。三年前はドレスに着られている様子でしたが、今宵はとても素敵に着こなされておいでだ」
「あ、ありがとうございます……」
ほめたのに、侯爵令嬢はほほえむ口元を何故かひくつかせた。
「あの、よろしければ戦地でのお話をお伺いしたいですわ。ケヴィン様のご活躍とか……」
「戦場とは凄惨なものです。女性に話せるようなことはありません」
男性であっても、知らずにいられたらそれに越したことはない。
気を遣ったつもりなのに、何故か令嬢は不満そうで、笑顔をひきつらせる。別の令嬢がなおも尋ねてきた。
「で、ですからケヴィン様のご活躍を」

話せることもないのに、これ以上の会話は互いにとって無意味だ。ケヴィンも今はすることがある。
令嬢の話をやんわりとさえぎった。
「戦場にて書記官が活躍できる場などありません。申し訳ないが、失礼していいだろうか？　人を捜しているので」
「あ、はい……」
そこまで言うと令嬢たちもようやくわかってくれたらしく、ケヴィンの目の前から数歩下がった。
ケヴィンは軽く頭を下げて令嬢から離れ、もう一度会場を見回す。
するとようやく会場の端にいる目当ての人物と目が合って、ケヴィンは真っ直ぐその人物に向かって歩いていった。

途中、給仕の者からグラスを二つもらうと、壁際に立つ目当ての人物に一方を渡し、その隣に立つ。
四年ほど前に爵位を継いだ、ケヴィンの従兄弟のアランデル侯爵ハンフリー。ケヴィンの八歳年上の従兄弟で、青みがかった銀髪に薄青色の瞳をした青年だ。邸が近いこともあり、幼少の頃は互いの邸を訪問しては、兄弟のように過ごした。シグルドが邸に引き取られケヴィン自身が兄の役目を担うようになると、ハンフリーも社交界デビューをしたり官職に就いたりと忙しくなり、会う機会は少なくなっていった。しかし親交がなくなったわけではなく、近況は耳にするし会えば気安く話もできる。ただ、昔のように兄と弟のような関係でなくなっただけだ。
ハンフリーは隣に立ったケヴィンに、ちらっと苦笑いを向けた。
「おまえは相変わらずだな。あんなに邪険にしなくてもいいだろうに。ここまで話し声が聞こえたぞ」
「？　邪険にしたつもりはありませんが？」
普通に会話していただけなのに、何故そのように言われなければならないのか。
ケヴィンが眉をしかめると、ハンフリーはあきれたように肩をす

くめた。
「あれはほめ言葉なんかじゃないぞ。三年前はひどい格好だったと言っているようなもんじゃないか」
「ですが、今はドレスも十分に着こなし、たった三年で見違えるようだとほめたつもりなのですが」
あきれられてしまうほどひどいほめ方だったろうか？
眉間にしわを寄せて悩んでいると、ぽんと肩を叩かれた。
「……わかってるよ。おまえは正直なだけなんだよな。まったく、クリフォード公爵の心配ももっともだ。おまえは無意識に女性を振り倒してるんだからな」
“振り倒す”？　振った覚えどころか、言い寄られた覚えもないのですが？」
「うんうん、わかってるよ。そんな鈍感なところを、令嬢方はクールだとかストイックだとか言ってのぼせるんだよな。で、自分のアプローチが通用しないことに身もだえる、と」
ケヴィンはむっとした。
自分が鈍感だと思ったことはない。言動や表情から相手の考えを読みとることもするし、空気を読むこともできる。ハンフリーやヘリオットといったごく一部の人間は、ケヴィンにそうしたことができないと言わんばかりに意味不明な言葉を口にする。
馬鹿にされているようで不本意だが、今は相互理解に時間を割いているわけにはいかなかった。
表情を改め、ケヴィンは話を切り出した。
「わけのわからない話は後回しにさせていただいて、わたしの話を聞いてもらえないでしょうか？　お願いしたいことがあります」
ケヴィンの真剣さに気付いたのか、ハンフリーも表情を改める。
「珍しいな。おまえが頼みごとをするなんて。――だが、手短にしてくれよ。主役に話しかけられていると目立つからな。おば様方につかまって説教されるのは勘弁だ」
本気で勘弁してほしいと思っている口ぶりに、ケヴィンは思わず

小さな笑いをもらした。
「おば上たちもあなたを心配してのことでしょう。ですがあなたは、ご自分で選び取ったことに、後悔をしていないのでしょう？」
「まあ、そうだけどさ」
そう答えて苦笑するハンフリーの表情は、どことなく晴れやかだ。
彼とは事情が違うけれど、障害を乗り越えても手に入れられるしあわせがあると示してもらえることは、ケヴィンにとって救いになる。
「わたしの、母の形見を覚えていますか？」
左の小指を見せれば、ハンフリーは目を丸くした。
「失くしたのか？」
ケヴィンは正面を向き、ハンフリーにだけ聞こえるよう声をひそめた。
「そうではありません。あの指輪を持ってあなたの邸を訪れる女性がいたら、あなたのところで保護していただきたいのです」
「おまえ……」
ハンフリーの表情が険しくなる。
“謝礼”も考えています。あなたにとっても悪くない話だと思います」
ぼかした話し方をしたが、彼ならこれだけで理解してくれるだろう。ハンフリーは壁に背をもたれさせ、ケヴィンから渡されたグラスの中身を一口飲んでため息をついた。
「おまえがそういう道を選ぶとは思わなかったよ。公爵には？」
「まだ話していません。片手間に話せることではありませんので」
「そうだな。だが、“現れたら”などと言っていないで、遠征前にわたしに預けていったほうがよくはないか？」
「……それこそ片手間にできることではないんです」
ケヴィンも今すぐ彼女をハンフリーに預けたいところだが、妙に頑固なところのある彼女に無理強いをすれば、いくら好意をもってくれていても反発をくらうだけだろう。

守るために急ぎたい気持ちはあるが、彼女の心を一番に大事にしたい。
そうしたケヴィンの気持ちも察してくれたのか、ハンフリーはくつくつと笑いだした。
「おれもおまえも、何でわざわざ大変な道を選んでしまったんだか」
ケヴィンからも失笑がもれる。
「それこそ“運命”というものでしょう」
「……そうだな」
感慨深げにつぶやくと、ハンフリーは小さなグラスにわずかに残っていた酒をあおった。

三章ー6

責任を取る、と言われて、アネットは少しがっかりした。
好きだから側にいてくれって、言ってくれたらよかったのにな……。
そう言われたとしても、考えを変えるつもりはなかったけど。
ケヴィンは公爵家の跡取りだ。結婚して跡取りをもうけ、家を守っていく義務がある。
その義務を放棄させるわけにはいかない。アネットを拾ってくれたクリフォード公爵に申し訳が立たないし、何よりケヴィンに貴族として歩むべき道を踏み外して不幸な目に遭ってもらいたくない。
それは最初からアネットが願っていたこと。
これだけは絶対譲れない。

あのあとあいさつに一度訪れたきり、ケヴィンは再び戦地へと旅立っていった。
アネットは仕事をしながら心の中でケヴィンを見送り、やがていつもの日常に戻っていく。

そのはずだった。

「どうしたの？　アネット」
歳月が流れうわさがいくらか薄れたことと、使用人たちに多少の入れ換わりがあったこともあって、アネットは再び仕事仲間たちに溶け込みつつあった。
声をかけてきたのは、最近新しく下働きになった少女だ。アネットは声をかけられて、食事の手が止まっていることに気付いた。

「な、何でもない」
パンをちぎって口に運ぶけれども、なかなか飲み込むことができない。
「あんまりのろのろ食べてると、食べる時間なくなっちゃうよ」
わかってはいるけど、これ以上は食べられそうにない。
「あんまりお腹空いてないんだ」
「じゃあ、あたしもらっていい？」
食いしん坊の新入りは、早くもアネットの手元をねつらい始める。
アネットは苦笑して、パンの皿とスープの器を新入りのほうへ押しやった。
「うん。後片付けよろしくね」
「はぁい」
アネットは席を立って下の使用人の休憩室を出た。廊下を少し進むと、我慢できなくなってきて、アネットは小走りに洗濯室から裏庭に抜け、庭木の影に屈みこむ。
胃の底からせりあがってきたものは、透明な液体とその中にまじる、先程食べたわずかな昼食だけだった。
ここ二日、毎食こうだ。食べ物のにおいは何とか我慢しているが、口に入れると吐き気が耐えがたくなってくる。それでも多少は食べなくてはと頑張るのだが、昨日からは我慢できずに吐いてしまっていた。
吐き気は二週間以上前からあった。何か悪い病気にでもかかったのかもと思うのと同時に、もう一つの可能性も思い浮かんで怖くなる。
ちゃんと教えられた通りに飲んだじゃない。大丈夫、大丈夫……。
自分に言い聞かせても、不安は消えない。
あれから三カ月が経とうとしている。うわさから知り得た話からすると、兆候が出てくるのは今の時期だ。
ヘリオットの言葉を思い出す。よく効くと評判の薬だけど、絶対に効くとは限らない、と。

不安が、アネットの心身をさいなむ。
今まで狂うことのなかった月のものが、あれ以来やってこない。いつの間にかかばうように手を当てるようになった下腹部。
ほんとうに、この中にケヴィン様のお子が……？
吐き気が落ち着いたところで井戸から水を汲んで口に含み、先程吐いたものの上に口をすすいだ水を吐き出した。それを三回繰り返し、ほっと息をつく。
土をかけておかなきゃ……。
土を掘れそうな道具を取りに行こうと庭木の影から出たところで、アネットはぎくっとした。
井戸の脇に、さきほどまではいなかった女使用人頭のオルタンヌの姿があった。
「こんにちは、オルタンヌさん。こんなところまで来て、どうしたんですか？」
動揺を隠して、いつものようにあいさつする。
吐いているところを見られたとは限らない。もし妊娠してなかったとしても、体調が悪いことで心配をかけたくない。
「最近調子が悪いようね。あまり食事を食べていないと聞いたわ」
誰だろう？　わざわざオルタンヌさんに言うなんて……。
そんなことより、今はごまかすほうが先だった。アネットは能天気な笑みをつくる。
「心配かけちゃってすみません。どっかで変なものを食べちゃっただけだと思います。ほら、あたし食いしん坊だから」
笑い飛ばそうと思ったのに、食べ物のことを思い出したとたんまた吐き気がこみ上げて、耐えきれなくなって庭木の影にかけ込んで嘔吐（えず）いてしまう。
苦しさに、アネットが下を向いたまま肩で息をしていると、その背をオルタンヌがさすってくれた。

「アネット。あなた、妊娠しているの？」
唐突に切り出され、アネットは血の気が引く思いがする。とっさに振り返り笑い飛ばす。
「や、やだなぁ。相手もいないのに、そんなわけないじゃないですか」
もしかしてバレてる……？
どくんどくんと、心臓が嫌な鼓動を立てる。ごまかさなくちゃと思うのに、笑顔はひきつり、冷汗が流れるような思いがする。
少しの間、黙ってアネットを見つめていたオルタンヌは、目を伏せてため息をついた。
「あなたは幼い頃から病気一つしない元気な子だったわ。それに、あなたの今の様子には心当たりがあるわ。わたしもそうだったから」
言い切られてしまうと、返答のしようがなくなる。
オルタンヌの中では、もはや“事実”なのだ。その思い込みをくつがえせるだけの言葉を、アネットは持ち合せていなかった。
「相手は誰なの？」
答えられるわけがない。アネットはオルタンヌの視線の避けてうつむいてしまう。
「責めているわけではないの。相手との合意が得られれば、結婚だってできるわ」
結婚できる相手じゃない。名前を打ち明けるわけにもいかない。かといって適当な人の名前を出せば相手に迷惑をかけるし、見ず知らずの相手だと言ってオルタンヌに軽蔑されるのも怖い。
アネットの二の腕を、オルタンヌは両手でつかんだ。
「結婚が難しい相手なの？　そうであっても何とかしてあげるから、言ってちょうだい。……具合が悪くなったのが最近なら、相手と関係を持ったのは二、三カ月前よね？　……まさか」
顔を下げてアネットの顔をのぞき込んでいたオルタンヌは、何かに気付いて顔色を変える。
アネットはとっさに叫んでしまった。

「違います！　ケヴィン様じゃありません！」
言ってしまってから、慌てて口を押さえる。これでは相手が誰かを告白してしまったも同然だ。
オルタンヌは目を見開き、息を飲む。
今更遅いと思いながらも、アネットは言い訳を口にしていた。
「そんなわけないじゃないですか。あんな、ほんの少ししか邸にお戻りになられなかったのに、ケヴィン様にあたしに会いに来る暇なんかあるわけが」
「ケヴィン様なのね？」
「違います！」
けんめいに否定するけど、オルタンヌはアネットの二の腕から手を離し体を起こした。
「あなたとケヴィン様とのうわさは耳に入ってきていたけど、それはあなたを不用意にケヴィン様のところへやってしまったせいだと思って申し訳なかったの。……でも、うわさは本当だったのね」
そう言われてしまえばアネットこそ申し訳なくて、ますますうつむくしかなくなる。
「今日は旦那様が邸にお戻りになられないから、明日お話しましょう。今日はひとまずビィチャムさんに言って」
アネットは慌てて顔を上げた。
「お願いです、待ってください！　本当に違うんです！」
「どうしてそんなに否定するの？　あなたにとって悪くない話だわ。愛人になれば、何不自由のない生活が送れるようになるのよ？　旦那様とケヴィン様なら、きっとあなたを粗略に扱うことはないわ。前にも言ったでしょう？　ケヴィン様のお相手をするならその後の責任も取ると。ビィチャムさんも、そのつもりであなたにお相手を頼んだのだから、決してあなたに悪いようなことはしないわ。だから安心して」
愛人という言葉に誘われて、決意が揺らぎそうになる。
でも。

アネットはあきらめたように笑って、オルタンヌを見た。
「……やっぱりダメです。もしあたしがケヴィン様のお子を妊娠しているとして、それをケヴィン様が知ってしまったら、ケヴィン様はきっと生涯結婚されなくなってしまいます」
まさか、という顔をするオルタンヌにアネットは言い募る。
「あの方は貴族の義務を重んじる方ですけど、それ以上に情の深い方なんです。妻にできない女を側に置いて、その上で奥様をめとることなんてできない。貴族で、しかも公爵家の跡取りが結婚しないのでは、世間体がよくないんでしょ？　あたしは、あたしのせいでケヴィン様が不幸になるのを見たくないんです……っ」
「アネット……」
オルタンヌは言い聞かせるように、アネットの肩に手を置いた。
「何にしても旦那様に言わないわけにはいかないわ。明日旦那様がお帰りになったらこの話をします」
「……はい」
アネットは観念してうなずいた。
「どうしてあなたばっかり、こんな目に遭うんでしょうね」
ため息交じりにオルタンヌは言う。
「本当ならわたしの養女として、それなりに苦労のない生活ができたはずなのに。わたしがあなたを守り切れなかったばかりに、つらい思いをさせてしまった」
悲しそうな顔をするオルタンヌに、アネットはほほえんで首を横に振った。
「それはもう気にしないでください。オルタンヌさんに育ててもらえて、あたしらっきーでした。みなしごが公爵邸で働く上級使用人の養女なんて、あつかいが良すぎたんですよ。だからよかったんです、これで。今もこうして心配してくださるし、あたし、十分しあわせなんです」
これは本当の気持ち。
クリフォード公爵邸の前に捨てられて、公爵に拾われて、オルタ

ンヌに預けられて育ててもらって、ケヴィンと出会うことができた。
これ以上の人生なんて、アネットには望むべくもない。
しあわせそうにほほえむアネットを見て、オルタンヌは目尻に涙を浮かべた。
「あなたはほんとうにいい子ね。わたしの娘ではもったいないくらいだわ」
「そう言ってもらえてうれしいです」
にっこりと笑うと、オルタンヌもほっとしたように笑みをこぼした。
「今日はもう、仕事をしなくていいわ。ゆっくり休みなさい。明日旦那様にお話して、それからお医者さまを呼んでもらいましょう」
「はい」
アネットは素直に返事をする。

けれども、アネットはもう決めていた。
ケヴィンは頑固で、一度決めたことは貫こうとする。
撤回させるには、決めることそのものをできなくするしかないだろう。

そのためには、選択肢そのものをなくしてしまうしかない。

ケヴィン様、ごめんなさい。ずっとここにいるって言ったのに、約束を守れなかった……。
涙をこらえ、アネットは心の中でつぶやく。
しあわせでいて。不幸になんかならないで。
それだけが、アネットの望み。

翌日、クリフォード公爵邸の中に、アネットはいなかった。
アネットが部屋にしている洗濯室隣の物置には、すっかり繕われ

た洗濯物がきちんとたたんで積み上げられ、わずかな私物はどこにも見当たらない。

オルタンヌは帰邸した公爵に事情を話し、公爵は人を出して方々を探させたのに。

邸の前に捨てられたため身寄りがなく、ずっと働き通しで邸外に知り合いがいるとも思えず。

これまで働いてきた給金は、使用人の財産を管理しているビィチャムの手元から引きだされることがないまま。

アネットは誰にも知られず、忽然と姿を消した。

第三章　完

四章ー１（前書き）

年齢を間違えていました。第三章の段階で、シグルド１８歳になります。そのため、第三章は第二章ラストから三年後ということになります。

修正いたしましたが、まだ修正漏れがあるかもしれません。お気づきになられましたらご一報いただけると助かります。

四章―1

再度戦場に赴いたシグルドに遅れること一年。ようやく準備が整えられ、国王は新たに集められた大勢の兵士をひきつれて戦場に向かった。

そして初戦、国王は強引に軍を進め、敵の陽動作戦に嵌(は)まって戦死する。

国王、そして王太子の死に混乱する軍を、シグルドは何とかとりまとめ、防衛線まで撤退させた。

その後、王位に就くため一度王都に戻り、シグルドは戴冠後隣国から軍を退くことを宣言、すぐに戦場に戻ってこれを断行する。軍は国境まで撤退し、国境を守る兵士を残して、侵略のために膨れ上がった軍は解体された。

二ヵ月半で戦場から舞い戻ったシグルドは、今度は王太子の婚約者であったエミリアを王妃にすると言い出す。貴族たちは反対した。王太子との婚約期間の長かったエミリアは、結婚式を挙げていなくともその扱いは実質王太子妃であったし、婚約者が亡くなったからといってその弟に嫁ぐのでは外聞が悪い。それにこれまでシグルドを排除しようと躍起になっていたラダム公爵の後見を持つエミリアが王妃となれば、シグルドはラダム公爵を権勢の座から退けづらくなる。それがどのような不利をシグルドにもたらすか理解した上で、シグルドはなおエミリアを王妃にと望んだ。

そのことについては心当たりがあった。十年ほど前のあの時、どうしてきちんと問い質さなかったのかと後悔するが、もう遅い。

シグルドは結局、議会の承認を得ないままエミリアを王妃にした。

そのことで、味方であった貴族たちにも反感を持たれてしまう。

だが、シグルドならば反感も押しのけられる。ケヴィンもこの時はそう思っていた。

シグルドの王妃の件が一段落ついたところで、ケヴィンは自分のために動き出す。

――・――・――

戦場から戻ったその日の夜、ケヴィンはアネットの部屋を訪れた。

しかし洗濯室隣の物置は、そんなに遅くない時間であったのに明かりが灯っておらず、人の気配がないことに気付いてそっと扉を開いてみれば、彼女がベッドにしていたというベンチの上には荷物が雑多に置かれて埃をかぶり、長らく誰も住んでいなかったことは容易に察せられた。

久しぶりの逢瀬がかなわずぼうぜんとしたケヴィンの頭によぎったのは、屋根裏部屋に空きができて移ったか、アランデル侯爵ハンフリーの元に行ったかどちらかだった。

そこでケヴィンは、新国王シグルドの側近として戦後処理に忙殺される中、何とか時間を作ってアランデル侯爵邸を訪れた。

従兄のハンフリーは、ケヴィンを応接室に通しソファに座ってこう言った。

「使用人たちにもしっかりと言いつけておいた。指輪を持って現れる者がいたら、丁重に招き入れわたしに連絡するようにとね。だが、指輪を持った女性は現れなかった、――そのかわり、君の邸から使いが来たよ。行方不明になった使用人を捜していると。薄茶色の髪に緑の目をした女性だそうだ」

色の話をされても、ケヴィンにはよくわからない。彼女と会うのはいつも暗い時で、ランプの赤い光は本来の色を隠しおおせてしまう。だが、探されていたのは彼女だと思って間違いないだろう。

ハンフリーを訪ねた夜、ケヴィンはあえて夕食の席を選ばず、父

トマスの部屋に移動して話を切り出した。
「おまえの話を聞く前に、わたしの話を手早く済ませてしまおう」
トマスはそう言って、執務机の引き出しから一枚の紙を取り出した。
真っ白で厚手の上質な紙の上には、ケヴィンも面識のある令嬢の名前が書き連ねてある。
「おまえもそろそろいい歳だ。伴侶とする女性をなかなか見つけられないでいるようだから、わたしが適切な令嬢たちを身つくろっておいた。おまえが望む相手がいるのならできるだけ希望に沿ってやろうと思うが、居ないのならばその中から選ぶように」
「父上。そのことでお話があって来たのです」
ケヴィンが切り出そうとすると、トマスはそれをさえぎって言う。
「下働きの娘と結婚したいと言うのなら、それは駄目だ」
執務机に両手を置いて、椅子に座ったトマスのほうへ身を乗り出す。
「やはり父上が彼女を捜していたのですね？　彼女は今、どこにいるんです？」
肘かけに肘を突き両手を組んだトマスは、目を伏せてため息をついた。
「結婚はさせてやれずとも世話くらいはしてやろうと、手を尽くして捜したが見つからなかった。捨子で身寄りがなく、邸の外に知り合いがいた様子もなかったらしい。そんな娘が金も持たずに一人で邸を飛び出して、おまけに身重であったというのに、今も無事でいるとは到底思えん」
「――！　彼女は妊娠していたのですか！？」
やっぱりヘリオットは信用置けない。あの薬は効かなかったじゃないか！
意気込んで聞けば、トマスは伏せていた目を上げて、厳しいまなざしをケヴィンに向けた。
「おまえの子だそうだな。使用人頭のオルタンヌから話を聞いた。

相手はおまえではないと、懸命に否定したそうだ。もしおまえが愛人を持ったら一生結婚しないと言い切ってね。それでオルタンヌはわたしの帰宅を待って報告をすることにし、その間に娘は行方をくらましてしまった」
ケヴィンはうつむき、下唇をかみしめた。こんなことになるなら、彼女の気持ちを優先するなどと考えたりせず、最初からハンフリーに預けていくべきだった。
「おまえの心をよく察する、いい娘だったようだな。身分がなかったことが残念でならないよ。――おまえのためを思って姿を消した娘の気持ちを汲んで、そろそろ身を固めなさい」
ケヴィンはトマスの顔を見ないまま、差し出された紙を受け取った。
「しばらく、考える時間をください」
「ああ。どのみちもっと落ち着いてからでないと結婚式は挙げられまい。生涯寄り添う相手だ、よくよく考えて選ぶといい」
ケヴィンは無言で頭を下げて、トマスの部屋をあとにした。

きっちり締めた扉にもたれ、目元を片手で隠して宙を仰いだ。もう一方の手はたった今受け取った紙を握りつぶしている。
考えに考え抜いた末に出した結論を、父に告げることはできなかった。
彼女がいない。
その事実が、ケヴィンの決意を水泡と化し、心を打ちのめす。
何故一人で行ってしまった？　どうして頼ってくれなかった？
わたしはそんなにも信用されていなかったのか？　自分のしあわせは自分で選び取ることができないと？
「ケヴィン様……」
遠慮がちに声をかけられて、ケヴィンはそばに人がいることに気付いた。目元を覆う手を外しのろのろと顔を向けると、そこには思い詰めた表情をした、こげ茶色の髪に白髪の混じる女性が立ってい

た。
オルタンヌだ。
「……わたしの部屋に来てくれ」
もたれていた扉から体を起こし、ケヴィンは重い足取りで歩き出した。
「……わたしに、話があるのだろう？」
扉が閉まる音を背後に聞き、机の側に立ったケヴィンは振り返らずに問いかけた。
振り返って、言葉を重ねた。
「遠慮なく言うがいい」
「では申し上げます。何故戦場に行かれる前に、あの子の愛人としての立場を整えてやってくださらなかったのですか？　関係を持つだけ持たれてあとは放置では、あの子があんまり哀れです。わたくしに一言言ってくだされば、ご主人様に申し上げて手配させていただきましたのに！」
淡々としたオルタンヌの口調は、ケヴィンを責めて次第に激しくなっていった。
言葉が切れたところで、ケヴィンは口を開く。
「すまなかった。おまえに頼めば父の耳に入れるしかなくなると思って、言えなかった。父が彼女をどう扱うかわからなかったから、うかつに明かせなかったんだ」
時間がなさすぎた。父に彼女を頼んで、もし自分の手の届かない遠くにやられてしまったらと思うと、恐ろしくて言い出せなかった。
その可能性に気付いたのか、オルタンヌは「あ……」と呟きをもらし口元を押さえる。
「それに彼女にはわたしの、母の指輪を託してあった。何かあった時にはアランデル侯爵の邸に行って指輪を見せれば、便宜を図ってもらえるように頼んであった」
だが、彼女はアランデル侯爵邸には行かなかった。

何を思い、どこへ行ったのか。
過ぎるほどにわかるからこそ、やりきれない。
オルタンヌは頭を下げた。
「申し訳ありません。差し出たことを申しました。――あの子が、愛人になることを拒んだのですよね？」
気まずく思いながら、ケヴィンはオルタンヌから目をそらして横を向く。
「時間がなくて、説得しきれなかった。……気が急いてしまっていたんだ。彼女が誰かのものになる前に、と。だが、きちんと同意を得られないまま、我が物にするべきではなかったと反省している」
さきほどの父の話を聞いた後では、後悔はさらに増す。父がああいう考えでいると知っていれば、オルタンヌに任せることもできただろうに。
ケヴィンは横を向いたまま、うつむいて額に手を当てた。
彼女は今、どうしているのか。
子どもは無事生まれたのか。
生きているのか、それとも。
「あの……」
オルタンヌがおずおずとした声をもらす。
「さきほどケヴィン様は、アネットに奥様の指輪をお持たせになったとおっしゃいましたか？」
「……ああ」
何を話そうというのか、不思議に思って目をやると、オルタンヌは確信を持ったように表情に力を取り戻し、毅然と答える。
「あの子の使っていた部屋から、指輪は見つかりませんでした。持って出ていったと見て間違いないでしょう。指輪を持って出ていったのなら、あの子はきっとどこかで生きています」
「何故そのように言える？」
「あの子はケヴィン様の大事な指輪を預かっておきながら、無責任な真似はいたしません。死を選ぶつもりだったのでしたら、この邸

に置いていったはずです。指輪を換金したとも思えませんが、何らかの方法で今も懸命に生きているはずです」

最悪を想定し、よどんでいたケヴィンの心が晴れていく。

そうだ。母の形見だと聞いたとたん、よけい遠慮してケヴィンに返そうとしていた。必要になったら換金してもいいと言ったのに、それすらもその場で固辞して。

そんな彼女が、ケヴィンに指輪を返さずにいなくなるわけがない。

あるいは自身の守り袋と同じように、我が子に託すつもりで。

あきらめなければ、再会できるかもしれない。

希望が見えてきた。

四章―2

身寄りがなく、邸外に知り合いがいないと思えば、アネットが頼れる先は見当もつかないだろう。

父が捜し出せなかったのは、ケヴィンを介して彼女が知り合いを得ていたことまで突きとめられなかったからだ。

事情に通じ、この二年王都に残っていた人物はただ一人。

焦る気持ちを抑えながら遠縁のコットニー伯爵家を訪れ、通された応接室でソファに腰掛け面会を求めた人物が現れるのをじりじりと待った。

その人物はばたばたと廊下を走ってきてせわしなく扉をたたき、ケヴィンが返事をしないうちに勢いよく入ってきた。

「ケヴィン様！　お久しぶりです！」

二十歳過ぎだというのにいまだ十代と言っても差し支えなさそうな童顔をした、明るい茶色の髪をしたロアル青年は、扉を閉めるのもそこそこに、ケヴィンの側まで駆け寄ってきた。

ロアルは五年前、ケヴィンが戦場に行くことになった際に従者の任を解かれ、現在ここコットニー伯爵家で働いている。

……この落ち着きのなさを見るに、かつてのダメ従者ぶりからろくに成長できていないのではと想像がついて、ため息をつきたくなる。

ロアルは貴族のはしくれとはいえ、一介の従者に過ぎない。他人の面倒を見れるだけの立場も財力も持ち合わせていなかったが、彼女が頼れる人物といったらロアルしか思いつかなかった。だが、こんなロアルの様子を見ていると、彼女を保護できたとは到底思えない。

見当違いなところに来てしまったかと落胆するケヴィンをよそに、

ロアルは両手を胸の前で組み合わせて感激に目をうるませる。
「迎えに来てくれたんですね！」
わけのわからないことを言われて、ケヴィンは眉をひそめた。
「迎え？」
「もう戦場に行かなくてもよくなったから、また僕をケヴィン様の従者にしてくださるんですよね？」
「いや、その予定はない。そんなことより聞きたいことがある」
喜々として表情を輝かせていたロアルは、ケヴィンの返答を聞いてたちまち情けない顔になった。
「“そんなことより”ですか……」
ロアルはがっくり肩を落とす。
ケヴィンの従者になったことで、近衛隊士たちにからかわれたり、たかられたりと散々な目に遭わされたはずなのに、本気で戻りたいと思っているのだろうか。ケヴィン自身もロアルの扱いに困り、ろくな仕事を任せなかった。仕事を与えられることなくただついて回るのはつらいはず。ケヴィンがロアルの立場だったら、戻って来なくていいと言われたら喜ぶところだ。……ロアルを見ていると、言っては何だが、バカ犬になつかれたような気分になってくる。
何事にもめげることのない気質も健在なのか、ロアルはすぐさま気を取り直した。
「聞きたいことって、アネットさんのことですか？」
「知っているのか！」
思わず立ち上がって問うと、ロアルは困ったように眉尻を下げる。
「すみません。それは言えないんです」
「言えない？」
奇妙な物言いに、ケヴィンは眉をひそめる。“知っているか”と聞いたのに“言えない”と返すその意味にたどり着く前に、ロアルはこの場にそぐわない微笑みを浮かべて言った。
「アネットさんとの約束ですから」
考えてみれば、ロアルも父クリフォード公爵が彼女を捜していた

ことは知っていただろう。なのに知らせようとしなかったのは、彼女に口止めされていたからということか。
「彼女は無事なのか？」
「ええ。お子様も無事に生まれて、元気に育っています」
子ども――。
ケヴィンは息を飲む。
一生を添い遂げたいと思った相手との間に生まれた。最初に聞かされたときは呆然とし無責任なヘリオットに腹を立てるばかりだったが、実際目にしているというロアルから聞かされると、実感がわくとは言い難いものの、にわかに幸福感が心にあふれ、同時に側にいられなかった寂寥感と罪悪感にさいなまれる。
喜びを分かち合いたいと思ってはくれなかったのか。子どもはどのように生まれ、どんなふうに育っていっているのか。一人で産んで育てて、ケヴィンがきちんと保護を頼んでいかなかったばかりに苦労をさせてしまって……。
「そうか……」
思いが入り乱れて形にならず、口にできた感想はこれだけだった。それでも無事と聞けたことで幾分安心したケヴィンは、ロアルに向けていたきつい視線をやわらげる。
自分の感情は頭の隅に追いやり、ケヴィンは改めて問いかけた。
「それで、彼女は今どこにいる？」
ロアルは肩をすくめて苦笑した。
「ですからそれは言えないんですって。たとえケヴィン様が僕を従者に戻すと言ってくださっても言うわけにはいきません」
「もっといい条件を出せば話すと言うのか？」
「ひどいなぁ。ケヴィン様が僕に提示できる条件の中でも、最高のものを言ったつもりなんですけど」
あからさまにがっかりした様子で肩を落とすロアルに、ケヴィンはぴしゃり言い放つ。
「おまえの無駄口につきあっている暇はない。わたしはどうしても

彼女と会って話をしなくてはならないんだ」
　にらみつけてやると、ようやくケヴィンのいらだちに気付き、ロアルはふざけた態度を改め申し訳なさそうに答えた。
「それは絶対言えません。僕、アネットさんに脅されてるんです。今いる場所を誰かに話したりしたら、その場所からも逃げ出すからって。身寄りのないアネットさんがそこからも逃げ出したりしたら、次に頼れるあてなんてない。路頭に迷ったりしたら、アネットさんは、お子様も生きていけない。だから僕はずっと口をつぐんできたんです」
　バラしたらその場からも逃げ出す、か。彼女なら言い出しそうなことだ。
　彼女の考えは手に取るようにわかりやすい。
　自分を押し殺し、他者ばかりを優先する。
　だが、わかっていない。少なくともケヴィンはそのようなことを望んでいないと。
「逃げ出す隙を与えずにつかまえるつもりだ。わたしには彼女を納得するまで説得する用意がある。決して彼女の意に染まぬことを強要するつもりはない。だから教えてくれ。――頼む」
　ケヴィンはロアルをじっと見つめたが、ロアルは瞳を揺らすことはなかった。
「ダメです。アネットさんの信頼を裏切るわけにはいきませんから」
　ロアルも存外頑固であるらしい。こういう目をした人間の説得は並大抵の努力ではかなわないと学習しているケヴィンは、あきらめて小さくため息をついた。
　確認が取れただけでも収穫だ。あきらめずに探し続ければいつか必ず見つかる。
「わかった。邪魔をしたな」
　ロアルの横をすり抜けて、ケヴィンは出口へと向かう。休暇はまだ半日残っている。この先いつ休暇が取れるかわからないから、時間は大切にしなくてはならない。

気持ちを新たにしてドアノブに手をかけようとすると、ロアルがわざとらしくしゃべりはじめた。
「僕、たまにアネットさんの様子を見に行ってるんですよね。最近ごぶさたしてたから、近いうちに外出の許可をもらって見に行ってこようかなぁ」
驚いて振り返れば、ロアルは悪びれない顔をしてにこっと笑う。
「居場所は口にしてませんよ？　アネットさんとの約束ですからね。居場所だけはぜーったいに言いません。ケヴィン様も僕が教えたなんて、間違ってもアネットさんに言わないでくださいよ？」
まだるっこしいことをする……。
ケヴィンは内心あきれつつ、口の端をわずかに上げた。
「わかった、感謝する。――この礼とは言わないが、伯爵におまえを返してもらえるよう話をつけよう」
するとロアルは、今にも泣き出しそうに顔をくしゃくしゃにして大きく頭を下げた。
「あ、ありがとうございます！」
言動につい騙されてしまうが、ロアルは決して頭は悪くない。機転が効いて、主人に懸命に尽くそうとする。
ケヴィンはいい従者に恵まれたのかもしれない。
「コットニー伯爵は、今どちらに？」
「本日は邸におられます」
「取り次いでもらえるか？」
「はい！」
ロアルは入って来た時と同じように、元気に飛び出していく。
ケヴィンはソファに戻って背もたれに体を預けると、瞼を閉じて思いをはせた。
彼女と子どもの無事だけでなく、ケヴィンは他に確信するものがある。
ロアルの話ぶりからして、彼女はまだ自分が身を隠すべきだと思

っているのだろう。彼女が身を隠さなければならない理由はただ一つ。

そう。彼女の想いは今もケヴィンにある。

それさえわかれば、もう迷わない。

膝の上に置いた手のひらをぎゅっと握り込む。

彼女をもうすぐ手に入れられる喜びを、そうしてしばし噛みしめていた。

四章―3

荷馬車一台通せない細い路地に面した四階建ての集合住宅。その三階にある一室で、アネットは背中に午後のうららかな陽ざしを浴びながらドレスの破れ目を繕っていた。

このドレスの持ち主は仲良くしてくれている娼婦の一人で、お客さんの中にドレスを破るのが趣味の人がいるのだという。……いや、他人の趣味にとやかく言うまい。そのお客さんのおかげで彼女はアネットの上得意になってくれているのだから。

他の娼婦たちや近所の人たちも、破れた服の繕いだけでなく、膝や肘のつぎ当てや、上着の裏打ちなどの針仕事を頼んでくれる。貴族のお邸でつちかった裁縫の腕は丁寧と評判だそうで、おかげで仕事が途切れることがない。

さまざまな縁が、今のアネットを支えてくれている。

もうこのお邸にはいられない……。

覚悟を決めてクリフォード公爵邸をあとにしたものの、アネットには行くあてがなかった。使用人頭のビィチャムが管理している給金を引きだせば、オルタンヌに邸を出ていこうとしていることがバレてしまう。頼るつてがなく、お金も持たない。正直途方に暮れていたけど、危機感はあまり持っていなかった。これでもうケヴィンとは二度と会えなくなる、そのことが胸を押しつぶして。

下街に行けば仕事にありつけるかな……。

思い付きで下街のほうへ歩き出したところを、ケヴィンの元従者ロアルにみつかってしまった。

今は真夜中で、ロアルはケヴィンの従者の任を解かれて少し離れたお邸で働いている。偶然というには怪しすぎて警戒して後退ると、ロアルは肩をすくめて苦笑した。

「アネットさんが妊娠したらしいというわさは、僕の勤めてる邸にまで届いてますよ。親戚同士のお邸なので使用人の間にも交流があるんですよね。今日の夕方になってそのうわさがほんとうだったみたいだという話になったので、アネットさんが邸から抜け出すとしたら今日しかないと思ったんです。――大正解でしたね」
ランプを掲げて互いの顔を照らしだし、ロアルは得意げに口の端を上げる。
「それで、ロアルさんはあたしに何のご用ですか？」
結論をわざと先延ばしにしているようなロアルの態度に焦れて、アネットのほうから聞いてみた。するとロアルは話を聞いてくれるんだと言わんばかりに、意外そうに目を見開く。
「そうですね、まずは説得させてください。邸に戻りませんか？クリフォード公爵はご子息のお子を宿したあなたを粗略に扱ったりはしないと思いますよ。そりゃあ、あまりよくは思われないでしょうが、然るべき生活環境を与えてくださり、無事にお子を産ませてくださると思います。それに、戻ってきてあなたがいなくなったと知れば、ケヴィン様は悲しまれます」
簡単に想像がつく。深夜の邸。戦場から帰ってきたケヴィンは洗濯室隣の物置をのぞいて、そこから人が住んでいる形跡があとかたもなくなっているのを見てがくぜんとする。頼るようにと言ったアランネル侯爵の邸にもいないと知ると、懸命に捜し始める。きっと後悔する。アネットの気持ちを無視してでも、アランネル侯爵にアネットを預けていかなかったことを。
「……でも、それでも、あたしはお邸にいちゃいけないんです。あたしなんかを囲ったりしたら、ケヴィン様はきっと一生結婚なさらない。公爵家の跡取りであるケヴィン様に、不幸な道を選んでほしくないんです」
アネットは苦しい思いをしながら告げるのに、ロアルは少しあきれたような、困ったような顔をして言った。
「ケヴィン様のしあわせについて僕が語るわけにはいかないのでア

レですけど、アネットさんを愛人にしたらケヴィン様は結婚しなくなるだろうってことには同意見ですね。――じゃあ行きましょうか」
「――え？」
邸には戻らないとアネットは言っているのに、ロアルはどこに行こうというのだろう。
「どんなに説得しても、アネットさんは邸に戻ってくれないんでしょう？　だったら邸以外の住処を確保しなくちゃ」
「でも……」
甘えてしまっていいんだろうか？　ロアルに頼れば居場所がケヴィンに筒抜けになって、邸を出る意味がなくなってしまうのでは？
ためらって動けないでいるアネットに、ロアルはため息をついた。
「放っておけるわけがないじゃないですか。僕に世話させてくれないと言うなら、強制的に邸に連れて帰ります」
正直、ロアルの申し出はありがたかった。だからアネットも条件を出した。
「あたしの居場所を誰にも教えないでください。もし教えたりしたら、ロアルさんが世話してくれる場所からも逃げます」
ロアルは少しためらってから言った。
「わかりました。絶対に教えないと約束しますから行きましょう。妊婦が深夜に歩きまわるのは体に毒です」

道すがら、ロアルはいろいろ話した。
「アネットさんの相手は誰だって、ちょっとした騒ぎになってますよ。三年もたつと、ケヴィン様との噂も忘れられてしまうものなんですね。まぁ、思い出して口にする人もいないではないですが、三年も会えなかったのにあんな短期間の帰郷で深い仲になるなんてほとんどの人が思わないらしくて、一笑に伏されてます。みんな好き勝手にうわさし合いますが、そのうわさのほんとうのところまでは知らないんですよね。――って、僕もすべてを知ってるわけじゃないですけど」

そう言ってロアルは、深夜をはばかって声をひそめて笑う。
連れていかれたのは下街にある酒場だった。
「すみません。ほんとはかっこよく別邸とかでも用意して生活資金も出してあげたかったんですが」
行きつけの酒場だという。お金までロアルに頼るつもりはないから、信用のできる人に紹介してくれるだけでもありがたかった。
「住むところと仕事か。急に言われても心当たりは……」
「追々探してもいいんで、ともかく今晩彼女を泊めてほしいんです」
「だが、何があっても責任はとれないぞ？」
カウンター越しに、ロアルは店主と交渉する。その隣に立っていたアネットは、酒と食べ物、どこかからただよってくるすえたにおいに気持ち悪くなって外に飛び出した。
建物の壁に向かって体を折り曲げるアネットの背中を、追いかけてきたロアルがさすってくれる。
「もしかしてにおいが駄目でしたか？　つわりがひどいんでしたよね。となるとここは無理かなぁ」
ぼやくロアルに甲高い声がかかった。
「ロアルちゃんお久しぶり！　その子、ロアルちゃんの彼女？」
派手なドレスを着た女性が、興味深げにアネットをのぞきこんでくる。
ロアルの名誉のために、アネットは急いで息を整えて答えた。
「ち、違います。ただの知り合いで……」
「何？　具合悪いの？」
「あ、いや。彼女、妊娠中で……」
「やだ！　ロアルちゃん、彼女を孕ませちゃったの？　ロアルちゃんのくせしてやっるー！」
けたたましい笑い声が、さきほどまで嘔吐(えづ)いていたアネットの体にこたえる。
声を聞き付けてか、どこからか娼婦たちが集まってきて、ちょっとした騒ぎになってきた。

「ち、違いますよ！　僕じゃないです！」
「そうよねー。ロアルちゃんにそんな甲斐性あるわけないわよねー」
「じゃあこの子の腹ん中の子の父親は誰よ？」
「まさかヘリオット様っていうんじゃないでしょうね？」
ドスの効いた女の声に、陽気だった雰囲気が一変する。
「へ？」
この、ロアルの間抜けたつぶやきもいけなかった。
「ちょっと！　ヘリオット様ってありえなくない！？」
「そんなことないわよ！　戦場から一時的に帰ってたの、ちょうど三カ月くらい前のことだわ！」
「ヘリオット様ってば、いつの間に特定の女をつかまえてたのよ！」
「いえ、それも違」
殺気立ってくる女たちに、ロアルのおっかなびっくりな否定はかきけされてしまう。
彼女たちはヘリオットの知り合いか。それもマズいなぁと思いながら、ともかくこの場を収拾しないといけないと、壁から手を離して振り返ろうとしたところで、凛と張った女の声が響き渡った。
「静かにおし！　道端で何騒いでるんだい！」
いっせいに口をつぐんだ女たちをかき分け、彼女たちと同じく派手めなドレスをまとった女性がアネットの隣にやってくる。
「レミナ姉さん、もしかするとその子ヘリオット様の」
「ちょっと黙っておいで」
気遣わしげに声をかけた女を、レミナと呼ばれたきつい顔立ちをした美女はぴしゃっとはねのける。
レミナはアネットをじろじろとながめまわし、それから耳元に口を寄せてささやいた。
「もしかしてあんた、ヘリオット様から避妊薬をもらったことがあったりするんじゃないかい？」
思わぬことを聞かれびっくりしてうなずくと、レミナは納得したような顔をして女たちを振り返った。

「この子の相手はヘリオット様じゃないよ。間違いない」
「えー？　ホントですかぁ？」
「この子のことはちょっとだけ聞いたことがあるよ。ヘリオット様はこの子には絶対手を出さない」
レミナはそれだけ言うと、アネットのほうに向きなおった。
「それであんたは逃げてきたわけだ」
ヘリオットからどれだけのことを聞いているのだろう。バラされると困るから黙っていると、レミナはあきれたようにため息をついた。
「無理に答えろとは言わないけど、あんた、お腹の子を無事出産して、母子二人暮らせる場所が欲しいんじゃないかい？　――って、ちょっとあんた？」
アネットが驚いた顔をしたので、レミナも慌てたらしい。
子どもを産んで、一緒に暮らす。
一番に考えてもいいことのはずなのに、全然頭になかった。体調が悪くて妊娠を指摘されたけど、ほんとうに子どもができてるとは限らなかったし、けどもしほんとうに子どもがいるのなら邸に居続けることはできない。そのことで頭がいっぱいで、他に何も考えられなかったのだ。
アネットは自分の腹にそっと手を当てる。
ここに宿っているかもしれない命。宿っていなかったとしても、ケヴィンとのことを公爵に知られてしまう以上、もう邸には戻れない。
ケヴィンと二度と会えなくなると思うと、この子は決して手放せないと思った。
「もしかしてあんた、堕胎の相談にきたのかい？」
眉をひそめるレミナに、アネットはしっかりと首を横に振った。
「いいえ、産みたいです。そのために住む場所と仕事を探しています。いいところを知っていたら教えてくれませんか？」
初対面なのにずうずうしいと思った。でも子どもを産んで育てよ

うと思ったら、なりふりなんてかまっていられない。
急に必死になりはじめたアネットに、挑むような笑みを見せた。
「そうは言われても先立つもんがなくちゃねぇ。……金は持ってるのかい？」
「……いいえ」
ためらいながら答えると、レミナはアネットを試そうとするように瞳の奥をのぞき込んできた。
「ならあんたは、自分の大事なものを手放す勇気はあるかい？」

その時、服の下に隠してある指輪に気付かれたのかと思ってどきっとしたけど、そうではないことはすぐにレミナの口から聞くことができた。
レミナが言った“大事なもの”は今アネットの手元にはない。
だがあれから二年、首の付け根のところからばっさり切った髪は、今では胸元あたりまで伸びている。そして手に入れたお金で部屋を借りることができ、当座の生活を支えてくれた。
切った当初は言い出したレミナですら、成人した女性がすることのないみすぼらしい長さに言葉を失ったが、指輪を手放せと言われるより髪を切ったほうが、アネットにはよっぽどかましだった。
どうしても置いてくることができなかった指輪。ケヴィンの母の形見であるこの指輪は、娘がもう少し大きくなったら、お守り代わりに持たせてやろうと思う。

アネットはほんとうに妊娠していて、生まれてきたのは女の子だった。

ブルネットの髪に藍色の瞳をした娘は、あまり泣いたりしなくて助かるけど、笑うこともなくて心配になる。でも、あやしてやれば機嫌よさそうに手足を動かすところをみると、感情に乏しいわけで

もないらしい。
きっとケヴィン様に似て、表情を作れないのね……。
女の子なのにそんなところを似てしまってどうしようかと考えたこともあるけれど、ケヴィンに似てくれたということが嬉しくてたまらない。
産むと決意した当初はケヴィンとのきずなを手放せないと思っただけだったが、今はこの子自身がいとしくてならなかった。
自分はつくづくらっきーだと思う。いろんな人に助けられて危険をともなう出産を無事に終え、子どもの側にずっといられる仕事を得ることができた。ロアルが資金援助をしてくれると言ってくれたが、出産費用をちょっと借りただけで、そのお金も返し終えている。
エイミーと名づけた娘は、今はベッドの上でお昼寝中だ。その安らかな寝顔に、アネットの顔は自然ほころんでくる。
笑わないエイミーは生まれてすぐのころ、仲良くしてくれるご近所さんたちに気味悪がられていたが、泣いて面倒をかけることがないことから気に入られて、遊び相手になってもらえたり、ちょっとした外出の際、子守りを引きうけてもらえて助かっている。

最初に約束をかわしたロアルはもちろん、事情を知っていたレミナも、アネットのことは内緒にしてくれた。
そういえば、ヘリオットが融通してくれた避妊薬は、レミナがヘリオットに頼まれて分けたものだったという。レミナはただ、ヘリオットが友人のために避妊薬を欲しがっているとしか知らず、それを飲んだ時のことをアネットが話すと、あきれたようにこう言った。
――三年も前の薬を飲んだの？　ばかね。そんなの効くわけないじゃない。お腹、壊さなかった？
お腹は壊さなかったが、病気知らずなアネットが薬には効果が期待できる期限があることなど知るわけがない。ヘリオットもそのことについて何も言わなかった。
ヘリオット様って、親切なのか不親切なのかわかんない……。

ただ、思いがけずに子どもができてしまったことも、長い目で見ればこれでよかったように思う。

ケヴィンが戦場から帰ってきて再会できても、いずれはケヴィンが結婚するためにアネットは身を引かなければならなかった。ケヴィンが結婚して妻となる人が邸に迎え入れられることになったとき、アネットに耐えられたかどうかわからない。ケヴィンには悪いことをするけれど、子どもというよすがを手に入れて離れざるを得なくなったことは、アネットにとってらっきーなことだったのだ。

この子のために生きていく。

その思いが、アネットに日々の活力を与えてくれる。

まだまだ短い髪を首の後ろで一つに束ね、時折娘を見遣りながら針仕事に専念していると、廊下から騒がしい足音が聞こえてきて、アネットたち親子の部屋の扉が乱暴に叩かれた。

アネットは思わず身をすくめる。

針を動かす手も止めて息をひそめていると、「開けないとドアをぶちこわすぞ」という野太いだみ声が、扉越しに聞こえてきた。

四章―4

扉をたたく音と、開けろとわめく声はまだ続いている。
アネットは仕方なく縫いかけのドレスに縫い針をさして立ち上がった。ドレスを落ちないように椅子の上に盛ると、足音を立てないように隣の部屋に入り、廊下に続く扉に近付く。
あきらめて帰ってくれればいい。
だけど相手は、アネットがほとんど部屋を空けないことを知っている。
以前居留守を決め込んでいたら、言葉通り扉を壊されてしかも弁償してもらえなかったから、痛い出費をくらってしまった。
それにうるさい。親しい人たちは同情してくれるけど、そうではない人たちはアネットに対しても迷惑顔をして苦情を言うこともあった。こんなことが二週間近くも毎日続いて、アネット自身も限界に近い。
そろそろ住む場所を変えなきゃ。誰かいいところを紹介してくれるといいけど……。
扉をがたがた揺らされて、これ以上されたら壊れると思ったところで、アネットは鍵を開けた。
内開きの扉が開く。
我が物顔で入って来ようとするのは、細面でそこそこ顔はいいが、アネットに嫌悪感を抱かせる表情をした男だった。
「やめてよね。近所迷惑になるじゃない」
「おまえがさっさと鍵を開ければいいんだ」
なれなれしい視線を向けられて、背筋がぞっとする。
「何であんたのために鍵を開けなきゃならないのよ。出てって！」
「邪険にするなよ。俺たちの仲だろ？」
「あんたと仲良くなった覚えなんかないわよ！　帰って！　帰ってよ！」

男は下卑た笑みを浮かべ、アネットの耳元へ顔を寄せた。
「帰って欲しければ言えよ。あの子どもの父親が誰なのかをさ」
耳元にささやかれ、気持ち悪さに耐えられなくて後ろへ飛び退いた。

この男は顔見知りの娼婦の情夫だ。二週間程前に外で声をかけられて以来、ずっとつきまとわれている。
――あの子が情夫に話しちまったんだろうね。あんたのことを。
この部屋を用意し仕事を持ってきてくれた娼婦のレミナは、そう言っていた。
下街にこっそり隠れて暮らすアネット母子に、金のにおいをかぎつけたのだろう。エイミーの父親は金持ちと踏んで、アネットから聞き出そうとする。エイミーの存在を父親に知らせて、金をせしめようというのだ。
――帰ってほしいからって金を渡したりなんかしちゃダメだよ。ああいう男は味をしめるからね。
アネットもその通りだと思う。金を払って追い出せるならどんなに楽かと思うが、一度でも金を渡したら、やってくるたびに金をせびるようになる。
この男を情夫にしている娼婦は、男が連日アネットの部屋を訪れていることに気付いて、アネットに「人の男をとるんじゃない」と言いがかりをつけてきた。部屋に押し掛けてきて話も聞かずにアネットを殴って髪を引っ張ったが、すぐに近所の娼婦たちが気付いて引き離してくれた。そのあとレミナが彼女を諭してくれたのか、あれ以来姿を見せることはない。
この男と彼女の両方を相手にしていたら、さすがのアネットも参ってしまっていたことだろう。

男は彼女にもアネットにも悪いと思うところがまったくないらしく、この部屋にやってきては、アネットの恋人面をしようとする。

騒ぎを聞き付けて、多分誰かが警備隊を呼んでくれている。こいつが警備隊の手も焼く札付きの悪でよかったと思うのはこういう時だ。小物だったら、この程度のいざこざは痴話げんかとして片付けられてしまう。

「何度も言ってるけど、あの子の父親は平民よ。慰謝料をふんだくれるような相手じゃないわ」

「だったら何で、隠れるようにして暮らしてるんだよ？」

「それは、相手が妻子持ちで、迷惑をかけたくなかったから……」

語尾がわずかに細くなったことに嘘を見抜かれ、強引に抱き寄せられる。

「あの子ども、どっかのお貴族様のご烙印なんだろ？」

言い当てられて、ぎくっと身をこわばらせる。それに気付いて男は得意げに語りはじめた。

「おまえは下街のにおいがしねーんだよ。はすっぱな口を聞いても、立ち居振る舞いがどっかお上品なんだ。かといって貴族というほど世間知らずでもない。お貴族様の邸で下働きしてたんじゃねーのか？　それでご主人様に手を出されて孕まされて、邸を追い出されたんだろ。……なぁ、おまえをそういう境遇に陥れた貴族野郎に復讐したいと思わないのか？　おまえが邸を追い出されたってことは、子どもの存在が知られると困ることがあるんだろ？　だったら子どものことを言いふらすって言ってやれば、口止め料にいくらでも金を出すぜ？」

途中まで言い当てられて、この男の金に対する嗅覚に怖れをなしたが、後半は見当違いもいいところだ。

アネットは追い出されたんじゃない、逃げて来たのだから。

ケヴィンに対する侮辱ともとれる男の思い込みに怒りがこみ上げて来て、アネットは男の腕の中で暴れた。

「いい加減にしてよね！　そんなんじゃないったら！」

男は腕を振り回すアネットを、胸元に抱き込んで片腕を封じ、もう一方の手を空いている方の手でつかんで、抵抗を難なく押さえ込

んでしまう。
男は再びアネットの耳元に顔を寄せた。
「観念しろって。――愉しませてやるからよ」
耳までなめられてしまえば、男の言葉の意味は明白だ。
「嫌！」
アネットは先程より一層、がむしゃらに暴れた。男の体との間に挟み込まれた腕を引き抜き、手当たり次第に振り回す。爪に痛みを覚えてはっとすれば、アネットの手首を離した男は自分の顔をさすった。
男の頬に、少量だが血が塗り広げられる。
瞳に怒りが宿った。
「こいつ！」
荒々しく肩をつかまれる。男の指が引っかかって襟ぐりが押し広げられ、アネットの首筋が半分露わになった。
男の動きが一瞬止まる。
次の暴力におびえて硬直しているアネットの服の下にあるものに気付き、男はそれをずるずると引っ張りだした。気付いてすぐさま止めようとするが、アネットの力では男にかなわない。
長い紐の先についている小袋を、男は引きちぎる勢いで開けた。中から転がり出る指輪をごつごつとした手のひらで受け止める。
男は簡単の呟きをもらした。
「へぇ……」
「返して！」
アネットは飛びつこうとするが、男は指につまんでひょいと掲げる。頭一つ分も背丈の違う男に腕を上げられてしまうと、それだけでもう手が届かない。
「いいもん持ってるじゃねーか。こりゃあきっと値打ちもんだぜ？
売ればいい値段がつきそうだ」
「売るつもりはないわ！　返してってば！」
男はにやっといやらしい笑みを浮かべて、アネットを見下ろす。

「この指輪、子どもの父親のもんだろ。子どもがそいつの子どもだっていういい証拠にもなるな」
細くてシンプルな指輪だが、元の持ち主は前国王の姉、クリフォード公爵の妻だ。もしかするとそこからケヴィンの身元が割れてしまうかもしれない。
アネットは掲げられた男の腕に取りすがり、よじのぼるようにして男の手を降ろそうとした。
返してと言っただけでは決して手元には戻らない。体重をかけて懸命に男の手を自分に近付ける。
「往生際が悪いぞ、こら！」
アネットに引っ張られて腕をひねったのか、男は顔をしかめて大きく腕を振る。振り払われたアネットは、背後に置かれていたテーブルに上半身を叩きつけられた。
息がつまるほどの痛みから回復するのを待てず、アネットは声を振り絞る。
「やめて！　返して！　それは」

それは、エイミーとケヴィンをつなぐ唯一のもの。
アネットのせいで父親を知らないで育つエイミーに、託さなければならない。
愛されるはずだった証として。

痛みになんかかまっていられない。
アネットは机を押すようにして体を起こすと、前のめりに倒れそうになる勢いも利用して男の腰にしがみつく。
「てめぇ、しつけぇぞ！」
怒声をあげながら、男は指輪を握った腕を振り上げる。アネットはとっさに目をつむった。
殴られても離すわけにはいかない――！

だが、アネットの身にこぶしが振り下ろされることはなかった。
その代り、男のがなり声が室内に響く。
「何しやがる！」
「窃盗の現行犯だな。もうすぐ警備隊が来る。大人しく捕まるがいい」
低くて、心地いい深みのある声がする。
その声に、アネットの心臓は跳ねた。
何で今ここで、この声がするの……？
ぼうぜんとしながらおそるおそる顔を上げれば、この場に新たに現れた男性が、男の手首をひねり上げて、開かせた手のひらから指輪をつまんで取り上げている。庶民の着るシャツにベストといった姿をしているから目を疑ってしまったけど。

長身で、端正な顔をした、アネットが一日たりとも忘れられなかった人。

その人と目が合うと、アネットは男の腰から腕を解いて、その場にへなへなとへたりこんでしまった。
男から指輪を取り戻せた安堵と、見つかってしまったという虚脱感。

ケヴィンが言った通り、間を置かずに黒っぽい制服を着た警備隊員が数人やってきて、男に縄をかけはじめた。
「その女はいいのか！？　分不相応な指輪を持ってたのはそいつだぞ！」
わめく男に、ケヴィンは冷ややかに視線を向ける。
「この指輪はわたしが彼女に贈ったものだ。彼女が持っていて何ら不思議はない」
男の目がかっと見開かれた。
「おまえか！　よく見ればそっくりだ！　なぁ、その女は今は俺の

女なんだ。これまで面倒みてやった慰謝料をはずめよ。俺はそれを受け取る権利がある。なぁ、そうだろ！？」
体に力が入らず荒目の木の床に座り込んだまま、アネットは言い返した。
「あんたの世話になんかなった覚えない！　今度こそ二度と牢屋から出てくるな！」
そのあとも男はわめいていたが、縄で腕と胴をしっかりとくくられ、警備隊員数人に囲まれて、ろくな抵抗もできずに引き立てられていく。廊下に出た男は、集まってきていた近所の人々に罵倒を浴びせられる。その罵倒が遠退いていくことで、男が遠ざかっていくことを感じアネットはほっと息をついた。
「大丈夫か？」
差し伸べられたケヴィンの手のひらに、アネットの胸は甘くうずいた。
大きくて、少しだけ節ばった手。過去、この手と何度も触れ合った。
もう見ることさえかなわないと思っていたのに、今アネットのために差し出されている。
ここで拒むのは不自然。
自分にそう言い訳して、アネットは自分の手のひらを重ねた。
ケヴィンの手に支えられて、アネットはまだ力のあまり入らない体を何とか立たせる。自分の足で立てたところで、名残惜しく思いながらもケヴィンの手のひらから自分の手を引いた。
「ありがとうございました。おかげで助かりました」
ちゃんと、笑えているだろうか。
ケヴィンに再会できて泣きたくなる気持ちを押し隠して。
「偶然ですね。この辺りに用事があったんですか？」
我ながら、この白々しさにあきれてしまう。

貴族のケヴィンが下街に用があることなどまずない。アネットがロアルに連れていかれた酒場にはたびたび足を運んでいたそうだが、今は昼間だから酒を飲みに来たということはないだろう。

とすれば、目的は一つしか思い当たらない。

捜してもらえたという喜びが、体を奥底から震わせる。

自分から逃げ出しておいて、何を喜んでいるの？

アネットは心の中で自分を叱咤し、溢れそうになる思いを必死にこらえる。

思い出しなさい。あたしは何のためにケヴィン様から離れようとしたの？

ロアルは約束を守ってくれなかった。

部屋にほとんどこもりきりのアネットを、王都に戻って三週間余りの間に自力で探し出せたとは思えない。

やっぱり信用するんじゃなかった。ロアルはケヴィンをすごく慕っていたから、黙っているわけがなかったのだ。

約束を守ってもらえなかった悔しさと、ケヴィンの元から逃げ出したいたたまれなさで、目の前にいる人の顔をろくに見ることができなかった。

ちょっとは笑えたと思う。けれどすぐに目をそらしてしまい、話を続けることができない。

しばしの沈黙の後、ケヴィンが口を開いた。

「アネット」

名を呼ばれて、どきんと胸が高鳴る。

ベッドの中でしか呼ばれたことがないという記憶が、アネットの身に熱を灯らせる。

アネットにとって、ケヴィンに名前を呼ばれるのは特別なこと。
でもそれにほだされてちゃいけない。
アネットは自分に言い聞かせる。

非情になれ。

四章―5

非情になれ。
ケヴィン様にも、あたし自身にも。

「怪我は？」
心配して尋ねてくれるケヴィンの顔を見られずに、アネットはうつむいたまま答える。
「ないです」
「遅くなってすまない」
視界の端に、ケヴィンが動くのが見えた。アネットはとっさに両腕を突き出す。
アネットの手はケヴィンの胸に押し当てられ、アネットを抱き込もうとしたケヴィンの動きをさえぎった。
「……ケヴィン様が謝ることなんてないですよ。ケヴィン様から離れたのはあたしなんですから」
ケヴィンはアネットを守ろうとしてくれていた。それを拒んだのはアネットのほうだ。
「子どもができたそうだな？　何故、アランネル侯爵の邸に行かなかった？」
背中に回すはずだった手でアネットの二の腕をつかんで、ケヴィンは言う。

胸が痛い。
今から嘘をつかなくてはならないと思うと。
けど、ためらったりしたら二年前と同じことを繰り返してしまう。
アネットは自分に刃を向けるような気持ちを押し隠して話し始め

る。
「何かあったら行くようにってケヴィン様はおっしゃってましたけど、それって“ケヴィン様に関することで”ですよね？」
顔を上げ、アネットの言葉に戸惑いを見せるケヴィンに、にっこりと笑う。
「ケヴィン様が戦場に行ってしまって、寂しくてたまらなくて、すぐに別の男の人になぐさめてもらって、できたのはその人の子です。相手が妻子持ちだってわかってながら、関係を持ったんですよ。おかげで身をかくさなきゃならない羽目になりました」
どうかだまされて。あたしを軽蔑してくれればいい。
「ロアルさんも人がよすぎますよね。ケヴィン様のお子か確かめもせず、あたしの世話なんかしてくれちゃうんだから」
ロアルがケヴィンにバラしたせいなんだから、これくらいのことは言わせてもらう。
「そーいう女なんです、あたしは。幻滅したでしょ？　ご立派なお貴族様に、身持ちを崩した姿をこれ以上見られたくないんです。――帰ってください」
しゃべり続けるのがつらくて、アネットの声は自然に冷たくなった。
言ってたよね？　別の相手がいるならあきらめてたって。だからこれであきらめて。
アネットはそう願うのに、二の腕をつかむケヴィンの手には力がこもる。
「嘘はいい。本当のことを聞きたいんだ」
……何でこんなに、確信を持って断言できるんだろう。二年も会わなかったのよ？　その間にあたしどうしていたか、何も知らないはずなのに。
「嘘なんかじゃありません。そりゃあ相手の名前を聞かれても、迷惑をかけたくないから言えませんけど」
「アネット」

また、名前を呼ばれてしまい、体がぴくり震えて切なさがこみあげてくる。
泣きそうになっている顔を、ケヴィンにのぞきこまれた。
「嘘でも君の口から別の男の話を聞きたくない。それに、君を見ていてわかった。――君と関係を持ったのはわたしただ一人。そうだな？」
見透かされている。頬がかっと熱くなった。
「な、何うぬぼれてるんですか！　あたしにだって言い寄ってくれる男は他にいるんですよ」
ケヴィンの熱っぽい声にうろたえて体を退こうとするけれど、二の腕をつかんだ手がアネットを引き止めて距離を取らせてくれない。
「帰ってきたからには、君を誰にも譲ったりしない」
なんて傲慢な言葉。
そんな強いまなざしで見つめられたら、抗うための言葉も出てこない。
「ここを引き払おう。下で聞いてきたが、先程の男はこの界隈でも鼻つまみ者なのだそうだな。余罪を徹底的に追及して処罰するよう指示をしておくからしばらく現れることもないだろうが、同じ考えを持つ者がいつまた現れるかしれない。この先のことは心配いらない。君と子どもを迎え入れる準備は整えてある」
子どものことを口にされて、アネットは忘れていた抵抗を始めた。腕を振り体をよじって、ケヴィンの手から逃れようとする。
「馬鹿言わないでください！　下働きが産んだ子どもなんか引き取ってどうするつもり！？　犬猫じゃないんですよ！？　人として生まれたからには生い立ちがつきまとうし、立場が必要なんです！ふさわしくない立場に置けば、つらい思いをするのはエイミーなんですよ！？」
アネットが身を以って体験している。捨子だったのに、公爵家で上級使用人に育てられて、そのせいでやっかまれて、育ててくれた人に迷惑までかけてしまうところだった。ふさわしい立場――下働

きになってもいじわるは続いて、信頼を得るまでにどれだけ苦労したことか。
ケヴィンはわずかに目を見開く。
「……エイミーというのか。わたしたちの子は」
感慨深げに言われて、あきれて、腹が立ってくる。
「今はそういう話をしてるんじゃないです！　てか、さっきから言ってるじゃないですか！　あの子はケヴィン様のお子じゃないって」
「どこにいるんだ？」
ケヴィンはアネットの話などそっちのけで、テーブル以外家具のない小さな部屋の中を見回す。そして奥の部屋に続く扉に目を止めると、アネットから手を離して歩き出した。
唐突ともいえるこの行動にしばし呆然としてしまったアネットは、数歩遅れでケヴィンを追いかける。隣の部屋に入った時には、ケヴィンはベッドの傍らに佇(たたず)み、娘をじっと見下ろしていた。
アネットは立ちすくむ。違うと言い張っていたけど、ケヴィンに自分の子じゃないと言われるのが怖い。
しばらく動かなかったケヴィンは、不意に身をかがめると、エイミーの脇の下に手を入れて抱き上げた。エイミーは起きていたのか、少しもぐずることなく、初めて見る人を不思議そうな目で見つめ返す。
「泣きもしないし、笑いもしない……」
つぶやくように言われた言葉に、アネットは悲しくなる。
赤ん坊にしてはかわいげがない。それが親しくしてくれている人の間でも言われているエイミーの感想だ。
あなたに似たからこんな子になっちゃったんじゃない……。
実の父親にもかわいげがないと言われては、エイミーがかわいそうだ。
目尻がじわっと熱くなったとき、ケヴィンはアネットの様子に気付かずつらつらと話し始めた。
「わたしも、乳母に散々聞かされた。赤ん坊なのに泣きもしなけれ

ば笑いもしない、世話をするのに面倒はなかったが、愛想がなくて残念な思いをしたと。……先程の男の言葉を認めるようで気分が悪いが、髪の色といい、目元といい、確かに私に似ているな。――この子は間違いなくわたしの子だ」

さっきから、頭の中がぐちゃぐちゃだ。

ケヴィンに認められてしまってはいけないのに、認められてすごく嬉しい。

おとなしくしていたエイミーがぐずりはじめた。アネットは感情を頭の隅に追いやって、ケヴィンに駆け寄りエイミーを抱き取る。股の間に腕を差し入れて体を自分のほうへもたれさせると、安心してアネットにぎゅっとしがみついた。

まだ少ししゃくりあげるエイミーの背中を叩いてあやしていると、ケヴィンはため息に似たつぶやきをもらす。

「母親になったのだな……」

何を当たり前なことをといぶかしみながらケヴィンを見ると、優しげに目を細めたケヴィンの視線とぶつかってアネットはどきっとする。

「わたしの子を産んで、育ててくれてありがとう」

ケヴィンはエイミーごと、アネットを抱きしめようとする。その手から、アネットは後退って逃れた。

「この子は！　あたしが勝手に産んで、育ててるんです！　ケヴィン様に責任を取ってもらう必要はありません！」

これ以上言わせないで。

自分を保っていられなくなる。

あきらめなきゃいけないのに、なりふり構わず求めてしまいそうになる。

「どうして」
うつむき、涙をこらえながらアネットは口を開く。
「どうして捜したりなんかしたんですか？　夜中にこっそり邸に入れてあげただけの、ただの下働きじゃないですか。エイミーのことだって、これから奥様を迎えるのに邪魔になると思わないんですか？」
「そのことだが」
ケヴィンはここで、思わせぶりに言葉を切った。アネットが思わず顔を上げると、ケヴィンはアネットの視線を捉えて続きを口にする。
「君が以前指摘した通り、わたしは結婚をするつもりはない」
「ダメです！」
アネットはすかさず叫んだ。
「結婚して子どもをもうけるのは、ケヴィン様の義務じゃないですか！　ご自身が何のために大事に育てられてきたかわかってるんですか！？　結婚もせず下働きを愛人に囲うなんて聞いたら、ご主人様がお嘆きになります！　あたしは！　拾ってくださったご主人様に、恩を仇で返したくありません！」
ケヴィンが息を飲む。
わかってくれたのだろう。アネットはケヴィンの父、クリフォード公爵に恩がある。ケヴィンの将来も大事だが、クリフォード公爵を裏切ることもできないのだ。
ほら。ケヴィン様とあたしの間には、こんな壁も存在するの。
他にもたくさんの壁があって、そのすべてを乗り越えることはきっとできない。
ここで断ち切らなくちゃ。
アネットは悲しさをこらえながらほほえむ。
「心配しないでください。ここの人たちはとっても親切なんです。お金を持たずに来たあたしが無事エイミーを産めたのもみなさんのおかげだし、何かあればみなさんが助けてくれます。だからあたし

たちは大丈夫。ケヴィン様はご自分のことだけを考えてください」
うとうととしだしたエイミーを、アネットはベッドの上に寝かせる。
耳元であんなに叫べば普通の赤ん坊なら泣くだろうに、この子は物音が気にならないみたいだ。
この子さえいれば、あたしは平気。頑張れる。
自分に言い聞かせ、眠りに落ちたエイミーから顔を上げる。
「アネット」
ケヴィンがまた、名前を呼んだ。アネットの心臓も、また跳ねる。
いちいち反応してどうするの、あたし！
心の中で自分を叱咤しながら、ケヴィンに文句を言ってやろうとアネットは振り返る。
そのとたん、抱きすくめられた。

四章―6

庶民の薄いベストをまとった、厚くてあたたかい胸板に頭を押しつけられ、以前よりたくましくなった腕に背中を抱え込まれて、アネットは胸をつまらせ、しばし呼吸をするのも忘れた。

二度と得られないと思っていたぬくもりに包まれて、全身が歓喜に震える。

そのぬくもりにすがりついて、二度と離れたくなくなる。

だから嫌だったのよ……。

さっきから何度も拒んでいたのに、肝心な時にわかってくれない。

こぶしをにぎりしめ、ケヴィンの背に腕を回したくなる自分を押しとどめる。

「は……なしてください……」

アネットの声は、拒絶とは思えないほど情けなくかすれた。

ケヴィンからの返答は、しばらくたってからだった。

「このままで……わたしの話を聞いてほしい」

耳元に吹き込まれる、ため息のようなひそやかな声。

心臓が騒いで、どうにかなってしまいそうだ。

「……こんなふうにしてたら、話なんかできません」

かすれる声に、かすれ声が答える。

「離せば……君はまた、逃げるのだろう……？」

その通りだ。だが、離してもらえなくても、アネットは逃げるしかない。

「あたし、ここで結構楽しく暮らしてるんです。だから困るんですよ。ケヴィン様にここに来られるのは。みんなあたしがかわいそうだから親切にしてくれてるのに、お貴族様と知り合いだなんてバレ

たらここで暮らしにくく」
「アネット」
ケヴィンの呼ぶ声が、アネットの言葉をさえぎる。
「もういい」
簡単な言葉で終わりにされそうになって腹が立ち、アネットは力いっぱいケヴィンの胸を押す。
「あたしは困るって言ってるのに、何がいいんですか？　ケヴィン様は邪魔なんです！　母子二人で生きていくのにこれほどいい場所はないんです！　ここを出ていかなくちゃならなくなったって、ケヴィン様に頼ったりなんかしません。だからここで暮らしていけなくなるようなことされると、ホントに困るんです！」
アネットに押しのけられそうになったケヴィンは、一層強い力でアネットを抱き込んだ。
「先程の男はエイミーが金持ちの男の娘だと当たりをつけて、父親に金をせびるために君に近付いたのだろう？　あんな男が現れる場所が暮らしやすいわけがない」
「お貴族様と庶民では、暮らしやすいの尺度が違うんです！　あんな程度、どうってこと」
「どうってことないわけがあるか！」
耳元で怒鳴られて、アネットはケヴィンの腕の中でびくっと身を震わせる。
アネットの押す力が弱まったところで、ケヴィンは改めてアネットを抱きしめた。
「君があんな暴力をふるわれているのを見て、わたしが何も感じなかったと思っているのか？　怒りにどうにかなりそうだった。暴力をふるった男にも、そんな男のいる場所へ君を追いやってしまった自分にも」
「……ケヴィン様のせいじゃないって言ったじゃないですか」
アネットの声はまた弱々しくなる。
「あたしが考え無しだっただけです。いろいろと」

あの男に目をつけられないように、もっと下街になじむべきだった。
こそこそ隠れるような真似をしないで、最初から嘘の事情を話して回っておけばよかった。
三年前にもらった薬の効果を疑ってかかるべきだった。
そもそも薬があるからと思ってケヴィンに身を任せてはいけなかった。
もっとも、そのおかげでエイミーという生涯の宝物を手に入れたのだけど。

自責の念を念頭から振り払って、アネットはつとめて明るく話す。
「ホント、あたしのことは――あたしたちのことは、気にしないでください。ちゃんと生活できてますから。ケヴィン様はご自分のことを考えてください。そんな庶民の服を着て下街にいるなんて知られたら、ケヴィン様の品位が疑われちゃいますよ？」
「アネット」
咎めるような声が、頭上からアネットを呼ぶ。それに構わずアネットは話し続ける。
「やっぱり奥様をもらわないわけにはいかないですよ。結婚前から夫に愛人も子どももいるって知ったら、奥様が気を悪くされますから、だからあたしたちのことは」
「アネット！」
ケヴィンは乱暴にアネットの肩をつかむと、背をかがめてアネットと視線を合わせる。
暗い色の瞳に真剣なまなざしを送られて、アネットは思わず息を止める。
沈黙はわずかばかりの間。ケヴィンはアネットに言い聞かせるように、ゆっくりと口を開いた。

「もう、無理をしなくていい」

心臓さえも止まってしまったような気がした。

頑張れば頑張るほど、周りのみんなにほめてもらえた。

えらいね。よく頑張ってるね。

その言葉がうれしくて、もっともっと頑張った。

頑張って得た成果は誇らしくもあった。

でも、ほんとうはわかってほしかったの。

「ひたむきに頑張る君の姿勢は尊いと思う。しかしその半面、君がらっきーと言うたびに心配になった。そう言うことで、周囲の人間を安心させるのと同時に、君自身もごまかしているように見えて」

ケヴィンの親指が、アネットの濡れた頬をぬぐう。

「わたしは頑張る君が好きだ。だが君に、無理をしてほしいわけじゃない。――これまでよく頑張ってきた。あとはわたしに任せてくれないか？」

居場所をつくるためにアネットがひたかくしてしてきたものを、どうしてケヴィンは見つけ出してしまうのだろう。

ケヴィンの言うように、自分自身もごまかしてきた。このくらいどうってことない、むしろらっきーなんだと口にすることで、挫けそうになる心を励ましてきた。

だから、誰かにずっと言ってほしかった。

頑張りすぎなくても大丈夫。ちゃんと居場所はあるって。

返事を待ちわびるように、ケヴィンは泣きぬれてうつむいたアネットの顔をのぞきこんでくる。

ここで“はい”と答えられたら、どんなにしあわせだったろう。

ケヴィンはアネットに居場所を与えようとしてくれている。

けれどそれは、ケヴィンの不幸と引き換えだ。

とかくしきたりにうるさい貴族社会で、後継の子息が愛人を側に置くために結婚をしないなんて許されるわけがない。結婚は承諾することになったとしても、結婚前から愛人がいると知られれば、一夫一妻を重んじるこの国においてケヴィンは不道徳と謗(そし)られるだろうし、妻となる人は結婚前から夫に愛人を持たれたとして侮蔑されることになる。侮蔑された妻は不幸になり、妻の不幸はケヴィンに跳ね返ってくることだろう。

しあわせになりたい。でも不幸になってほしくない。

好きな人だからこそ、なおさらに。

アネットはしゃくりあげながら答える。

「あたしは、ケヴィン様に不幸になってほしくないんです」

思いを口にすると、涙があらたにあふれてくる。

好きな人と結ばれることが不幸を呼ぶなんて、そんなのってない。

どうして祝福されるわけのない立場に、それぞれ生まれてきてしまったんだろう。

出会ったことさえ恨みたくなってしまう。出会えただけでしあわせだと思えた時が、間違いなくあったにもかかわらず。

アネットの心配に、ケヴィンは真摯な目でアネットを見据えて答える。

「不幸になどなるつもりはない。もちろん君も不幸にするつもりはない」

「でも、ケヴィン様は公爵様の跡取で、然るべき令嬢を妻にして公

爵家にふさわしい跡取をもうけなきゃならないのに……」
「その問題を解決する準備は整えてある」
アネットは信じがたい思いで顔を上げた。
「解決って……そんなこと、できるんですか？」
「何事にも抜け道というものはある」
「でもどうやって？　大変なんじゃないですか？」
「確かに多少の苦労は伴うが、君を守るためならそれくらいどうということはない」
はっきりと言い切られた言葉に、嬉しさがこみあげてくる。
だけど何で？
しゃくりあげてわななく唇から、アネットは残り少なくなった疑問をケヴィンに伝える。
「どうしてケヴィン様はそこまでしてくれようとするんですか？あたしたちが一緒にいたらしあわせになんかなれるわけない。ケヴィン様だって一度はそう思って離れていこうとしたんでしょ？　なのに何で、急に考えを変えたんですか？」

もし償いたいからとか、無理をしているアネットを助けたいからという理由だったら、ケヴィンの申し出に応じるわけにはいかない。
それは同情であって愛情じゃない。
そんな気持ちだけでは、この先の人生を一緒に過ごせない。
アネットは愛しているのに、ケヴィンに愛されないのでは悲しすぎる。

今度こそこの話し合いに決着がつくかもしれない。そう覚悟して半ば悲愴な思いで問いかけたのに、ケヴィンは不思議そうに目をしばたたかせる。
「覚えていないのか？」
問い返されて、アネットは困惑する。
「何をですか？」

当時だって唐突過ぎて驚いたのに、覚えてないのかと問われても心当たりがあるわけがない。
眉間にしわを寄せて問えば、ケヴィンは意外そうに眉尻を上げた。
「君が言ったんじゃないか。後悔してほしくないと」
は？
疑問符は声にならず、アネットはただぽかんと口を開ける。
ケヴィンはアネットと視線をあわせるために屈めていた背を伸ばした。ケヴィンの顔を目で追うと、肩をつかまれているアネットは首をそらせて見上げることになる。間の抜けた顔をしたまま見つめるアネットを、ケヴィンは幾分あきれた様子で見下ろした。
「君はこうも言った。　ダメ元で試してみろと。このまま何の努力もせずに、みすみすあきらめてもいいのかと。その言葉を聞いて、わたしは君をあきらめない決心がついたんだ。――まさか、ほんとうに覚えていないのか？」
アネットは慌てて首を横に振る。
ちゃんと覚えてる。
あれは五年前、シグルドが初めて戦場に向かう時のこと。ケヴィンは公爵によって行くのを止められ、シグルドだけを戦場に向かわせることにケヴィンは苦しんでいた。
だからアネットは言ったのだ。「あたしはケヴィン様に後悔してほしくないんです」と。
「あ、あれは王子様のことを言ったんであって……」
今や国王となったシグルドを、つい昔のままに呼んでしまう。
「同じことだ。君のしあわせを願うなら、わたしは身を引くべきだった。そう思って距離を置いたのに、あの時自らの無力を呪い酒に逃げて、気付けば君の元を訪れていた。その時に思い知ったんだ。

君への想いは、どんなに離れようとしても褪せないのだと」

喜びがわき上がってきて、新たな涙があふれそうになる。

アネットも何度も忘れようとしたのに、何年たってもケヴィンのことを忘れられなかった。

けれど喜ぶ一方で、アネットは焦ってしまう。

一緒にはいられないと思い続けていたために、こんな日が来るなんて思ってもみなくて。

「で、でもあたしなんかでいいんですか？　とりえがあるわけでもないし、顔も」

そこまで言いかけたところではっとする。

端正な顔立ちをしたケヴィンが、部屋の中に差し込んだ光の反射を受けてよく見える。アネットからよく見えるということは、ケヴィンからもよく見えるということで。

アネットは慌ててうつむいた。

「は、鼻は低いし、おとなになったのにそばかすが浮いてて」

お世辞にも美人とは言えない。

急に恥ずかしくなった。こんな顔を見たらケヴィンの気持ちだってきっと冷める。

うつむいた顔を両腕で隠そうとするのに、ケヴィンはその腕に手をかけて下げさせようとする。

「見せて」

「嫌です……。こんなみっともない顔見たら、ケヴィン様も後悔します」

泣いたから、よけいひどい顔をしているはずだ。しっかり見られたとたん気まずい態度をとられたりなんかしたら、きっと立ち直れない。

ケヴィンが強く力を入れないのをいいことに、アネットは顔を隠し続ける。

業を煮やしたかのようにケヴィンはため息をついた。
「顔を見て後悔するくらいなら、君をあきらめることができていたはずだ」
「……それって何気に、あたしの顔をけなしてます？」
こういう時に“そんなことない”と言わないということは、肯定してるってことなんじゃないだろうか。
落ち込み気味にアネットがつぶやくと、ケヴィンは不機嫌そうに返してきた。
「今の言葉をどのように受け取ったら、けなしているように聞こえる？」
本気でわからないようだから、ケヴィンは不思議だ。アネットのことはよく理解してくれるのに、言葉の言い回しには妙に疎い。
にわかに込み上げてきた笑いをこらえながらアネットは言った。
「さっきのケヴィン様の言葉は、顔で選んだわけじゃないって意味ですよね？　それって顔で選んでたらとっくにあきらめてたって意味にも取れる――って、ちょっと！　やめてください！」
笑ってしまって腕の力がゆるんだ隙に、ケヴィンはアネットの腕を下ろさせてしまう。じっと顔をのぞきこまれて、アネットはいたたまれなくて目をそらした。
「ほんとうに緑色なんだな」
何のことを言われたのかわからなくて、つい視線をケヴィンに向けてしまう。
いとおしむように細められた目とかちあって、アネットは真っ赤になって硬直した。
「君の目は緑色だと人づてに聞いて、君に会ったらまっさきに確かめたかったんだ。ランプの明かりのもとでははっきりと色を確認できなかったから。――髪も、こんな色をしていたのだな。……以前よりかなり短いようだが、何かあったのか？」
そういえば、顔だけでなく髪もみっともないことになっていたんだった。

恥ずかしくなって、アネットは自分の髪をなでつける。
「……二年前に切ったんです。売ればお金になるって教えてもらって、できるだけ長く切ろうと思って襟足でばっさりと。これでもずいぶん伸びたんですが、みっともないですよね」
ケヴィンは痛ましそうに眉をひそめる。
「困ることがあったら指輪は売ってくれていいとわたしは言ったはずだが、何故売らなかった？」
「売れるわけがないです。売ったらケヴィン様にお返しできなくなるじゃないですか。ケヴィン様も形見の品を簡単に売れなんて言わないでください」
「襟足か……そんなに短くしてしまっては、外に出るのも恥ずかしい思いをしたのでは？」
「そんなの、頭を頭巾で隠して、頭巾の中に髪を隠してるんですってフリをすればどうってことありませんでしたよ」
いつもの癖で、強がってことさらに明るく話してしまう。
バレてしまったのだから、そんなことしても仕方ないのに。
ケヴィンはあきれたように小さくため息をついた。
「いい手だが、切る時にはやはりつらかったのだろう？　――すまなかった。君に断られても、いくらかの金を渡していけばよかった」
「あたしに渡されても、置いとける場所なんてなかったですよ。あたしの部屋は物置で、日中は誰だって出入りしてたんですから」
苦笑して言うと、ケヴィンは考え込むようにこぶしをあごに当てた。
「……だったら、ロアルに渡しておけばよかったな」
「ロアルさんといえば！」
思い出して、アネットは腹を立てる。
「この場所をケヴィン様に教えちゃったんですよね。あんなに約束したのに、もう信用できないわ……」
うなだれていると、ケヴィンがかばうように言う。
「いや、ロアルから聞いたわけじゃない」

「え……？　じゃあどうやってここがわかったんですか？」
「ロアルのあとをつけてきたんだ。今日の午後ここに来ると聞いて」
「……それって、ロアルさんから聞いたんですよね？　それじゃバラしてるのと変わらないじゃないですか。それにケヴィン様も、ロアルさんをかばう気があるなら、言葉は選んだほうがよかったですよ」
「そ、そうか……」
大の大人が素直に反省する様子に、アネットはつい笑ってしまう。
笑みにゆるんだアネットの顔を見て、ケヴィンは目を細めた。
ケヴィンは表情が薄いので、下手をするとすごんでいるようにしか見えないが、わずかずつの時間しか会えなくても十年もの間ケヴィン見てきたアネットには、それが嬉しそうな顔だとわかる。
「自然な笑顔だ」
ケヴィンには珍しい甘い顔で言い当てられ、アネットは真っ赤になって視線を下にそらした。
恥ずかしくて、ケヴィンの顔がまともに見られない。
視線をさけてそっぽを向こうとしたとき、ケヴィンが顔を近付けてきてアネットの心臓は大きく跳ねた。
「アネット」
名前を呼ばれて、さらに跳ねる。
「そろそろ返事を聞かせてくれないか？」
返事って……。
アネットはにわかに正気付く。

そうだった。まだ返事をしていない。
でも、ほんとうに受け入れてしまっていいの……？

「これだけ言っても、君はまだ迷うのだな」
まだ迷いを残しているアネットに、ケヴィンは小さくため息をもらす。

「だって、しょうがないじゃない。常識的に考えたら不幸になるだけだもの……」
アネットはぼそぼそと答える。するとケヴィンはまたため息をついて、アネットの手を取った。
そしていきなり、片膝をついてひざまずく。
「君には、こう言うべきだったな」
うろたえるアネットを、ケヴィンは見上げて告げた。
「わたしはしあわせになりたい。君も子どもも決して不幸にはしないと誓うから、どうかわたしがしあわせになるために協力してくれないか？」

ずるい。
そんな風に言われたら、断れるわけがないじゃない。
「返事を。――アネット」
じっと見つめ返しても、ケヴィンの表情は揺るがない。
これはわかっているという顔だ。

わかってもらえるのは嬉しいけど、これはこれで悔しい気分になる。
普通に返事をするのもしゃくにさわるので、アネットは無言のまま体をかがめ、ケヴィンの首に抱きついた。

四章―7

まだ信じられない……。

昨日までは下街のボロアパートに住んでいたのに、今日は立派なお邸で、お邸の女主人手ずから淹れたお茶を目の前にしている。

「さあどうぞ、召し上がれ。朝から忙しくて疲れたでしょう？」

「は、はぁ……」

アネットは恐縮してしまい、まともな返事が返せない。

確かに疲れた。あのあと隣の部屋まで入り込んでいた近所の人たちに歓声で祝福され、引越しのあいさつをしながら夕方までにアパートを引き払い、大通りまで迎えにきていた箱馬車に乗り込み、クリフォード公爵邸ほどではないけど立派なお邸に連れてこられた。

乳母と名乗る人にエイミーを預けさせられて、公爵邸の客室と同じくらい豪勢な部屋に連れてこられて、この邸の女性使用人のみなさんに下街で着ていたエプロンやシャツや足首まであるスカートなどをはぎ取られてお風呂で全身丸洗いされて、浅黄色のきれいなドレスを着せられて、夕食の席で邸のご主人様方――アランデル侯爵夫妻と引き会わされた。

一応上級使用人になるための教育も受けてるから、食事のマナーは一通り心得てる。マナーを知らなければどんなふうにテーブルをセッティングしたらいいのかとか、どのタイミングでどういう給仕をしたらいいのかとかわからないから。でも知ってるのとやったことがあるのとでは全然違う。うろ覚えの部分もあったりするし。ケヴィンや侯爵夫妻はマナーなんて気にしなくていいと言ってくれたけど、お上品に食べている御三方を目の前にして下手な食べ方なんてできるわけがない。忘れかけていた知識を総動員しつつ、御三方を見よう見まねで、アネットは何とか大きな失態をせず食事を終えた。……小さな失態は数限りなく、初めて食べるごちそうだったのに食べた気がしなかったけど。

そのあとで再会したエイミーは、やっぱりお風呂に入れてもらったらしく、藍色の髪はつやつやでやわらかい上質な産着を着せられて気持ちいいのか、母親であるアネットにしかわからない程度だがご機嫌な様子で柵のついたベビーベッドの中で動き回っていた。エイミーのいた部屋はおもちゃやおしめなど、アネットが持ってきたもの以外にもたくさん用意されていて、侯爵夫人の乳母を務めたこともあるという年配の女性が「今日の昼ごろに連絡をいただいて慌てて用意したんですよ」と楽しげに教えてくれた。

その後しばらくケヴィンと一緒にエイミーと過ごして、そのあとまた乳母の女性にエイミーを預けて部屋を移動して……。

……。

……。

……結局昨日はアネットがケヴィンの申し入れを受けた以降ちゃんと話ができる時間が持てなくて、現在、そしてこれから自分とエイミーがどのようになるかわからないまま、ケヴィンと侯爵夫妻と朝食をとり、ケヴィンと侯爵が出掛けるのを見送ってすぐ、アネットが昨晩泊まった部屋に戻されて、何着ものドレスを着せられてそれらがサイズ直しに回されて、新しいドレスも作るからと言われて採寸もされた。

今ごろ別室で、たくさんのドレスを持ってきた商人が連れてきたお針子と、この邸の使用人たちが、ドレスの縫いなおしをしていることだろう。本来ならそちらに加わる立場にあった自分のためにせっせと針を動かしてくれているかと思うと、何やら不思議な気がして実感があまりわかない。

それに不安も募る。昨日の夕方エイミーを乳母に預けたあと、夕食後と今日の朝食前のわずかな時間に会ったきり。離乳食を食べられるから食事の心配はないが、こうしてめったに会えなかったり、ある日突然引き離されてしまいやしないかと怖れを抱いている。

お茶に手をつけるのをためらいながら、アネットはおずおずと尋ねた。

「あの……エイミーはどうしてますでしょうか？」
「そうね。――呼んできてちょうだい」
侯爵夫人――イリーナが使用人に声をかけて呼びに行かせると、あまり時間を置かず乳母に抱っこされたエイミーがやってくる。
朝食前以来の再会だ。こんなに頻繁に、しかも長時間エイミーと離れていたことがなかったので、エイミーの姿を見てひどくほっとする。アネットが席を立って両手を広げて出迎えると、エイミーは乳母の腕の中からアネットに向かって手を伸ばした。乳母から抱き取ると、エイミーはアネットの肩に短くて細い腕を回し、離されまいとするかのようにぎっちりとしがみつく。それを見た乳母がにこやかに笑った。
「あらあら。お泣きになられないからお寂しくないのかと思ってましたが、やっぱりお母様が一番なんですね」
「エイミーはもともとあまり泣かない子なんです」
席を立って近寄ってきたイリーナがエイミーの頭に手を伸ばそうとすると、エイミーはわずかに身をこわばらせたが、おとなしく侯爵夫人に頭をなでられた。
「ふふ。ケヴィン様そっくり。二年前に来てくれていたら生まれたばかりのころから成長を見られたのに、残念だわ」
イリーナは実家も侯爵家であることから、三歳年下のケヴィンを小さいころから知っているのだという。そのためあんまり笑わないのでアパートの親しい人たちからは不気味とさえ言われていたエイミーを、イリーナは「ケヴィン様そっくり」とうれしそうに言ってくれた。
アネットがアランデル侯爵家に預けられることを、イリーナは二年前から知っていたのだという。こんなにもよろこんでくれるのなら、こちらにやっかいになっていればよかったと申し訳ない気分になる。
「す、すみません……」
エイミーを抱えたまま小さく頭を下げると、イリーナはすまなそ

うに苦笑した。
「責めるような言い方をしてしまったわね。ケヴィン様のお立場を考えるあまりの、苦渋の選択だったのでしょう？　あなたをちゃんと預からなかったせいで苦労させてしまったことを思うと、わたくしのほうが申し訳なくてならないわ」
アネットはエイミーの背に添えていた手を離して小さく振った。
「そんな、気にしないでください！　こんなによくしてくださって、どうお礼を申し上げたらいいかわからないです。でも、いいんですか？　あたし」
言いかけたところでイリーナに人差し指を当てられた。アネットが言葉を引っ込めると、イリーナは使用人たちを振り返った。
「少しの間、席を外してちょうだい。――ごめんなさいね、エイミー。もうちょっとだけお母様を貸してもらうわね」
エイミーは乳母に渡されるのを少しだけ嫌がったが、おとなしく乳母に抱かれて部屋を出ていった。使用人たちも出ていき、イリーナと二人きりになる。
促されて椅子に座り直すと、まずお茶を飲むように勧められる。渇いた喉に一口通すと、アネットがカップを置くのを見計らってイリーナは困ったように目尻を下げて言った。
「自分の出自について、これからは人前で口にしてはダメよ」
アネットが何を言い出そうとしていたのか、イリーナにはお見通しだったようだ。
「すみません……」
しおしおと謝ると、イリーナはアネットの顔をのぞき込むようにして尋ねてきた。
「ケヴィン様からは何て聞いているの？」
「いえ、あまり……。こちらのお邸にごやっかいになるということだけです」
イリーナはあきれたため息をつく。
「ケヴィン様ったら、もう……それじゃずいぶんと不安だったでし

ょう。本当ならケヴィン様がすべきでしょうけど、わたくしから説明するわね。――ケヴィン様が何も考えてらっしゃらなかったからわたくしが手配したのだけど、あなたの出自は、これからはわたくしが懇意にしている子爵家の傍系にあたる商人の妹の娘ということになるわ。

商人の妹、つまりあなたの母親ということになる人は、結婚してレシュテンウィッツ王国に移り住んだ。そこで生まれたあなたは、レシュテンの内乱から一人逃れることができて、十年ほど前に伯父を頼ってこの国に住むようになった。わたくしはその商人の構える店舗に足を運ぶことが何度かあって、その際にわたくしに付き添ってくださったケヴィン様は対応に出てきたあなたと恋に落ちた。そして二年前、再び離れ離れになってしまうことに耐えられなくなって関係を持ってあなたは妊娠。でも身分差があって結婚を望めないと思ったあなたは身を隠し、戦場から戻ってきたケヴィン様はあなたを捜し出して、わたくしのところに保護させた、という話にしてあるの。――この程度の嘘ならつかなくてもいいような気がするかもしれないけど、ごめんなさいね。気を悪くしないでほしいのだけど、ケヴィン様のお子であっても、さすがに出自のわからない下働きだった女性に産ませたお子を跡取りにすると言ったら、親類縁者が大反対するから」

「え？　跡取り？」

なんのことかさっぱりわからず、アネットは目をしばたたかせる。

「そういう取引になっているの。あなたをわたくしたち夫婦が保護する代わりに、あなたが産んだケヴィン様のお子をわたくしたちの養子にして跡を継がせると」

「え――」

表情を凍らせるアネットに、イリーナはやさしくほほえみかける。

「名目上のことよ。あなたからエイミーを取り上げるわけじゃないから安心して？」

引き離されるわけじゃないと聞いてほっとした。けど。

「でも奥様のお子は……」
イリーナは悲しげな笑みを浮かべた。
「わたくし、子どもを産めない体なのよ」
アネットは絶句する。気にしないでというように苦笑すると、イリーナは自嘲気味に話し始めた。
「最初の妊娠のときにひどい流産を起こして、医者に“お子はもう望めないでしょう”って言われて、その通りになったわ。跡継ぎを産まなくてはならない立場にありながら、子どもを産めないのでは妻として失格よね。けれどハンフリーはどんなに周りの人から離婚しろと言われても、わたくしと離婚しようとしなかった。そのせいでアランデル侯爵というクリフォード公爵に次ぐ家格を持つ家の当主でありながら、親類から当主としての自覚なしと言われて肩身の狭い思いをしてきたの」
アネットはテーブルに顔を伏せるように大きく頭を下げた。
「すみません。そんなつらい話をさせてしまって」
イリーナは静かに首を横に振る。
「ケヴィン様からの申し入れは本当にありがたかった。ケヴィン様のお子を養子にするなら、少しは文句も減るでしょうから」
「で、ですが、それならあたしの産んだ子ではダメなんじゃないですか？」
「だから嘘をつくことになったのよ。あなたの母親ということになる人は、子爵家の傍系にあたる商人の妹だと言ったでしょう？　つまりあなたは多少だけど子爵家の血を引いていることになるわけなの。わずかでも貴族の血が入っているということであれば、結婚は許されなくても子どもを跡取りにすることは何とかなるわ。これ以上いい身分を偽ることにすると、あなたの存在が妬まれて出自を暴かれかねないし、貴族の血を持っていても庶民ということなら、わざわざ戦火にまみれたレシュテンまで行く人もいないでしょう」
親が誰なのかわからないアネットが、子爵家の血をひいているとたばかってもいいんだろうか……。

それに気になることがある。
「あたしのお母さんということになる人は、実際に存在するんですか？」
「ええ。実際に結婚してレシュテンに移り住んで、あなたくらいの年齢の娘がいて、レシュテンの内乱に巻き込まれて一時期行方不明だったけれど、レシュテンを挟んでこの国と反対側の国に逃げて無事だったそうよ。向こうの国で運よく商売を再開できることになって、そこに腰を落ちつけたんですって。レシュテンは今通り抜けできるような状況にないし、戦乱が終息して通れるようになっても簡単に行き来できる距離じゃないし、その妹さんにも一応口裏を合わせるための手紙を送ってもらってあるし。だからバレる心配はないから安心してね」
「あ、ありがとうございます……」
万事ぬかりなしと言わんばかりのイリーナの満面の笑みを見て、アネットは恐縮して頭を上げられなくなる。
「それともう一つ、ケヴィン様と取引していることがあるの。――というか、こちらの条件のほうがわたくしたち側からしたらメリットなんだけど」
なにやらもったいぶった言い方に、アネットは首をかしげる。
「何ですか？」
うながすと、イリーナは肩をすくめて言った。
「ケヴィン様はクリフォード公爵位を、わたくしの夫にゆずってくださるそうなの」
「――！　えええ！？」
驚きすぎて一瞬反応の遅れたアネットは、カップから紅茶がこぼれてしまうのも構わず、テーブルを大きく揺らして勢いよく立ち上がる。
「公爵位を継いでケヴィン様の血を引く子を公爵家の跡取りとして

養子にする。これが実現すれば、夫はクリフォード公爵家の血族の頂点に立つことができ、直系の血を正式な夫婦の養子として次代につなぐ役目を果たして、うるさい親類縁者をかなり黙らせることができるだろうって話なの」

紅茶がテーブルの上にこぼれているのに気付いているのかいないのか、にこにこしながらイリーナは説明する。

アネットは呆然とした。

「あたしとエイミーを側に置くために、ケヴィン様は公爵位をお捨てになるっていうんですか……？」

そんなことさせたくなかった。だから身を退こうとしていたのに。ついてきてしまったことを後悔する。

打ち沈みかけたアネットに、イリーナはけろりと言った。

「あなたが気にすることないわ。ケヴィン様はあなたとエイミーのことがあろうがなかろうが、公爵位を継ぐつもりはなかったそうなんですもの」

四章―8

アネットがアランデル侯爵邸で暮らすようになって二日後、ケヴィンは夜、父トマスに呼ばれた。
クリフォード公爵邸の父の執務室を訪ねると、手紙をしたためていたトマスはペンを置いて、目の前に立ったケヴィンにおもむろに話し出す。
「アランデル侯爵の邸に女を囲ったそうだな」
「はい」
割と早く知られたなと思いつつ返事をすると、動揺をかけらも見せなかったことが気に障ったのか、苦々しそうにトマスは言う。
「結婚はどうするつもりだ？　その女は結婚できない相手だから囲っているのだろう？　結婚前から女を囲う男に嫁ぎたいと思う令嬢などおらんぞ」
「そうでしょうね。ですからわたしは結婚しません」
息子がめったに感情を表さない人物とわかっていても、嫌味にも聞こえるその冷淡さにいらだちを抑えられないのだろう。トマスの声に少しずつ怒気が混じってくる。
「結婚し跡継ぎをもうける責務を放棄するつもりか？　公爵位を継ぐ者として、それが許されることではないとわかっているだろうに」
「ええ。爵位を継ぐのならば決しておろそかにしてはならない責務ですね。ですがわたしは公爵の位を継ぐつもりはありません」
淡々と言葉を返すケヴィンに、トマスは思い切り顔をしかめた。
「本気で言っているのか」
「はい」
トマスはとうとう激昂する。机を強く叩きながら、椅子から立ち上がった。
「おまえは自分の血筋を何だと心得ている！？　クリフォード公爵家の直系として、おまえはこの家に直系の血を残さなくてはならな

い！　それはおまえにしかできないのだぞ！？　たかだか一人の女にほだされて、名誉ある役目を辞退し貴族として恥ずべき行いに身を落とすつもりか！」
怒るトマスから目をそらさず、ケヴィンは常々考えてきたことを口にした。
「彼女のことに関係なく、わたしはもともと公爵位を継ぐつもりがなかったのです」
「――何？」
息子から思ってもいなかったことを聞いて、トマスは険呑ににらみつける。にらみつけられたケヴィンは、その視線を見つめ返した。
「わたしは生涯、シグルド国王陛下の側近でありたいと思っています。ですが、国王陛下の手足となる側近と、国王陛下に助言を与えるべき立場にある公爵とを両立させることはできません。端的に表せば、側近は国王陛下の言うなりであるべきもの、公爵は国王陛下の言うなりになってはならないものといえます。この対極にある役目を一手に担うのは難しく、またこの二つの役目を両立させることに多くの貴族が反感を覚えるはず。どちらかの役目は別の者に譲れと迫ってくることでしょう。ですからわたしは先に選びます。シグルド陛下の側近を」
公爵位を捨てることに少しも惜しむ気持ちを見せないケヴィンに、トマスの怒りはつのっていく。
「側近など他の誰でもできるではないか！」
父の怒りを静かな面持ちで受け止め、ケヴィンは淡々と話した。
「そうだと思います。ですが、わたしはこの役目を誰にも譲りたくないのです。――父上は覚えておられますか？　シグルド殿下は王子としてふさわしくないとのうわさが広まったときのことを。父上はこうおっしゃられました。“シグルド殿下はやむなき事情あって我が家でお育てすることになったが、れっきとした王子殿下だ。シグルド殿下を主と思い誠心誠意お仕えしなさい”と」
十六年も前のことを言われて、トマスは虚を突かれたように表情

から怒りを消す。
　無表情だったケヴィンの顔に、わずかばかり笑みが宿った。
「そのときからわたしはシグルド様にお仕えしてきました。仕える者として誰よりもシグルド様の信頼を得ていると自負もしています。ですから、シグルド様が国王陛下になられる前から、公爵位を放棄することはずっと考えていたのです。
　シグルド様が国王陛下になられる前は、父上がそうであったように、わたしも公爵の位に継げばシグルド様の味方ばかりしていられなくなると思いました。シグルド様の立場のためにつき離さなければならない場面も必ず訪れる。それを思うと公爵位を継ぐ気にはなりませんでした。わたしも直系としての義務は理解しています。以前は公爵位を放棄することはできないと考えていました。
　ですがシグルド様を戦場に行かせておいて、わたしは王都に残らなくてはならないという状況になったとき思い知ったのです。わたしは殿下のもとを離れられないと。
　そうして苦しんでいたとき、彼女は言ってくれました。“このまま何の努力もせずに、みすみす殿下を見送ることになってもいいんですか？”と。そしてわたしに後悔してほしくないと言ってくれました。それで決心がついたのです。後悔しないために精一杯努力しようと。努力して、それでもかなわなければあきらめもつきます。彼女は、わたしを悩める苦しみから救ってくれたかけがえのない人なのです。父上にもそのことをどうかご理解いただきたい」
　最後の一言は、さきほどアネットのことを“たかだか一人の女”と言った父トマスへの苦言だ。これ以上直接的に抗議はできない。父に“たかだか”と言わせる原因はケヴィンにあるからだ。ケヴィンの発言が父には愚にしか映らないから、ケヴィンが愚に走った原因と思われてしまったアネットがやり玉にあげられた。
　父に認めてもらえるよう、努力していかなければならない。認められてほめられたとき、“わたしのパートナーの支えあってのことです”と胸を張って言えるように。

ため息をついて椅子に座り直したトマスに、ケヴィンは話を続けた。
「公爵位はアランデル侯爵に譲ります。わたしが公爵位を継ぐことなくあるいは後継者を残さず死んだ場合はそのように取り決められているのですから、順当でしょう」
「だが、おまえは生きて帰ってきた」
トマスの言葉に苦渋がこもる。
「ですがわたしはシグルド陛下の側近となる道を選ぶのですから、公爵家にとっていないも同然です。そうして空いたアランデル侯爵位にはアランデル侯爵位を継ぐ予定となっていたグロスタ侯爵を迎え、空位になったグロスタ侯爵位はその次の家格であるクレンネル侯爵に引き継ぎます。家格が上がることを喜ばない貴族はまずいない。家格を上げるためと聞けば、もろ手を上げて賛成はしなくても反対意見をつぐむことはしてくれるでしょう」
「そうやって血族の家格を一つずつ上げていくというのか？　家格の順序を間違えず、承諾を取り付けるための根回しをしなければならないことを考えると膨大な作業となるぞ」
「覚悟の上です。努力すれば願いがかなうのならば――いえ、叶わないかもしれなくても努力したいのです。この件に関しては勝算は十分にありますが」
「おまえの血筋を残す問題はどうする？　血統至上主義の者たちはおまえの血が失われることを黙ってはいまいぞ」
「……アランデル侯爵夫妻の間には後継者が産まれません。ですから婚外子となるわたしの子を養子としてもらい、正式な夫婦の娘としてその夫に跡を継がせてもらうようすでに話をとりつけてあります。わたしの愛する女性は“身分は庶民であるが、子爵家の血筋を引く者”なのだそうです。わたしの正式な妻にするのは難しくても、わたしと彼女の間に生まれた子ならアランデル侯爵夫妻の養女という身分を与えれば、次々代の公爵の伴侶としてそれほど反対はされないでしょう。――反対されたとしても、必ず収めてみせます」

息子の決意の固さをさとったトマスは、机に両肘をついて頭を抱えた。
「養女……女か」
「一歳になったばかりです。わたしにとてもよく似ています」
「おまえに似ているということは、相当の無愛想なのだな。女なのに難儀なことだ」
顔を隠す腕の隙間から、トマスの唇の端がほほえみに上がるのを見て、ケヴィンの固い表情も自然にほころんだ。

――・――・――

「ほ、ほんとだ！　ケヴィン、おまえそっくり！」
ベビーベットをのぞき込みながら、ヘリオットが腹をよじって声をできるだけおさえて大笑いする。ケヴィンは連れてくるんじゃなかったと言わんばかりに不機嫌な顔だ。
そんな二人をながめつつ、アネットはどう反応したものかと様子見しながらお茶の支度をした。
「用は済んだだろう。もう帰れ」
会わせてくれなければこのことをバラすと脅されて、ケヴィンは仕方なくヘリオットを連れてきたらしい。
もうずいぶんと遅い時間だ。今は仕事が忙しく、二人揃って王城を抜け出すにはこの時間くらいしかなかったのだという。
見知らぬ人がやってきたものだからエイミーは目を覚まし、泣きもせずきょとんとヘリオットを見上げていた。赤ん坊にしては表情が乏しいのに気付いて、それがヘリオットのツボにはまったのだろう。腹を押さえて必死に笑いをこらえながら、ソファまでやってくる。
ヘリオットは一人掛けのソファに座りながら、紅茶を差し出すア

ネットに苦笑を向けた。
「そうそう。アネットちゃん、ダメじゃないか。三年も前の薬なんか飲んでちゃ」
「レミナさんたちにも言われたんですが、そういうものだったんですね。最初から乾いた粉だったから、古くなっても効き目は変らないものだとばっかり」
「アネット。ヘリオットからは二度と物を受け取るな。こいつはわたしの知り合いの中でも一番信用できないやつだ」
アネットにすかさず注意を促すケヴィンに、ヘリオットはにやけ顔で文句を言う。
「えー？　ひどいなぁ。俺が避妊薬を欲しがったのをレミナサンが覚えててくれたから、アネットちゃんの世話をしてくれたんじゃないか。そのおかげでアネットちゃんとエイミーちゃんが無事だったのに」
ヘリオットの言う通りだ。ヘリオットの知り合いだと気付いてもらえなかったら、レミナに放っておかれたに違いない。ロアルは酒場の主人に口を利いてくれようとしていたけど、酒場の主人はロアルの頼みに対して困っていたようだった。だからあのときレミナと遭遇できたのはほんとにらっきーだったのだ。
ヘリオットから避妊薬をもらったからアネットはケヴィンと一夜を過ごし、そのためにエイミーができて邸を出なければならなくなったとき、ケヴィンを生涯の主人とあおぐロアルが邸を抜け出したアネットを勘働きだけでほとんど偶然に見付けてくれて、ロアルのつてで訪れた酒場の目の前で偶然ヘリオットに避妊薬を融通したレミナと出会う。
縁は思わぬ形でつながっているとつくづく思う。
この縁に、アネットはちょっと感動を覚えるくらいだけど、アネットの隣に立つケヴィンはそうではないらしい。ほんのちょっとだけどいまいましそうな顔をして、ヘリオットを見下ろす。
「そもそもおまえがアネットに怪しげな薬を渡していなければ、こ

んなややこしい話にはならなかったんだ」
　ケヴィンは、アネットが避妊薬を持っていなかったら、その効果を信じることもなく、ケヴィンと結ばれたアネットをそのままにして行かなかっただろうとでも言いたいんだろうけど。
　二年前にあたしが言った言葉、覚えてないのかな？
　アネットは空とぼけた調子で口を挟む。
「ヘリオット様から薬をもらってなかったら、あたしはきっとケヴィン様のお願いを聞いてなかったです。そしたらエイミーは生まれなくって、あたしは今でもまだクリフォードのお邸に勤めてて、ケヴィン様に申し入れされても受け入れなかったですよ。ケヴィン様のそばにいられればどんな形でもよかったんで、わざわざこちらのお邸に身を寄せさせてもらおうなんて考えなかったに違いないですから」
　下町のアパートでケヴィンの申し入れを受け入れたのは、ケヴィンの熱意に負けたということもあるが、側にいたかったからということもある。これから一生ケヴィンの近くにいられないと思うのがつらくて、その気持ちが受け入れの後押しになったように思う。
　ケヴィンはやはりアネットと結婚はできないという。アネットも側にいられるなら形にこだわらない。それが元の、邸の主人の息子と邸につとめる下働きという関係のままでもかまわなかった。そうであったなら、アネットにケヴィンの申し入れを受け入れる理由がなかったと思うのだ。
　アネットの考えていることが何となくわかったのか、ケヴィンは眉をひそめて黙り込む。
　ケヴィンは認めたくなさそうだけど、ヘリオットがいなければ“今”はきっとなかった。
　ふと思い出す。
「そういえば、ヘリオット様に聞きたいことがあったんですよ」
「何？」
「初めてあたしと会った頃、やたらと誘いをかけてきましたよね？

あれってどうしてなんですか？」
カップを手に取りながら、ヘリオットは面白げに眉を上げる。
「ああ、あれ？　堅物が気にする女の子ってどういう子かなぁって思って探りを入れただけ。さすが堅物が選ぶだけあって、君もお堅かったね」
「あれってそういう意味だったんですか。てっきりケヴィン様のことを心配して、あたしを陥れようとしてるんだとばっかり」
アネットが思い違いをしていたことを残念に思っていると、ヘリオットは苦笑して片手をひらひらと振った。
「やだなーアネットちゃん。男が男を心配するなんて、気色悪いこと言わないでよ」
ヘリオットの視線がちらっとケヴィンに向くのを見て、アネットは思わず吹き出しそうになる。
「それ、ケヴィン様の前で言っちゃダメですってば」
気色悪いとは思わないけど、ここに男が男を心配する代表格ともいえる人がいることに気付いて、こみあげてくる笑いが押え切れない。
ヘリオットと控えめに笑い合っていると、普段から低いケヴィンの声がさらに数段低くなった。
「ヘリオット、いい加減に帰れ」
「はいはい。夜の貴重な時間にお邪魔して悪かったよ」
紅茶をぐっと飲み干し、ヘリオットはソファから立ち上がる。扉を開けて部屋を出ていく間際、ヘリオットは振り返ってケヴィンにやっと笑いかけた。
「そんじゃま、ごゆっくり～。“夫婦”の貴重な時間を邪魔しちゃったお詫びに、明日は遅めに来ればいいからね」
ヘリオットが何を言っているか気付いて、アネットはぽっと頬を赤らめる。扉が閉まった後ケヴィンと顔を見合わせたが、ケヴィンの表情にわずかに浮かぶ動揺を見て恥ずかしさが増し、アネットはエイミーにかこつけてケヴィンの側を離れる。

一度起き出してしまったエイミーは、乳母に寝かしつけられて再び眠りについていた。
「ありがとうございます。すみません、夜遅くに」
「これが仕事ですから、気になさることないですよ。それよりも、久しぶりにケヴィン様がこちらにお泊りになられるのですから、お二人水入らずでお過ごしになられたらどうですか？　イリーナお嬢様も“二人目”を楽しみにしておられますし」
アネットはよけい真っ赤になる。そうなのだ。イリーナはエイミーを生まれた時から育てられなかったことを残念に思い、ことあるごとに二人目をせっついてくる。これぱっかりは一人でできることではないし、ケヴィンに協力してくださいなどと言えるわけがない。
ヘリオットといい、この人といい、何でそんな恥ずかしいことをケヴィンもいる場所で言えるのか。
ベビーベットをのぞき込んだまま硬直して冷汗を流しそうなくらい緊張していると、不意に腰に回された腕に、後ろへと引っ張られた。
「エイミーのことを頼む」
「かしこまりました」
「アネット、部屋に引き上げるぞ」
「え？　あ？」
アネットがうろたえているうちに、ケヴィンは腰に回した腕でやや強引にアネットを押して、さっさとこの部屋――子ども部屋を出てしまう。そしてすぐ隣のアネットに与えられた部屋に押し入るように入ると、アネットを向きあうように立たせてぎゅっと抱きしめてきた。
「――まったく、いまいましいな」
……こういう時に口にする言葉じゃないと思う。腕が少しゆるめられたので体を離して眉をひそめながら見上げると、いまいましそうに眉をしかめるケヴィンがアネットを見下ろしている。
「お膳立てされてしまっては、逆にやりにくい」

そう言いながらも、ケヴィンはアネットの唇に唇を寄せる。ケヴィンが近づくのに合わせてアネットが目を閉じると、唇がやわらかい感触に包まれた。ついばむように与えられたその感触に、やがて湿っぽいものがまじるようになり、湿ったもので唇の合わせをなぞられる。その感覚に身を震わせ思わず口を開けば、ケヴィンの舌がアネットの口腔に忍び込み、内側を丹念になめられていく。

口内から全身に広がるしびれ。唾液と唾液が混ざり合い、あふれる。

喉の奥にためきれずこくり飲み干すと、ケヴィンはようやく唇を離した。

「また、しばらく来られそうにない。――いいだろうか？」

アネットは上がる息を整えながら苦笑して、ケヴィンの胸にしがみついていた手を背中に回した。

「そーいうことは聞かなくてもいいんですってば。……夫婦じゃなくても、あたしにとってケヴィン様は旦那さまなんだから」

「――そうか」

ケヴィンはうれしそうに目を細め、再びアネットに口づける。

その後固く抱き合ったまま寝室に移動し、二人してふかふかなベッドの上に沈み込んだのだった。

四章―9

アネットはアランネル侯爵夫人イリーナの友人として、また、ケヴィンの内縁の妻としてアランネル侯爵邸の住人となった。

結婚まで至らなくても、貴族と使用人の恋愛が成就したという話は可能な限り公にしないほうがいい。それを聞いた使用人の立場の者たちが夢を見て邸内の秩序を乱す恐れがあるし、そうしたことを危惧する貴族たちは、貴族と使用人の恋愛をことさらに嫌うからだ。

――一部の者たちの場合は表向きそういう態度を取るだけで実は……ということがあったりするのだが。

そのためアネットは、クリフォード公爵家の使用人たちに見られて素性を明かされてしまわないよう、邸の外に出ることはなかった。来客の目に止まることもはばかって、訪問客があると聞くと部屋に閉じこもり、帰るまで息をひそめるように部屋にこもっている。

そうした生活は傍からは不自由に見えるのだが、アネット自身は特に不便を感じることもなく、イリーナはアネットを本当の友人に思ってくれて連日のように遊びに来てくれるし、エイミーの世話を乳母に手伝ってもらえることもあって悠々とした日々を送っていた。

そうした生活が始まって三年が過ぎたころのこと。

アネットが夜なべをしているところに帰ってきたケヴィンは、アネットが袋の中に隠しきれなかったけばけばしい赤色のドレスを目にして、手のひらで額を押さえてうなだれた。

これは下街でしていた繕い物の仕事だ。アパートを引き払うとき、請け負った仕事は断れないとアネットが言い、ケヴィンはしぶしぶ承諾して繕い物も侯爵邸に運んだ。繕いの済んだ衣類はロアルがこっそりと運んでくれたが、ロアルはアネットに仕事を頼みたいという者たちを断り切れず、新しい仕事を持ってきてしまうのだ。よくしてもらった恩があるからとアネットが言えば、アネットに苦労を

かけた負い目のあるケヴィンに止められるはずがない。
こうしてアネットは、今も仕事を続けていた。
許可はしていても、仕事を続けることにケヴィンはいい顔をしない。わかっているからアネットもできるだけ見せないようにしていたが、今夜はここへ帰ってくるとは思わなかったので油断していた。
だけど、いつになくへコんだ様子のケヴィンに、アネットは首をかしげる。
いまさらな反応のような気がするんだけど……。
「ごめんなさい」
とりあえず謝ってみる。するとケヴィンはもう一方の手を軽く上げた。
「いや、少々疲れを覚えただけだ」
それは大変と、アネットは見えなくなる程度にドレスをしまい、さきほどまで座っていたソファにケヴィンを座らせる。
「紅茶かお酒を用意する？」
内縁の妻になって三年もたてば、口調もすっかりタメ口になる。ケヴィンはむしろ、そうやってアネットが自然な態度でいてくれることを好むらしい。今では下手に敬語を使うといぶかしがられるくらいだ。
「いや、いい」
それっきり黙り込んでしまうので、アネットは仕方なしにケヴィンの隣に座る。
「今日は遠方の所領から出てきたご令嬢が到着した日よね？　お世話しなきゃいけないだろうから今晩は来ないかと思ってた」
ケヴィンはある令嬢の話を聞き付け、二十日ほど前、王都から遠く離れた実家の所領に暮らす令嬢を訪ねていった。それから十日ほどして戻ってきたケヴィンは「首尾よくいった」と言って割合機嫌がよかったのに。
「……もしかして令嬢に不都合があって到着されなかったとか？」
「いや、予定通り到着した」

だったら何でこんなに疲れてるんだろう……？
上着のそでを引っ張って話の先をうながすと、額に手のひらを当てたままケヴィンは話し出す。
「長らく田舎で貧乏暮らしをしていたせいか、妙なところがある令嬢なんだ。所領を訪ねていったときもどこかおかしいとは思っていたが……」
ヘコむケヴィンを久しぶりに見た。前回は王子様を戦場に行かせて自分は王都に残らなければならない状況の時だったか。めったに落ち込んだ様子を見せないケヴィンを落ち込ませる令嬢とは……なかなか見どころあるのではと思ったのは、ケヴィンには内緒だ。
「でも、ケヴィンが理想通りだって言った令嬢なのよね？　多少の妙は目をつむればいいんじゃない？」
敬語をやめても最初のうちは“様”をつけていたのだけど、イリーナのことを“様”つけで呼ばなくなっているのに気づいたケヴィンにつけるのをやめてほしいと言われた。どうやらイリーナと親しげに呼び合っているのを妬かれたようだ。夫婦同然になる前には気付かなかったそんなかわいい一面を知って、アネットはたまらなくうれしかったりする。
「目をつむって何とかなることならいいのだが……」
ケヴィンにしては変に歯切れが悪い。少し考えてからアネットは尋ねた。
「どんなご令嬢なの？」
「十三の歳まで王都で暮らしていたためか、礼儀作法については問題ない。だが、五年間に田舎の所領でつちかってきた精神に問題がある。貴族の食事を豪勢だと言って気後れしたり、用意したドレスが贅沢すぎるからと実家から持ってきた庶民の服を着たがるし、使用人に着替えや風呂の世話をされるのを嫌がったり」
「あらら。あたしと一緒ね」
アネットもそうした貴族の暮らしになかなかなじめず、食事は一緒に食べる人と合わせなければと我慢したが、ドレスはエイミーの

世話の際に汚しそうでコワかったので無理を言ってその時だけエプロンをつけさせてもらっているし、着替えや風呂の手伝いは強行に拒んで今は誰もつかない。

ケヴィンはじろっとアネットを一瞥し、それから頭を抱えてしまう。

「おまけに暇をみつけては内職するんだ……」

これには声をたてて笑ってしまった。

「あはは。これだけの話だと、そのご令嬢とあたしってそっくりね」

「笑い事じゃない。貴族の令嬢が内職をするなんて前代未聞だ。やめるよう言うには言ったが、落ち着かないからやらせてくれと言われては……」

さらに吹き出しそうになってしまい、アネットは慌てて自分の口を手で覆う。

アネットも、繕い物の仕事は使用人に任せてくれないかとケヴィンに頼まれたことがある。

貴族の女性は、普通繕い物などしない。そうした仕事は使用人でも下働きのような下級の使用人がすることで、貴族が庶民のような仕事に手をつけるのは恥とされているからだ。アネットの扱いを貴族の女性と同じにしようとするケヴィンは、それが何かの拍子に外へバレて、ただでさえ内縁の妻ということでよく言われていないアネットをこれ以上貶めたくないと言う。けれど、今までエイミーの世話をほとんど自分でしていたのに、乳母がついてくれてすることが減った上に繕い物の仕事までできなくなると落ち着かなくてしょうがない。イリーナが趣味の刺しゅうや楽器をかなでるといったことに誘ってくれるが、働いてお金を得る生活が身にしみているアネットには、お金を稼がない生活が居心地悪いのだ。それもあって繕い物の仕事がやめられない。

きっとその令嬢も、内職でお金を稼ぐことが身についてしまっていて、やらなければどうにも落ち着けないのだろう。愛妾になるかもしれない女性だから、ケヴィンは彼女の評判が落ちるようなこと

はさせたくない。けれどアネットが繕い物をすることで心を落ちつけているということを知っているから、多分令嬢にもやめろと強く言えないのだ。
令嬢に振り回されているケヴィンに同情する気持ちもあるが、やっぱり笑いは止められない。
「そんなにあたしと似てるご令嬢がみつかるなんて、すっごい偶然ね。きっと国王陛下もそのご令嬢を気に入ってくれるわ。ほら、よく言うじゃない。兄弟は好みがよく似るって」
従兄弟同士だけど、まるで兄弟のように近しい間柄だから、きっとケヴィンが好ましいと思った令嬢は国王シグルドにも気に入られる。
釈然としない様子のケヴィンの頬に手を添えて、自分のほうに引き寄せながら、アネットは頬とあごの間辺りに軽くキスをした。
「何事も、なるようにしかなりませんって」
「――そうだな」
ケヴィンは口元に笑みを浮かべると、両腕で包み込むようにアネットを抱き締める。

あこがれだったふかふかなベッド。それも毎日ということになると、ふかふかすぎて寝付けなくて、ケヴィンがわざわざ可能な限りふかふかなベッドを用意してくれたというのに、早い時期に音を上げて少しマットの固いベッドに替えてもらった。
そのベッドに仰向けになったケヴィンは、素肌をさらした左腕でアネットの裸の肩を抱いてぶつぶつとつぶやいた。
「だいたい、陛下はまだ二十三歳なのだから、この先いくらでも世継ぎをもうけられるだろうに、周囲がとやかくうるさいから愛妾が必要だなどという話になるんだ」
ケヴィンはいつもこうだ。最中はこれでもかというくらい甘々しくしてくれるのに、気が済むと早々に現実へ立ち戻ってしまう。
ベッドになだれ込む前の話の続きなのだろう。

「世継ぎ問題があるにしても、他人の夫婦関係にそう口をはさんだところで、何とかなるものでもあるまいに。それを口さがない者たちがうわさであおりたてるから、話が難しくなっていくんだ。他人の色恋を騒ぎ立てる者たちの気が知れん」

ケヴィンの肩口に頭をすりよせていたアネットは、ケヴィンに寄りそって仰向けになり、肘をベッドについて頭を起こした。

「お城勤めする人たちにも、国王様や王妃様といったら雲の上の存在のような遠い方々だから、きっと物語を聞いて語り継いでいってるような気分なんじゃない？」

くすくす笑いながらアネットがこう言うと、ケヴィンは嫌そうにわずかに眉をひそめる。

「あたしが下働きだったころ、うわさは数少ない娯楽の一つだったわ。目新しいうわさにはすぐに飛びついて面白おかしく話し合って、それが毎日の楽しみだったの」

そのうわさ話の中で、アネットはケヴィンのことを知った。だからアネットがはじめてケヴィンに肩を貸したとき、アネットにとってケヴィンは知らない人じゃなかった。

知らない人じゃなくても、やはりアネットにとって遠い存在で。

あの時――十三年前のことを思い出すと、こんなにケヴィンとの距離が近いことがいまだに不思議でならない。

結ばれるはずのない人だった。

今でも結婚という結びつきがないから、完全に結ばれたとは言えない。でも今、こんなに近くにいて、　この先一生離れないで一緒にいられると信じられる。

かなうはずのない恋に苦しんだ。

身を引き裂かれるような思いをして離れようとしたこともあった。

一時の感情に流されてエイミーを宿してしまった時、もう二度と

会えないと涙した。
いろんなことがあったけれど、アネットは今、本心からこう言える。
あたしはらっきーだ、と。
捨てられたのにクリフォード公爵に拾われて、自分をいつくしんでくれたオルタンヌに育てられ、ケヴィンに出会って、エイミーを授かった。
エイミーを宿した時、アネットはあきらめたけどケヴィンはあきらめないでくれた。
おかげで、今この時がある。
これから先、何事もなく平穏に過ごせることはないだろう。でもこのしあわせは、これから先もずっと続いていく。
「……どうした？」
ケヴィンに声をかけられて、アネットはふふっと笑い声をもらす。
「あたしはほんとに、らっきーだなぁって思って」
急にそんなことを言い出したアネットに、ケヴィンはわずかに不審の表情を見せる。が、すぐに口元に笑みを浮かべて、ケヴィンの胸元に置かれたアネットの手を握り込む。
「君がらっきーなのは、君自身が頑張ったからだ。苦労をしてもいつも明るく前向きでいたから、君は幸運をこの手に引き寄せた。――わたしは、そんな君の側にいられて支えることができてしあわせだし、誇りにも思う」
ケヴィンの言葉に嬉しくなって、アネットは伸びあがってケヴィンの唇に口づけた。
――・――・――

ほしいと思ってなかった時はたったの一回だったのに、ほしいと思うときはなかなかできないのが不思議なところだ。
アネットがアランネル侯爵の邸に身を寄せ、ケヴィンの内縁の妻になってからもうすぐ四年になる。
ケヴィンが多忙を極めあまり夫婦生活を営めなかったということもあるが、なかなかアネットにその兆しが見えず、先ごろようやく第二子に恵まれたことが判明した。
「タイミングからしたら、あのときの子よねぇ？　あたしたちって危機的状況に追い込まれないと子どもができなかったりするのかも？」
二人きりの時アネットがこっそり言うと、ケヴィンもそう思ったのか眉間にしわを寄せ難しい顔をする。

ケヴィンを悩ませたかの令嬢は、見事国王の心を射止め愛妾になった。
そのあといろいろあって、――そう、いろいろあってアネットとケヴィンも危機的状況に追い込まれたのだけど。――それらがすべて解決したところで、令嬢はついに国王とゴールインした。

ゴールインしてほどなく、令嬢は待望の第一子を懐妊する。
そして出産を控えた女性同士の内々の集まりが催されることになり、そこにアネットも招待された。

「――何で？」
「……ヘリオットが口を滑らせたんだ。わたしの妻も現在妊娠中だと」
ケヴィンは渋い顔をして説明するが、問題はそこじゃない。
アネットは身分を偽ってはいるが、その偽りの身分も子爵家の血

を引く庶民でしかない。ケヴィンの正式な妻でもないのだから、身分的に王城に上がることも高貴な身分の方に謁見するのも許されない立場だ。
「そうじゃなくて、あたしが招待されてもいいの？」
「その集まりにはヘリオットの妻も参加する。格式張ったものにはならないから安心していい」
「あ、ヘリオット様の奥さんも懐妊したんだ」
「ああ。まだまだ人手が足りない時に困ったものだ」
「それ、奥さんに言っちゃダメよ。妊娠中はデリケートなんだから」
「……」
黙り込んだということは、すでに手遅れかそれに近しいことをしてしまった後なのかもしれない。でも反論しないということは反省しているだろうから、気付いてないふりをする。
ケヴィンは咳払いをして話を切り替えた。
「ともかくわたしが同行するから、君は心配しなくていい。問題はヘリオットの失言のせいで、予定外に君のことが陛下に伝わってしまったことだ」
「ケヴィンがなかなか打ち明けられないでいたから、きっかけを作ってくれたんでしょ？」
「……」
これも図星だったらしい。ヘリオットとはしばらく会っていないけど、相変わらずのようだ。
「それでどうする？」
「え？」
「これは招待であって命令ではない。行く行かないは君が決めていい。だが、できれば招待に応じてくれないか？　君のことを長年黙っていたことで陛下に不興を買ってしまって、政務に支障が出る有様なんだ。君と会うまで口を利かないと」
そう告げるケヴィンの様子がまたもやヘコんでいるようで、アネットはついつい笑ってしまった。

「もちろん行くわよ」
アネットが笑うと、表情に乏しいケヴィンもわずかに顔をほころばせる。

アネットがただの下働きだったら絶対に会えるはずのなかった、ケヴィンの愛しの王子様と、その王子様をしあわせにしたお姫様に会える。
積み重なっていくらっきーに、アネットはしあわせをかみしめた。

第四章　完

らっきー♪　完結

アランネル侯爵邸滞在一日目の夜（前書き）

ここからおまけになります。
題名そのまんまです（笑）　本文中にＲ１５シーンが少なかったので頑張ってみました。最中（笑）ありますが、Ｒ１８には触れない程度の描写です。苦手な方はご注意ください。

アランネル侯爵邸滞在一日目の夜

アランネル侯爵の邸にお世話になることになった一日目。夕食を終えてからエイミーのいる部屋に通してもらった。

エイミーは着飾ったアネットにしばらくの間戸惑った様子だったが、そのうち慣れてアネットに抱きついてくる。

「あ、よだれがついちゃう」

綺麗なドレスは見ている分には好きだけど、つくづく実用的じゃないと思う。汚れたりしわになったりするのが気になって、エイミーの相手も満足にできない。

抱きしめるのもためらっているアネットに、ケヴィンが声をかけた。

「汚れたら洗えばいいだろう」

「ドレスは洗えないんですってば。繊細な布地を使ってたりするから、一度水に浸けたらそれだけでダメになってしまうんです」

「そうか」

「エイミーの世話をしている時は、エプロンをしてもいいですか？」

「……」

黙り込んでしまったケヴィンを見て、アネットはエプロンをつけてほしくないんだなと納得する。確かに、フリルやレースのついたきれいなドレスにエプロンは似合わない。……ケヴィンがいない時だけこっそりつけようとアネットはもくろむ。

あとは始終エイミーについていてくれそうな乳母や、頻繁にここを訪れそうな侯爵夫人からどう了解を得ようかと思案していると、ケヴィンに膝の上にいたエイミーをひょいと取り上げられた。

毛足の長いマットの上にあぐらをかいているケヴィンは、組んだ足の上にエイミーを置いてじっと顔をのぞき込む。男の人とあまり接したことのないエイミーは、怖れをなしたようにただケヴィンの目を見返していたが、そのうち動き出してケヴィンの足の上から降

りて太ももの上によじ登ったり、ケヴィンの指を興味深そうにいじったりかじったりをはじめた。やがてうとうとしだして、ケヴィンの腕の中ですやすやと眠りにつく。

おだやかなエイミーの寝顔をしばし優しい目で眺めていたケヴィンは、ふと顔を上げてアネットを見た。

「今日は疲れただろう」

「そうでもないですよ」

荷物をまとめるのはほとんどロアルがやってくれたし、アランネル侯爵邸まで馬車で移動できたし、疲れる要素はどこにもない。けれど、お風呂に入れられて洗われてしまったり、着たことのない――一度だけ、ケヴィンの寝室に送り込まれた時にちょっとの間着てたけど、あれはカウントしないということで――ドレスを着てお上品な夕食の席に着いて。それでずいぶんと気疲れをしてしまったような気がする。

心の中でひとりごちてると、ケヴィンは「そうか」と言って、エイミーを抱いたままそっと立ち上がり、静かにベビーベットに運んだ。

「あとを頼む」

「かしこまりました」

アネットをよそに乳母と言葉を交わす。

またエイミーから離れなくてはならないんだろうか。不安を覚えながら振り返ったケヴィンを見つめると、ケヴィンはほんのわずか苦笑めいたものを表情に浮かべ、マットの上に立ちすくんでいるアネットに言った。

「もう休もう」

マットに上がるために脱いだヒールに足を差し込みながら、アネットは戸惑う。エイミーと一緒に寝られないということだろうか。

ヒールを履き終えると、ケヴィンはアネットの肩に手を回して歩き出す。廊下に続く扉に向かうのに不安を覚えて傍らのケヴィンを見上げるけれど、ケヴィンはアネットの視線に気付きながら何も言

わない。廊下に出たところでかろうじて「ここは子ども部屋だ。君の部屋はこちらになる」と言って隣の部屋に連れ込んだ。
「あのっ、あたしってエイミーと別の部屋で寝るんですか？」
扉を閉めるケヴィンにアネットが慌てて背後から尋ねると、振り返ったケヴィンは気まりわるそうな顔をして言った。
「普段はエイミーと一緒に寝てくれてもかまわない。……だが、今夜はわたしと一緒にいてくれないか？」
えっと、それって――。
顔を赤くするアネットを抱き締め、ケヴィンは耳元にささやく。
「もう一人子どもがほしいんだ」
――は？
甘い雰囲気も何もなく直接的に言われ、アネットはぽかんとする。開いたその口にケヴィンの唇が覆いかぶさり、二年ぶりのキスは最初から深くなる。歯列の奥にまでケヴィンの舌が入り込み、アネットの舌をからめとる。
アネットはケヴィンとしかキスをしたことがなく、泥酔したケヴィンに押し倒された時のことを含めてもこれで四回目。巧みに口腔を刺激され、呼吸もままならずにすぐにぼうっとしてしまう。
ケヴィンにしがみついていられなくなってその場に崩れ落ちそうになると、背中に回された腕がアネットを支え、そのまま抱え込まれるようにして寝室に連れていかれる。
“妻”になるのを了承したからにはこういうことを嫌とは言わないけど、展開の早さについていけなくてまともな反応を返せない。
ベッドの端に座らされたと思ったらのしかかられて、自然に後ろに倒れ込んだ。キスが再びはじまり、ドレスの胸元を合わせる紐がするすると解かれていく。
前の時には気付かなかったけど、これって、これって――！
唇が離れた時、息も絶え絶えにアネットは言った。
「ケヴィン様って、あたし以外の人とも経験がありますよね！」

紐をほどく手がぴたりと止まり、唇を耳元へずらそうとしていたケヴィンは顔を離してアネットの瞳を凝視する。
「……どうしてそのようなことを？」
「聞いたことがありますもん！　経験がないと服を脱がすにしたって上手くいかないって」
ケヴィンの目がすうっと細くなる。
「誰から聞いた？」
常から低いのに、ことさらに低くなる声。
な、何かまずいこと言っちゃった？
ひやひやしながらアネットは答える。
「し、下働きしてた時、仕事中にそういう話題も何度か聞いたことがあるんです……」
おかげでアネットは、初めての時も何とかパニックにならずにすんだのだが。
あたしってバカ。自分から耳年増だってバラさなきゃいけない状況作ってどーするのよ……。
結婚していたわけでもないのにこういうことに詳しい女を、ケヴィンはどう思うだろうか。
おそるおそる様子をうかがうと、ケヴィンはアネットをにらみ付けるようにしながらもう一度尋ねてきた。
「男から聞いたわけではないんだな？」
質問の意図がわからないまま、アネットはこくこくうなずく。するとケヴィンは安心したように表情をゆるませる。
ずるいと思う。めったに表情を動かさない人だから、奇跡のように見せられるやわらかな笑みに、何もかも忘れてぼうっと見入ってしまう。
その隙にケヴィンはアネットの唇の端にキスを一つ落とし、さきほどの続きを再開した。
耳元に吐息を吹きかけ、耳朶を口に含み舌先で転がす。ドレスの前合わせは完全に解かれ、大きくて固いケヴィンの手がドレスの中

に忍び込み、布製のコルセットの上から胸をもみしだく。
好きな人に他人に触れさせることのない場所を触れられて、ぞくぞくとした感覚が背筋を這う。
「あ、の」
それでもさっきの問いに返事をもらっていないからと声をかければ、ケヴィンは顔を上げてそれを制した。
「もしかして、わたしとこういうことをするのが嫌なのか？」
思いがけないことを言われ、アネットは慌てて首を横に振る。ケヴィンはそれを見て、ほっとしたような、困ったような笑みを見せた。
「なら、おとなしくわたしに身をゆだねてくれないか？　君とこうすることを、ずっと焦がれてきたんだ」
……ホントにずるいと思う。そんなこと言われたら、展開の早さに戸惑う気持ちも申し訳なく思ってしまう。
アネットは気持ちがまだついてこなくてためらう気持ちを押さえ込んで、ケヴィンの首に腕を回した。

回した腕を引っ張られるように体を起こされて、ドレスもいつの間にか紐を解かれていたコルセットも、ペチコートも、すべての衣服が取り払われる。
ケヴィンは床に落としたアネットの衣服の上に、自分の上着とシャツを無造作に落とした。
前の時もそうだった。床に落とすのさえもどかしそうに、性急に衣服を脱ぎ捨てる。
アネットはその様子を、素肌をさらす腿をすり合わせ、両腕で胸を隠してぼうっと見つめた。
ブーツを脱ぎ、ズボンのベルトをゆるめながら振り返ったケヴィンは、アネットの視線に気付いて照れをごまかすように顔をしかめる。ベルトをゆるめたズボンをそのままに、ケヴィンはアネットに覆いかぶさり、あごを持ち上げてキスをした。キスの最中に抱きし

められ、アネットは再びベッドに押し倒される。
ここは広いベッドのはじっこで、ケヴィンは片膝だけをベッドの上に置き、不安定な体勢のままキスを続け、手のひらをアネットの体に滑らせる。
そんな切羽詰まった様子も、求めてくれるからだと思えば気持ちは高まっていく。
飽くことなく与えられる口づけが、触れ合う素肌の温かさが、心を、体を満たしていく。
やがて唇へのキスは終わり、ケヴィンの唇は耳元から順にアネットの体を下っていった。
時折吸いつかれ、ぴりっとした甘い痛みが得も言われぬ感覚をアネットの身の内に呼び起こす。その感　覚がたまらず、体をのけぞらせると、ケヴィンは持ち上がったアネットの胸元に顔をうずめた。
愛撫は次第に激しくなっていく。

一度想いを遂げ、出産も経験したにもかかわらず、長らく触れられたことのないその場所はきつく閉じ、再びつながるまでにかなりの時間を要した。
多少の痛みを伴いながらも一つになれた時、アネットのまなじりから涙がこぼれる。
前回が最初で最後だと思ってたから、この瞬間をとてもいとおしく思えて。
「痛むか？」
鼻先が当たりそうなほど間近で、ケヴィンがささやくように問いかけてくる。アネットは首を横に振った。
「いいえ」
痛むから涙が出るんじゃない。
「嬉しいんです。嬉しくて……」
これ以上言葉にならない……。
言葉の代わりにほほえめば、ケヴィンもほほえみを返してくれる。

口づけられ、抱きしめられて、あとはただ互いの想いをぶつけ合うように、激情に飲まれていった。

激情が過ぎれば穏やかな時間が訪れる。
抱きしめられうとうとしていると、ケヴィンがぽつんと口にした。
「君以外に経験がないとは言わない」
何の話かと思って顔を上げれば、気まずそうなケヴィンの視線とかちあう。
どこか困ったようにも見えるその顔にいたずら心が芽生えて、アネットはついこう返してしまう。
「それって“あたし以外にも経験がある”って意味ですよね？」
ケヴィンは動揺して喉をつまらせる。そして観念したようにまぶたを閉じた。
「はじめての時、君にひどく痛い思いをさせてしまっただろう？……戦場には商売に来る女性がいて、彼女たちが手ほどきをしてくれるというので、それで……」
「彼女“たち”ねぇ……」
商売にしていた人たちと親しくしていたし、男の人にはそういうのが必要な時があると聞いたこともある。一度は逃げたアネットが文句を言う筋合いはない気もするけれど、こういう時のケヴィンを知っているのがアネット一人ではないのが残念でならない。
アネットが不満を隠さずにつぶやくと、ケヴィンはぎくっと体を震わせる。
「はじめての時も、割と手慣れてるような気がしたんだけど……」
ケヴィンは手のひらで自分の目元を覆った。
「それは……」
何だかかわいそうになってきて、アネットからフォローを入れてみた。
「どうせヘリオット様にそそのかされたんでしょ？　練習しとくべ

きだとか言われて」
「……」
「あたしとしては……練習もあたしとしてほしかったです」
ちょっとだけうらみがましく言うと、ケヴィンがぎゅっと抱き寄せてきた。
「すまない。二度と他の女性を抱かないから。だから約束してくれないか？　――君も、わたし以外の男性に抱かれるようなことはしないと」
そんなこと、当たり前なのに。
アネットは思わず笑ってしまう。
このタイミングで笑い出したことを不審に思ってか、ケヴィンは体を離してアネットの顔をのぞき込む。不安そうにするケヴィンに、アネットはほほえんだ。
「結婚できなくても、あたしはケヴィン様の妻ですよね？　他の男の人に抱かれたりなんかしたら不貞になっちゃうじゃないですか」
アネットがそう言っても、ケヴィンは不安顔を崩さない。
さっき、「男から聞いたわけではないんだな？」と言ったケヴィンは、アネットにそういう話のできる深い仲の男がいることを恐れたのかもしれない。
居もしない男の影に不安を覚えるケヴィンが、アネットにはかわいく見えてしまう。
しょうがないなと思いながら、アネットはきっぱり言い切った。
「ていうか、ケヴィン様以外の男の人に抱かれるなんて嫌です」
「そうか」
ケヴィンは嬉しそうに目を細め、アネットをさらに抱き寄せて額に唇を寄せた。

翌日、アランネル侯爵夫人イリーナは、ケヴィンがしてくれなければならなかった話を終えてからこう言った。

「それで、わたくしも条件を出したの」
陽気に言われ、アネットは何やら嫌な予感を覚える。
「……何ですか？」
おそるおそる問うと、イリーナはにこにこと答えた。
「あなたとケヴィン様のお子を生まれた時からお世話したいの。エイミーもかわいいけど、もう一歳を過ぎてしまったでしょう？　ほんとうは生まれてすぐの時に抱っこしたかったのよ。だからもう一人ほしいってケヴィン様にお願いしたの」
あの直接的な話が持ち出されたのはそれでか！
アネットは頭痛を覚えて、軽くうつむき額に手を置く。するとイリーナはにまにましながらアネットの顔をのぞき込んだ。
「ケヴィン様は、さっそくわたくしの願いを聞き届けてくださったのかしら？　二年ぶりの逢瀬ですもの。さぞかしあつ～い夜だったんでしょうね」
「……」
他人の話を聞くのは慣れていても、自分が当事者となるといたたまれないことこの上ない。
うつむいたまま黙っていると、イリーナは自分の鎖骨の下辺りを指先でとんとんと叩いてみせた。
「採寸の時、下着を脱がなかったから誰にも見えてないって思ったのかもしれないけど、このあたり、ちらちら見えてたわよ」
アネットは勢いよく顔を上げ、イリーナが示した所と同じ場所をとっさに手のひらで隠す。真っ赤になって口をぱくぱくさせるアネットに、イリーナは無邪気な笑顔を見せた。
「こういうお話のできるお友達がいなかったから、あなたが来てくれて嬉しいわ。名目だけではなくて、ほんとうに仲良くなりましょうね、アネット」
こういうお話って、どーいうお話がしたいんだろう……。
首根っこをつかまえられた小動物のような気分になって、アネットは空笑いしてごまかした。

――・――・――

後日。
再び話題を持ち出され、戦々恐々としたアネットに、イリーナはけろりとして言った。
「ちょこっとだけ深い恋バナができればいいなって思っただけよ？根掘り穴掘り聞くわけないじゃない。やあね。それで怯えてたの？」
そう言ってころころと笑う。
脱力しながら、アネットはこれからもこの人に振り回され続けるだろうことを予感し、こっそりため息をついた。

おそまつさまでした。。。

公爵令嬢の婚約者　1／4

何故だ？　何故なんだ……！？

今宵、主役の傍らに立ったグロスタ侯爵の長男フィリップは、頭の中でそう問いかけていた。

今いるのは、本日十六歳になるクリフォード侯爵令嬢エイミーの誕生日パーティー会場。

貴族の娘は十六歳になると社交界への参加を認められるようになる。我がラウシュリッツ王国では、令嬢の十六歳の誕生日は社交の場へのお披露目をするためにパーティーが開かれるのが一般的だ。

その際のエスコート役は、特別な意味を持つことになる。父親や兄といった肉親以外でその大役を務められるのは、大抵の場合婚約者だ。お披露目パーティーの際に婚約が成立してなかったとしても、いずれは婚約するものと誰もが考える。

フィリップはエイミーと多少の血のつながりはあるが、肉親と呼べるほど近しい間柄ではない。

なのに数日前、クリフォード公爵に呼び出され、この大役をおおせつかってしまった。

どうしてこのようなことになったのか、さっぱりわからない。

何しろフィリップは、初対面で彼女のことを罵倒したのだ。

あれは十一年前、フィリップが七歳、エイミーが五歳の時のことだった。

――おまえの母親は庶民の出なんだってな。いくら父親が公爵家の正当な血筋を持ってて国王様の信頼が厚くたって、おまえの中には卑しい庶民の血が流れてるんだ。そんなおまえが貴族を名乗るなんて間違ってるんだぞ！

正式に引き合わされる前に出会ったエイミーに、フィリップはそ

う暴言を吐いた。

――おまえは大きくなったらアランネル侯爵の養子となり、いずれはアランネル侯爵となるのですよ。

物心つく前から、そう聞かされて育った。

アランネル侯爵夫妻に子どもがいないため、次の家格を持つグロスタ侯爵の家から養子を出し、アランネル侯爵位を継がせる。これは、もしもの時も円滑に爵位を受け継いでいくために、この国に貴族が誕生したはるか昔から取り決められていることだった。

それが十一年前、当時のクリフォード公爵の嫡子に隠し子がいたことが発覚したことで、この話はなかったことになる。

当時のアランネル侯爵夫人の友人として邸に滞在していた女性が、実は当時の（くどいようだが現在と状況が違うので繰り返す）クリフォード公爵家の次期当主の内縁の妻だったというのだ。

元クリフォード公爵跡取と元アランネル侯爵の間にある協定が結ばれたことによって、フィリップの立場が消えてしまった。

結ばれた協定によると、元クリフォード公爵跡取の内縁の妻と隠し子を元アランネル侯爵が保護しその隠し子に跡取の資格を与える代わりに、跡取は侯爵に公爵位を譲るのだとか。そして空位になるアランネル侯爵位には、グロスタ侯爵家の当主が、グロスタ侯爵位にはクレンネル侯爵家の当主がおさまる。

グロスタ侯爵家では、長男であるフィリップはアランネル侯爵家に養子に出すものとみなし、次男が跡取としてすでに周知されていた。つまり、協定によると、アランネル侯爵位を継げるのは、フィリップではなく弟ということになる。

クリフォード公爵位は隠し子のもの、アランネル侯爵位は弟のもの。

そうしてフィリップが継ぐべき爵位は消え、立場が宙ぶらりんに

なってしまったのだ。

両親も使用人たちも、フィリップをどう扱っていいのか迷い、変に遠慮するようになる。

フィリップは先の見えない自分の将来や周囲の人々からの扱いにいらだち、状況が一変して間もなく引き合わされることとなった問題の隠し子に、そのいらだちをぶちまけてしまった。

――は、母親が庶民の出のくせして、貴族の令嬢ぶりやがって！　おまえさえいなければ、クリフォード公爵位は俺のものになるはずだったんだ！　だからおまえは俺と結婚しなくちゃいけないんだ！

頭に血がのぼっていたとはいえ、何と言うことを口走ったのか。だが、だからこそ信じられない。暴言を吐いた相手を、本当に結婚相手に考えると誰が思う？

跡取の立場を譲り国王の側近としての務めに専念するようになった元跡取のケヴィンと、国が安定したところで勇退したクリフォード公爵から爵位を譲り受けた元アランネル侯爵ハンフリー。この二人がエイミーを溺愛していることはよく知っている。二人がフィリップの暴言を知っていることも知っている。

なのに二人はフィリップがエイミーと会うのをこれまで許してきて、今回とうとう愛娘の婚約者の立つべき位置に据えてしまった。

継ぐべき爵位を失ったフィリップに同情してのことなのか。

ここ、ラウシュリッツ王国では、女性は爵位を継ぐことができない。女性に相続権がある場合、その夫が爵位を継ぐことになる。

エイミーと結婚すれば、フィリップは失われた相続権を再び手にすることができ、丸くおさまる。

だが、そのためにかの二人がエイミーの意思を無視するとは思えない。

つまりは、フィリップがエスコート役として隣に立つのを、エイ

ミー自身が了承していることになる。

クリフォード侯爵令嬢エイミーは、自らが主役となる今宵のために、薄紫色のドレスとアメジストを使ったアクセサリーを身に着けていた。ブルネットの髪、紺色の瞳を持つエイミーに、それらはよく似合っている。

父親譲りの無表情であっても、その姿は称賛するにふさわしい。

「フィリップ？」

文句の一つも言おうとエイミーに目を向けそのまま見とれてしまっていたフィリップは、その声に我に返り見つめ返してくるエイミーから慌てて目をそらす。

小首をかしげるエイミーに、周囲に聞こえないよう声を小さくした。

「何で俺なんだ？　十六歳の誕生日のエスコート役がどういう意味を持つか、知らないわけじゃないだろ？」

すると令嬢は、無表情のまま問い返す。

「そういうあなたは、どうしてエスコート役を引き受けてくださったのですか？」

フィリップはみるみる真っ赤になり、その顔を隠すようにそっぽを向いた。

「ケ、ケヴィン様やハンフリー様に頼まれて、断れるわけがないだろ！？」

そんなの言い訳だと、フィリップ自身、とっくにわかっている。

公爵令嬢の婚約者　2／4

アランネル侯爵邸に商家の娘が子どもを連れて滞在しているということは、十一年前の発覚以前から知られていることだった。その商家の娘というのは、当時のアランネル侯爵夫人、現在のクリフォード公爵夫人イリーナの友人で、隣国の戦火を逃れてラウシュリッツ王国にある実家に身を寄せていたのだと、フィリップは最初聞かされていた。

子ども共々、ごく限られた人の前にしか姿を現さない人物で、物心つくまえからアランネル侯爵邸に頻繁に通わされていたフィリップも、初めて顔を合わせたのが発覚――正しくは“公表”か。関係者が周知して回っていたから――した後のことだった。

庶民というものはみなこんな感じなのかもしれないが、エイミーの母親であり、商家の娘であるアネットという女性は実に奇特な人物だった。侯爵邸で客人として扱われながらもそれを鼻にかけることなく控えめで、国王に結婚を許されたというのに、それすらも庶民の出だからと言って断ったというのだ。

公爵家の跡取と庶民の娘。本来なら許されるはずのない結婚も、跡取がその立場を他者に譲り、実力をつけた国王が命令として下せば、貴族たちも反論できず、何の問題もなく結婚できるはずだった。

だがアネットは、正当な伴侶の座を辞退し、今も日陰の身として邸の隅でひっそりと暮らしている。

その本当の理由をフィリップが聞いたのは三年前、フィリップが十五歳になった時のことだった。

――実はあたし、貴族の血を引く商家の娘じゃなくって、クリフォード公爵邸の前に捨てられてた素性のわからない身なのよね。

人払いはしたけれど、このような衝撃的な事実を、アネットはけ

ろっとした様子で告白した。
貴族は血統を重んじる。庶民であってもアネットの存在が認められているのは、子爵家の血筋を引いているといわれているからだ。それがあったから、国王も結婚を勧めようとした。
けれども、どこの誰の子ともわからないと知れたら、血統至上主義の貴族たちから何を言われるかわからない。下手をすれば彼女の血を引くエイミーは、相続権をはく奪されるかもしれない。
――そのような重大な話を俺にしていいんですか？
冷汗を流しながら考えた末、フィリップがそう言うと、アネットは何故か満足そうにほほえんだ。
――そういう聞き方をしてくれるということは、フィリップはバラしたりしないと約束してくれるということでしょ？
――だったら話す前に、絶対に内緒にするようにと約束を取りつけてください！　危なっかしすぎます！　もし俺が触れまわったりしたらどうするつもりだったんですか！　バレてただでは済まないのは、あなただけじゃないんですよ！？
親子ほども歳の違うアネットを叱りつけると、彼女は嬉しそうにころころと笑った。
――フィリップだったらそう言ってくれると思ってたわ。だから話したの。
今もめったに人に会わずほとんど部屋の中で暮らしているのは、以前クリフォード公爵邸で下働きとして働いていたことを知られてしまわないようにするためだという。
アネットが結婚の許可を辞退してまで素姓を隠した理由は、この話からだいたいわかった。
はっきりと聞かされたわけではないけど、多分エイミーのためだ。エイミーの立場を守るために、ろくに部屋から出られない不自由な生活を、アネットは自身に課しているのだ。
そうまでして守り通そうとしてきた秘密を何故フィリップに話したのか、未だに謎だったりする。

だが、そうしてまでアネットが子どもたちを守ろうとしても、口さがない者たちの影口は絶えない。貴族の血を引いていても庶民は庶民で、その庶民の血を引くエイミーも所詮庶民だと、一部の者たちから蔑まれている。

それでも、エイミーと結婚できれば公爵位を継承できるとあって、彼女への求婚はひっきりなしだ。

不機嫌を装いパートナーとの最初のダンスを踊り終えると、フィリップは義務を果たしたとばかりにさっさとエイミーから離れた。

フィリップにとって、エイミーとのダンスは心臓に悪い。手を取り、背中に腕を回して支えれば、その近さに心臓がばくばくと暴れ出す。

エイミーから距離を取り壁際まで行って、フィリップははぁと息をついた。

いつまで保つかな、俺の心臓……。

人に聞かれたら笑われそうな台詞を心の中でつぶやきながら、息を整える。

フィリップの周囲の男たちのエイミーへの感想は、“恋愛する気になれない女”だった。血筋をあげつらい、相手にならないと言っている者もいる。が、それだけでなく表情のない彼女は冷たい女だと誤解されることが多く、そんな女と恋愛してもつまらないと言うのだ。

彼らの認識は間違っている。

エイミーは表情筋が固いだけで、内面は情感豊かだ。それに人の心を読み取ることに長けていて、さりげない気配りができ、彼女を相談相手として頼りにしている友人は多い。友人の数そのものは、出自のせいで敬遠されがちなため、公爵令嬢としては少なめと言えるが。

他にも、フィリップだけが知っていることがある。エイミーは自分の表情のなさを気にして、影ながら笑顔をつくる努力をしているのだ。

そうした彼女のよいところを、求婚者たちはどれだけ知っているのか。

フィリップがエイミーの隣に立ったことで、彼らは一様に顔色を悪くしたが、婚約者と紹介されたわけではないことに安心したのか、ダンスをする人々を避けて広間の端のほうへと移動した彼女にさっそく群がっていた。

彼女に男が群がるのは、見ていて気分のいいものじゃない。だが目をそらせずにいると、何やら様子がおかしいことにフィリップ気付いた。

人込みをかき分け、彼女のもとへ急ぐ。

近付くにつれ、会話が聞こえてきた。

「納得いかない！　何であいつがエスコート役なんだ？」

「あんな暴言を吐くやつのどこがいいんです？　お父上方はお許しになられたのですか？」

自問さえしたその言葉に、フィリップはぐっと喉をつまらせ脳裏に反省をちらつかせる。

が、次の言葉に、そんな殊勝な思いも吹っ飛んだ。

「気のある振りをして俺たちを誘って、爵位を餌に僕たちをもてあそんだのか？」

そう言って詰め寄る男の肩をつかんでエイミーから引き離し、フィリップは彼女を背中にかばった。

「エイミーがそんなことするわけないだろ！」

フィリップに割って入られた男は、いまいましそうににらみつけてくる。

「何でかばってるんだ？　おまえこそ、いつもエイミーをいじめてるくせに」

「俺はおまえらみたいに、かよわい女を寄ってたかっていじめるような趣味はないんでね」
嫌味を言ってにやり笑ってみせると、男は自覚があったのか、わずかに顔をしかめる。が、すぐに怒りをあらわにし、フィリップの二の腕に手をかけ無理矢理どかそうとした。
「おまえには関係ないだろ？　彼女にはこけにされたんだ。黙っているわけにはいかない」
「エイミーがおまえに気のあるそぶりを見せたってことか？」
フィリップはそれとわかるように大げさに鼻で笑う。
「こいつが礼儀正しくもてなしてくれたことに、おまえが勝手にのぼせただけだろ？」
「エスコート役に選ばれたからって、いい気になるな！」
男は逆上し、フィリップの胸倉をつかみ上げる。襟元をねじられて首を絞められながらも、フィリップは怒鳴った。
「もてなされたのは自分だけだと思うなよ！　そういう意味では俺だってその他大勢なんだ！」
そうだ。エイミーはどんなに暴言を吐くフィリップでも、訪問すれば応接室に通して手厚くもてなしてくれた。誰に対しても変わらぬその態度に、フィリップは何度ひそかに胸を焦がしたことか。
息荒く男をにらみつけていたフィリップは、そのうち周囲がやけに静かだと気付いた。男の手も、いつのまにかゆるんでいる。
男は呆然としながらつぶやいた。
「おまえ、もしかして彼女のことが好きなのか？」
その言葉に、フィリップはすぐさま反応した。
「ば……っ、そんなわけねーよ！」
あれだけ暴言を吐きながら彼女のことが好きだなんて。他人に知られたら恥ずかしすぎる。

するとエイミーを取り巻いていた別の男が、ぼそりと言った。
「“俺だってその他大勢なんだ”って、好きだって言ってるようにしか聞こえないんだけど？」
エイミーへの恋心は完全に隠せてると思っていた。
いや、実際今まで隠せていたようだ。
自分の失言を指摘され、一気に頭に血がのぼる。
「違うっ！　違うんだあぁ！」
フィリップは叫び声を上げながら、その場から逃げ出した。

もう戻れない……。

パーティー会場に。
そして人前にも。

十八歳にもなってあの醜態。
衆目のある中、暴言の影に隠してきた恋心を知られてしまって。
なりふり構わず走り出してしまって。

どれだけ恥かきゃ気が済むんだ……。

しかも、さっきのやりとりで気付いてしまった。
爵位目当てだとばかり思っていた求婚者たちが、案外エイミー自身に好意を持っていることを。
“恋愛する気になれない女”は照れ隠しだったのか、そういう評価をつけてライバルを遠ざけようというこざかしい魂胆だったのか。
同じ穴のむじな。
そんなことわざが頭の中をよぎる。

いや、奴らが実は同類だったという話はどうでもいい。
フィリップは自らの身の処し方について考えなくてはならなかった。
本当に人前から姿を消すことなどできない。これでも、実力をともなわなければ上級貴族であっても入隊を許されなくなった近衛隊

に所属する、名誉ある身だ。明日も王家の方々を護衛する当番がある。

せめて今夜だけでも、傷心をいやすために姿を隠そう。

そう心に決めたのに、パーティー会場を飛び出そうとするところを、クリフォード公爵に捕まってしまった。

一つだけ救いといえば、人目につかない柱の影に引きずり込まれたことだろうか。

柱の影では、クリフォード公爵夫人イリーナが待ちかまえていた。その夫君たるクリフォード公爵は、もちろんハンフリーである。前クリフォード公爵トマスは、会場の目立つ場所で愛孫娘の晴れの日のお祝いを述べにくる人々に囲まれてご満悦中だ。

「なかなか派手に騒いでくれたな」

フィリップの二の腕をつかんで離さないハンフリーが、傍らからじろっとにらみつけてくる。

「……申し訳ありません」

義理とはいえ、溺愛している娘の社交界デビューの日にあんな騒ぎを起こされれば腹ただしいことこの上ないだろう。おまけにイリーナにくすくすと笑われて、フィリップの落ち込みはさらに増した。

「何かといえば娘につっかかって、嫌っているのだとばかり思っていたが、君は娘のことが好きだったのだな」

「えっ、いえっ、それは……」

違うと言いたかったけれど、ここで否定してしまっていいものかどうかと躊躇する。

否定すれば、“娘のどこが気に入らないんだ！”ときそうだな……。

ふと、自分が彼らの養子になっていたらどうなっていただろうと

考える。
　最初の約束の通りにいけば、ハンフリーとイリーナはフィリップの義理の両親になるはずだった。そのつもりで父母同然に慕っていた二人は、フィリップの養父母となることはなく、エイミーを養女に迎えた。彼らを横取りされたと思ったことも、フィリップが暴言に走った原因の一つだ。
　横取りされたという考え自体、根拠も意味もない癇癪のようなものだったと気付いたのは数年後のこと。ハンフリーとイリーナは、フィリップが養子にならないと決まる前も後も、変わらない態度を取ってくれていた。
　だいたい、子に恵まれず親戚連中から非難を浴びてきた二人にとって、フィリップはその事実を責めるがごとく押し付けられた存在だった。それなのにかわいがってもらえたのだから、恨むのではなく感謝しなくてはならないところだ。二人を肩身の狭い思いから解放したエイミーにも。
　ハンフリーはケヴィンから公爵位を譲られ、クリフォード公爵家の血筋を跡継ぎとして迎えることで血をつなぐという貴族の役目を果たし、それまでさんざん文句を言っていた親戚連中を黙らせた。
　それもエイミーの存在あってこそのこと。二人を敬愛するフィリップは本来ならば彼女に感謝したいくらいだ。
　だが、初対面が悪かった。あんな出会い方をしたせいで、フィリップはいまだ彼女に素直になれずにいる。

　否定できず、かといって当然肯定もできずにいると、イリーナが楽しげにハンフリーに答える。
「言った通りでしょう？　フィリップはただ照れているだけで、エイミーのことを誰よりも愛してくれているんですわ」
　フィリップは目をむいた。その言い方だと、前からわかっていたと言わんばかりだ。
　てか、本人を目の前にしてそーいうことを言うか！？

「そうだな。恥も外聞もかなぐり捨てて愛する女を守れる男はそうそういない。フィリップ、娘のことをよろしく頼むよ」
そう言って、ハンフリーはフィリップの肩をぽんと叩く。
フィリップは唖然とした。
俺、まだ返事してないんだけど！？
二人の言い方だと、まるでフィリップがエイミーとの結婚を承諾したかのように聞こえる。

……“結婚”？

フィリップは、心の中に浮かんだこの言葉に反応して、頭に血を昇らせた。
今まで考えたことなどなかった。
さんざんいじわるを言ってきた相手を、エイミーやエイミーの親たちが結婚相手に考えるなんて思ってもみなくて。
けれど気付いてしまう。フィリップと結婚しないということは、エイミーは別の男と結婚するということで。
この話、断ったりなんかしたら……。

唖然から一転、呆然としていると、ハンフリーとイリーナが離れていって、入れ替わりにケヴィンがやってきた。
クリフォード公爵家の直系で、前国王の姉を母親に持ち、側近として国王の信頼も厚い人物。
恵まれた立場を持ちながら、素性のわからない女性を実質的な伴侶に迎え、公爵位を放棄した。
何故ケヴィンが祝福されない相手との婚外婚を望んだのか、フィリップは事情もケヴィンの心情も知らない。エイミーと同じ表情筋の固い顔からは何もうかがえず、あまり接したことのないフィリップにとって謎の多い人物だった。
ケヴィンはフィリップの前に立ち、冷え冷えとした声で言った。

「アネットから、話を聞いたそうだな？」
話とは、アネットの本当の素姓のことだろう。責められているように感じ腰が引けそうになりながら、フィリップは無言でうなずく。
長身のケヴィンは意識的にか無意識か、見下ろすことでフィリップに威圧を与えながら淡々と話し出した。
「エイミーの立場は危うい。今でさえ、母親が庶民の出であるということから蔑視が絶えない。公爵夫人という立場は、妻であるだけではいられない。親族や派閥の多くの夫人たちをまとめ、王妃陛下、ひいては国王陛下、国に仕えなくてはならない。国王陛下、王妃陛下が目をかけてくださっていても、あの子の存在に反発を覚え従うことを拒絶する者はいなくならないだろう。公爵夫人となった時、本当の試練があの子に振りかかることを知っていてもらいたい」
ケヴィンがエイミーに父親らしく接している姿を見たことはない。そもそもエイミーと一緒にいるところを目撃したのも数えるほどだ。しかし実の父親として、エイミーのことを心配しているらしい。
だが、人に責任を丸投げしているように聞こえて、フィリップは反論した。
「オリバーがいるんですから、彼に跡を継がせればいいじゃありませんか。そうすればエイミーは爵位に煩わされることなく、今よりマシな人生を送れたんじゃありませんか？」
オリバーとは、エイミーの五歳年下の弟だ。今年十一歳になる彼は、近衛隊士見習いとなって、城に通い剣の腕を磨いている。頭は悪くなく、素直で人当たりがよく、立ち回りが上手くて庶民の血を引くことで嫌味を言われたりする姿はあまり見ない。彼なら公爵になっても上手くやるだろうに、何故彼を公爵にしようとせず、エイミーに相続権を持たせるのかわからない。
威圧に耐えて見上げれば、ケヴィンはやはり感情の読めない顔をしたまま言う。
「エイミーが望んだから、クリフォード公爵もわたしも、あの子に相続権を与えることにしたんだ」

「え……」
エイミーが望んだ？
何事も諾々と受け入れるばかりで、自分の意見をほとんど口にすることのないエイミーが？
「あの子には、正直重荷を背負わせたくないと思っている。わたしが自分のしあわせを願うあまりに、あの子は部屋からろくに出られない不自由な幼少期を過ごし、わたしの子だと周知してからは他人の蔑みの視線にさらすこととなってしまった。直系の血筋を持ちながらクリフォード公爵の養女となることで妬みを受けるようになり、身分は得ても友人をなかなか得られず、その孤独をどうしてやることもできなかった。
そんな不遇に見舞われながらも弱音もわがままも言わないあの子が、相続権だけはどうしてもほしいと言ったからには、わたしはそれを承諾することしかできない」
エイミーが何故相続権を欲したのかも気になる。けれど、それよりもケヴィンの、エイミーに申し訳ないと思いながらも突き離した態度に腹が立つ。
「そういう言い方はないと思います。不幸に娘を陥れたのはあなた自身でしょう？　あなたには彼女に償い、幸せにする義務があると思います。不幸に向かうのを止めるのも、親の役割なんじゃないですか？」
そう言ってフィリップがにらみつけると、表情が一切変わらないと思っていたケヴィンの顔に、うっすらと自嘲の笑みが浮かんだ。
「父親が娘のためにしてやれることはたかだか知れている。いつまでも手元に置いておけないのだから。娘の人生の大半を預けることになる者をよくよく吟味し、ゆだねるしかないのだよ」
あきらめともとれるその表情に虚を突かれ、フィリップは軽く息を飲む。
しあわせであれと願う人を、他人に預けなくてはならない悔しさ。
そんな経験をフィリップはしたことがないけれど、気持ちが何と

なくわかるような気がした。

ケヴィンがふと横を向く。

「あの子が壁の花になっている」

フィリップもそちらのほうを向くと、壁際とまではいかないが、会場の隅で一人ぽつんとたたずむエイミーの姿が見えた。

さっきまで群がっていた男たちは近くに見当たらない。あの騒ぎがあったせいか、パーティーの参加者たちは話しかけづらそうに彼女を遠巻きにしていた。

「今宵の主役を会場の中心に呼び戻すのは、君の役目だと思うが？」

責任を取れと言外に言われ、フィリップはしぶしぶエイミーのほうへと足を向ける。

その背に声をかけられた。

「あの子に頼まれて、仕方なくエスコート役を君に譲ったんだ。娘のことは任せた」

フィリップは思わず振り返る。ケヴィンは先程の笑みよりもっとわかりやすい苦笑を浮かべた。

「あとは娘に聞きたまえ」

その言葉に押されるようにして、フィリップはエイミーのもとへと急いだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0825s/

らっきー♪

2011年10月7日05時50分発行